

# 平安京左京六条二坊六町

平安京跡研究調査報告

第17輯

財團法人 古代學協會

昭和61年

## 目 次

はじめに	1
第1章 調査の経過	3
第1節 A区の調査	3
第2節 B区の調査	4
第2章 遺構と遺物	8
第1節 弥生時代	8
第2節 平安時代	11
第3節 鎌倉・室町時代	24
第4節 江戸時代	43
第3章 左京六条二坊六町の地	54
第1節 平安・鎌倉時代	54
第2節 室町時代以降	55
付節 本圀寺文書目録	59
おわりに	63

## 図 版 目 次

- |   |  |
|---|--|
| <p>図版第 1 上：調査地全景（調査前）<br/>下：東半部完掘状況</p> <p>図版第 2 上：北西部完掘状況<br/>下：南西部完掘状況</p> <p>図版第 3 上：A区溝 2 全景<br/>下：同，断面土器出土状況</p> <p>図版第 4 上：A区井戸 5<br/>下：A区井戸 6</p> <p>図版第 5 上：A区井戸 4，上層遺物出土状況<br/>下：同，完掘状況</p> <p>図版第 6 上：B区井戸 5<br/>下：B区井戸 4</p> <p>図版第 7 上：B区井戸 2<br/>下：同，木柁残存状況</p> <p>図版第 8 上：A区井戸 3<br/>下：同，完掘状況</p> <p>図版第 9 上：B区井戸 1<br/>下：同，内部</p> <p>図版第 10 上：d-6 土坑 2，遺物出土状況<br/>下：同，完掘状況</p> <p>図版第 11 c-6 土坑 2，遺物出土状況</p> <p>図版第 12 上：c-7 土坑 1・2，遺物出土状況<br/>下：c-7 土坑 1，刀子出土状況</p> | <p>図版第 13 上：d-8 土坑 5，遺物出土状況<br/>下：同，完掘状況</p> <p>図版第 14 上：d-9 土坑 1，遺物出土状況<br/>下：c-8 土坑 1，遺物出土状況</p> <p>図版第 15 上：d-8 土坑群<br/>下：同，銅銭出土状況</p> <p>図版第 16 上：c-5 土坑 3<br/>下：c-5 土坑 2</p> <p>図版第 17 上：d-9 土坑群，遺物出土状況<br/>下：同，完掘状況</p> <p>図版第 18 上：c-3 土坑 2<br/>下：e-5 土坑 2</p> <p>図版第 19 上：A区溝 1<br/>下：同，完掘状況</p> <p>図版第 20 上：A区溝 1，断面<br/>下：同，下顎骨出土状況</p> <p>図版第 21 上：b-5・6 区付近，柱穴遺構<br/>下：d-6 区，柱穴切合い状況</p> <p>図版第 22 上：c-9 土坑 2，遺物出土状況<br/>下：A区北部，土採取坑</p> <p>図版第 23 出土輸入陶磁器類</p> <p>図版第 24 本国寺惣境内之図(平安博物館蔵)</p> |
|---|--|

## 插 圖 目 次

第1図 調査地位置図 …… 2	第23図 A区井戸3出土遺物実測図 …… 29
第2図 検出遺構平面図…… 折込	第24図 d-6土坑2遺構実測図 …… 29
第3図 A区溝2出土土器類実測図 …… 9	第25図 d-6土坑2出土遺物 実測図 …… 30
第4図 A区溝2出土石器実測図…… 11	第26図 c-4土坑3遺構実測図 …… 31
第5図 A区井戸5遺構実測図 …… 12	第27図 c-4土坑3出土遺物 実測図 …… 31
第6図 A区井戸5出土遺物 実測図(1) …… 13	第28図 d-5土坑3出土遺物 実測図 …… 32
第7図 A区井戸5出土遺物 実測図(2) …… 14	第29図 e-5土坑3出土遺物 実測図 …… 32
第8図 A区井戸5出土 軒瓦拓影・実測図 …… 8	第30図 c-7土坑1遺構実測図 …… 33
第9図 A区井戸5出土 瓦類拓影・実測図 …… 16	第31図 c-7土坑1出土遺物 実測図(1) …… 33
第10図 A区井戸6遺構実測図 …… 17	第32図 c-7土坑1出土遺物 実測図(2) …… 34
第11図 A区井戸6出土遺物実測図 …… 18	第33図 c-6土坑2遺構実測図 …… 34
第12図 A区井戸6出土 軒瓦拓影・実測図 …… 19	第34図 c-6土坑2出土遺物 実測図 …… 35
第13図 A区井戸6出土 瓦類拓影・実測図 …… 20	第35図 d-9土坑1遺構実測図 …… 36
第14図 A区井戸4遺構実測図 …… 21	第36図 d-9土坑1出土遺物 実測図 …… 36
第15図 A区井戸4出土遺物実測図 …… 22	第37図 c-9土坑1遺構実測図 …… 37
第16図 B区井戸5出土遺物実測図 …… 23	第38図 c-9土坑1出土遺物 実測図 …… 37
第17図 A区溝1土層断面図 …… 24	第39図 c-8土坑1遺構実測図 …… 37
第18図 A区溝1出土遺物 実測図(1) …… 25	第40図 b-8土坑群遺構実測図 …… 38
第19図 A区溝1出土遺物 実測図(2) …… 26	第41図 b-8土坑2出土遺物 実測図 …… 38
第20図 A区溝1出土遺物 実測図(3) …… 27	第42図 b-8土坑群出土 銅銭拓影(1) …… 39
第21図 B区井戸2遺構実測図 …… 28	
第22図 A区井戸3遺構実測図 …… 28	

第43図	b-8 土坑群出土 銅銭拓影(2) …… 40	第53図	d-4 土坑2 出土遺物 実測図(1) …… 45
第44図	d-8 土坑5 遺構実測図 …… 40	第54図	d-4 土坑2 出土遺物 実測図(1) …… 46
第45図	d-5 土坑1 遺構実測図 …… 40	第55図	B区溝1 土層断面図 …… 47
第46図	d-5 土坑1 出土遺物 実測図 …… 41	第56図	B区溝1 出土遺物実測図…… 48
第47図	c-5 土坑2 出土遺物 実測図 …… 41	第57図	その他の出土遺物 (江戸時代1) …… 50
第48図	c-5 土坑2 出土遺物 実測図 …… 41	第58図	その他の出土遺物 (江戸時代2) …… 51
第49図	b-5 土坑1 出土遺物 実測図 …… 42	第59図	その他の出土遺物 (江戸時代3) …… 52
第50図	d-6 ピット群出土遺物 実測図 …… 42	第60図	その他の出土遺物 (江戸時代4) …… 53
第51図	c-9 土坑2 出土遺物 実測図 …… 43	第61図	上杉家本『洛中洛外図』 部分 …… 56
第52図	その他の出土遺物 (鎌倉・室町時代) …… 44	第62図	『本国寺惣境内之図』部分 …… 58

## 例 言

1. 本書は、平安博物館が、清水建設株式会社の委託を受けて実施した、ビル新築予定地の発掘調査報告書である。
2. 執筆は、第2章、第1節の遺物の項を森下英二(1～4)・南博史(5)、第4節の遺物の項を岡佳子、第3章は藤本孝一が行ない、その他は植山茂が担当した。
3. 第1図は京都市計画局発行の2500分の1都市計画図『島原』を部分使用した。
4. 遺構実測図は80分の1、遺物実測図は原則として3分の1である。
5. 国土座標は第6系に基づいている。
6. 本書の編集は植山が行なった。

## はじめに

京都市の五条通りと堀川通りの交差点は、国道1号線と9号線の分岐点でもあり、現在は京都市内でもかなり交通量の多い場所である。このたび、この五条堀川交差点の西南角に土地所有者の下嘉商店とカネボウ不動産によりテナントビルの建設が計画された。

この地点は京都市埋蔵文化財研究所の復原によると、平安京の条坊制では、左京六条二坊六町の堀川小路に面したあたりと推定され、室町時代以降は京都における法華宗の一拠点となつて、最盛期には京内で12町を占めていた本国(圀)寺の旧境内にもあたる(第1図)。

また、この地の南方で京都市埋蔵文化財研究所が行なった、東急ホテル建設に伴う発掘調査において本国寺に関すると思われる遺構も検出されている<sup>1)</sup>他、周辺の立合調査でも遺構・遺物の検出されることもあり<sup>2)</sup>、今回のビル建設予定地内でも何等かの埋蔵文化財の存在が予想された。このため敷地内で3箇所の試掘を行なった結果、いずれも室町～江戸時代の遺物包含層が認められたことから、京都市文化観光局文化財保護課の指導を得て、建物建築範囲の全面発掘調査を原因者負担で実施することとなり、平安博物館がこの調査の委託を受けた。調査の要項は以下の通りである。

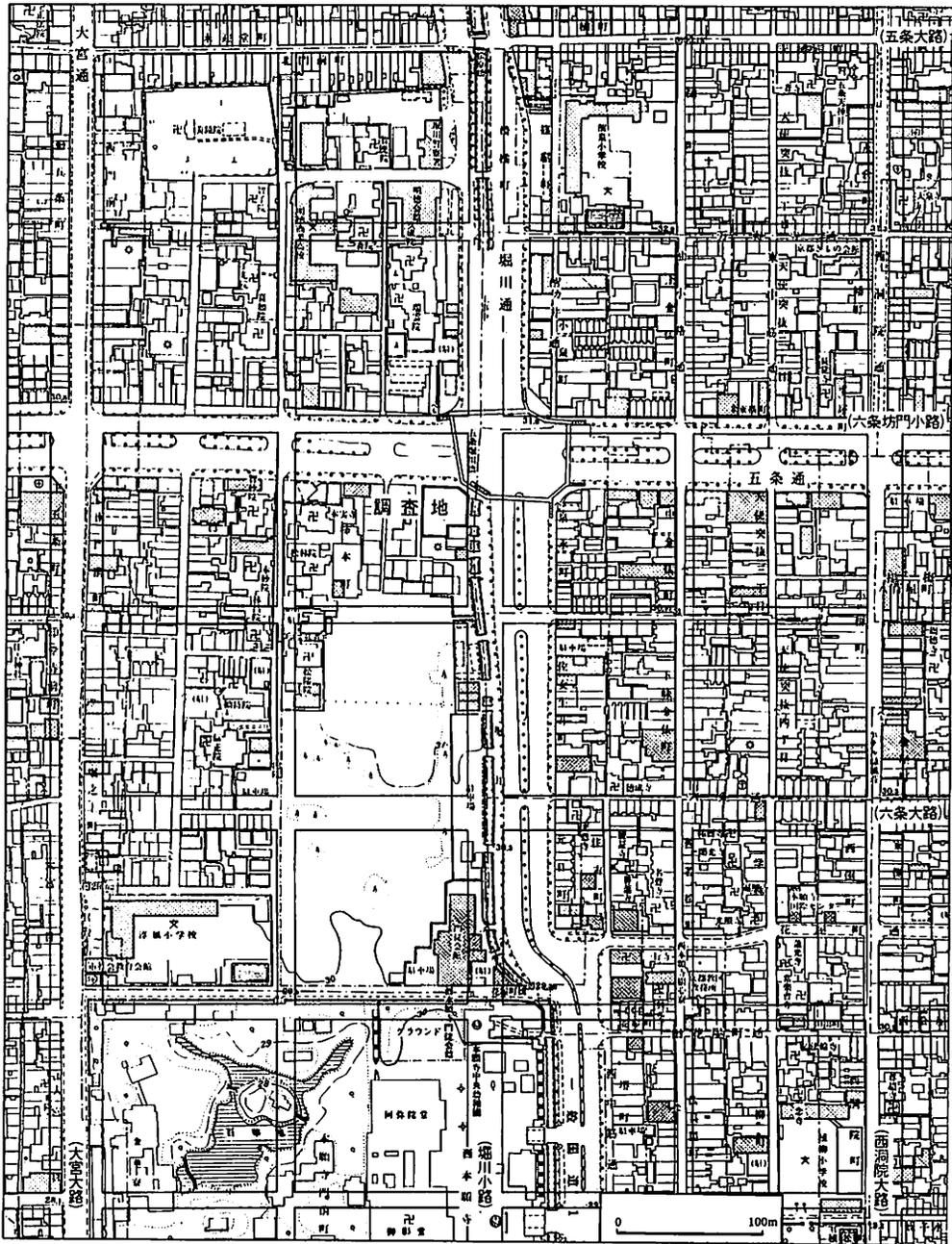
調査主体	財団法人古代学協会・平安博物館(館長 角田文衛)
調査担当	平安博物館 考古学第2研究室 片岡 肇 考古学第4研究室 植山 茂(調査主任) 文献学研究室 藤本 孝一
調査地	京都市下京区五条通り堀川西入る柿本町579番地
調査面積	約800㎡
調査期間	昭和60年1月18日～4月8日

発掘調査中は植山と藤本が常駐し、片岡が全体を統括した。また、作業員としては中山組の方々をお願いし、調査補助員として以下の諸氏の協力を得た。

上杉 英世, 宇野 克実, 清滝 龍, 小山知佐子, 柴田 潮音, 出口 瑞鳥,  
中島 正, 中村 健二, 西尾 智樹, 西村 典子, 藤平 寧, 横田 清恵

なお、現場調査の間は、ビルの建築を担当される清水建設の方々にも色々と便宜をはかっていただいた。調査中は天候に悩まされたが、若干の期間延長で現場作業を終えた。発掘終了後は引き続き整理作業を行ない、以下の諸氏の援助を得た。

飯田美佐子, 小山知佐子, 酒井 彰子, 須原久美子, 高橋 潔, 出口 瑞鳥,  
中村 健二, 西村 典子, 朴 賢淑, 藤友 陽子, 船戸 裕子, 森下 英二,  
横田 清恵, 脇上 礼子



第1図 調査地位置図

註

- 1) 京都市編『史料 京都の歴史』第2巻, (東京, 昭和58年), 図版434下, 他。
- 2) 京都市埋蔵文化財研究所編『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(京都, 昭和59年)。同『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度(京都, 昭和56年)。

## 第1章 調査の経過

調査地は五条通りと堀川通りの交差点の西南の角地で、敷地北側は五条通りの南側歩道に面し、東側は敷地のすぐ外を堀川が流れていたが、現在は暗渠となって植え込みがつけられている(図版第1上)。調査以前は木材の加工場として使われていたため、敷地の一部には製材機械の据え付けのために半地下状にコンクリート床の掘り込みがつけられていたが、これ以外はあまり大きな基礎の建物はなかったようである。

まず調査地西端の中程に基準点を設け、さらに全域を覆うように国土座標に基づいた4m方眼のメッシュを設定し、各方眼の呼び名は北西角から東へa~i、南へ1~9とした。また排土の関係から調査地を東西に分け、西半をA区、東半をB区とした。なお、調査地内の基準点の設置は新日本航測株式会社に依頼して行なった。

発掘調査に先立って行なった試掘調査の結果、現地表面から60~70cmまでは現代の整地土と見られたため、この深さまでは重機により掘削を行なうこととして、まずA区南端から着手した。B区については、A区の調査が一段落した時点で手を着け、A区の一部を埋め戻して土の置き場所にした。

### 第1節 A区の調査

A区では重機の掘削終了後、掘削面の清掃を行なうと、南半部では比較的安定した面が広がり、多数の土坑などの輪郭も検出された。北半部では、江戸時代の陶磁器類を多量に含む大きな掘り込みがあり、A区の中央部にも2箇所防空壕状の近代の掘り込みがあった。またb-2区の井戸はシックイ筒の井戸枠のもので(A区井戸1)、b-5区の井戸の枠は井戸瓦を一段に10枚づつ用いており(A区井戸2)、どちらも近年まで使用されていたようであった。検出された遺構は各時期にわたり、またかなり重複した状態であったが、すでにある程度の削平を受けているようで、各遺構の掘り込みの時期を面的にとらえることはできなかった。

A区北部の江戸時代の大きな掘り込みは、 $1.5 \times 2 \sim 3$ mほどの不正形の土坑が連続したものであるが、深さはだいたい検出面から70cm程度、標高29mほどで止まっていた。このあたりの地山は、高いところで標高30mあたりで検出され、全体に黄褐色の粘質土で部分的に灰緑色の砂層が入っている。不正形土坑は砂層を避けるように掘り込まれており、深さも黄褐色粘質土下層の礫層に至ったところまでであることから、この土坑群は壁土や屋根葺き土に用いるために地山の黄褐色土を掘り出した跡であろうと考えられる(土採取坑：図版第2上)。この土坑群の埋土には多量の陶磁器類が含まれており、大半は江戸時代後半期に属すると見られるが、d-4区の土坑(d-4土坑2)では江戸時代初期の遺物がまとまって出土しており、他の土坑にも江戸初期のものも混じっているため、この部分での土取りは江戸時代を通じて行なわれて

#### 4 第1節 A区の調査

いたらしい。

A区中央部から南部にかけては室町時代以前と見られる溝・井戸・柱穴・土坑など多数の遺構が検出された。溝は2条あり、1条は北東―南西方向の浅い溝状遺構で、弥生時代の自然流路と見られる(A区溝2)。もう1条は東西方向の溝で(A区溝1)、埋土には室町時代に属する遺物を多く含んでいた。井戸は、b-4区の井戸(A区井戸3)が室町時代、他(A区井戸4~6)は平安時代に属すると見られる。A区南半部では径10~40cmのピットが300近く検出され、穴底にやや扁平な石を置くものも多く、大半が掘立柱建物あるいは柵の柱穴になると思われるが重複が著しく、建物としてのまとまりは把握できなかった。ピット内からの遺物が乏しいため時期の認定は困難であるが、多くは室町時代以降のものと思われる。

土坑も平面形が円形や方形を呈するものが数十基検出されたが、この内には多量の土器類が入っていたものが20余りで、さらに刀子も埋納されていた土坑も3基あり、土坑の中で少なくとも20近くは墓であったと思われる。これもかなり重複して設けられているが、時期的にはおよそ13~14世紀前半代のもものと見られる。柱穴と土坑は切り合い関係にある部分もあるが、b-5・6区あたりには柱穴だけで土坑は見られず、この部分については建物と土坑(墓)が同時期に存在していたことも考えられる。

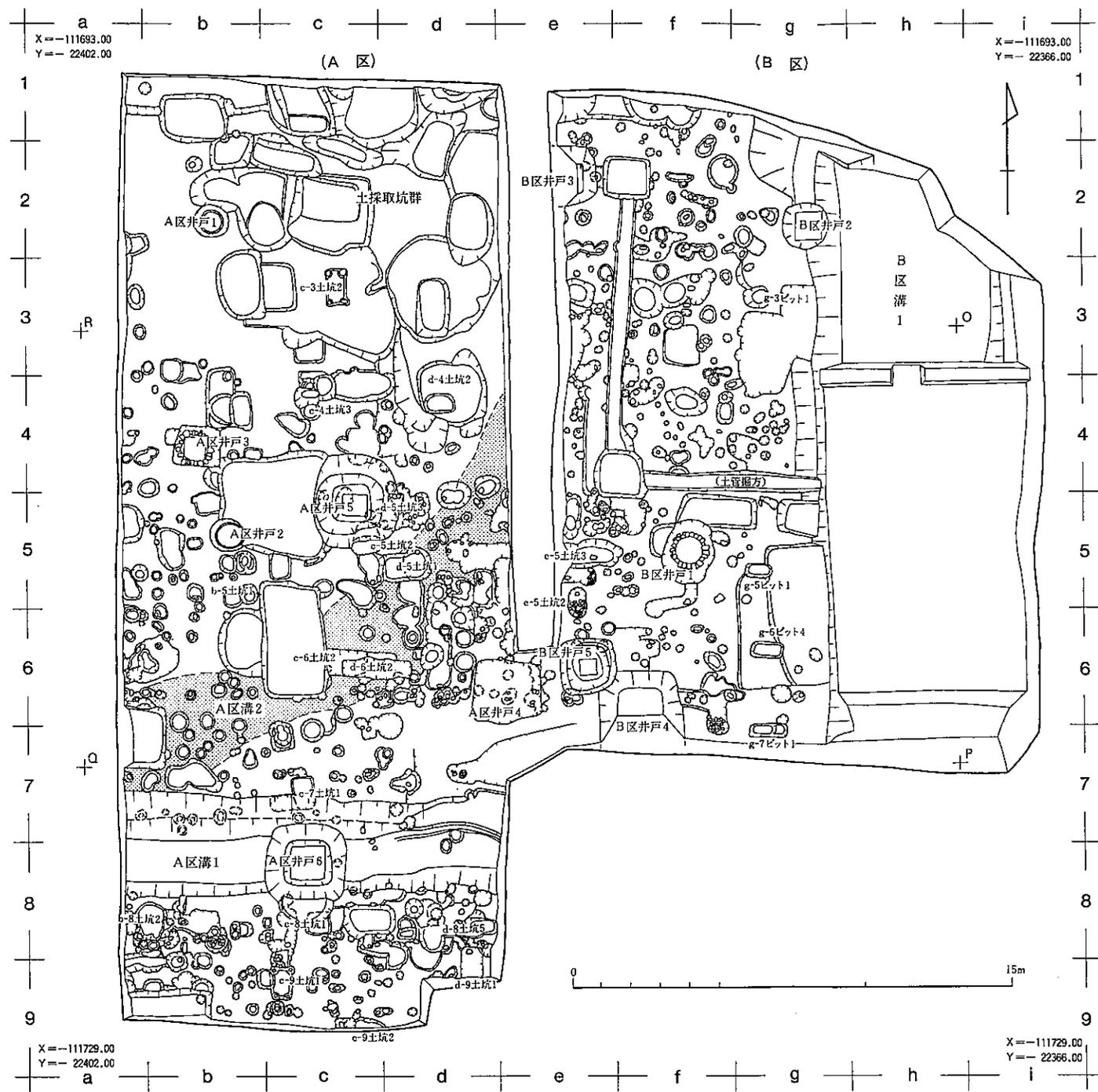
#### 第2節 B区 の 調 査

B区でも地表下60~70cmまでは重機により掘削を行なった。B区の東寄りあたりには先にふれたように、製材機械の据え付けのためのコンクリートの半地下室や基礎による攪乱が地表下約2mにおよんでいたが、この部分ではまだ地山にはいたらなかった。B区の西半部ではA区と同様に、重機掘削後の清掃で比較的安定した面を検出した。ただし、B区はA区に比べると後世、それもかなり新しい時期の掘り込みなどが多かった。

調査地の東端部は当初、六条二坊六町の東端にあたと推定していたことから、条坊に関する遺構の検出が期待されていた。ところが東端部は地下室の床や基礎を撤去してもなお江戸時代末ごろの遺物を含む暗褐色土で、かなり深くなることが予想されたため、全体の掘り下げは断念し、東北隅部分と南端の掘り下げで底を確認することにした。その結果、この部分は南北方向の大きな溝状遺構であることが判明した(B区溝1)。

B区の西半はA区と同様に、多数のピットや井戸などが検出された。ただし遺構を検出した面の標高はA区とあまり変わらないが、ピットなどはA区より浅いものが多いことから、調査地内の本来の地形は、北東から南西にやや傾斜していたものが、ある時点で平らに削平されたものと思われる。

B区で検出した井戸は5基で、1基は江戸時代、他は平安~室町時代のもものと見られる。江戸時代の井戸(B区井戸1:図版第9)は、屋瓦を井戸側に再利用したもので、最下部は花崗岩の自然石が用いられている。瓦は大半が室町時代のものであったが、江戸時代末ごろの棧瓦も混じっていた。また瓦当面に「大」の字銘のある軒丸瓦も用いられていたが(図版第9下)、



第2図 検出遺構平面図

これは本国寺の山号「大光山」を表わしている。なおこの井戸の周辺では特に江戸時代の瓦が大量に出土しており、これらは本国寺に直接関係するものと見られる。さらにg-3・5・6区には江戸時代の、掘立柱塀らしい柱穴列があり、その東の堀のようなB区溝1とあわせてこの部分が本国寺の東限かと考えられる。

## 第2章 遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代から江戸時代にいたる各時期の遺構が検出され、遺物もコンテナバットに300箱近く出土した。以下はその主要な遺構・遺物について、時期別に述べていく。

### 第1節 弥生時代

弥生時代の遺構としてはA区溝2(第2図網目部分, 図版第3)のみであるが、後世の遺構によりかなり寸断されて遺存状態はよくない。この溝は断面形が浅いU字形を呈して北東―南西方向をとる。溝底は両端であまり差はないが全体として南西側がやや低くなっており、深さは10~40cmほどで、幅は2~3mと一定していない。溝の埋土は砂と砂利の互層になっており、大きくは上下2層に分けられるが、上層から前期の土器が出土する一方、下層から後期の土器も出土している。溝内からは弥生式土器が100片あまり出土したが、いずれも摩滅が著しい。この溝は自然流路と見られるが、溝兩岸の数箇所で見られる杭のような径5cm程度の小穴が検出され、あるいは部分的に護岸がなされていたかもしれない。

弥生時代の遺物には前期から後期までの土器と石器がある。ほとんどがA区溝2に伴うものであるが、他の遺構からも若干混入した土器片が出土している。以下、図示し得たものについて時期別に記述していく。

#### 1. 前期の土器(第3図1・13)

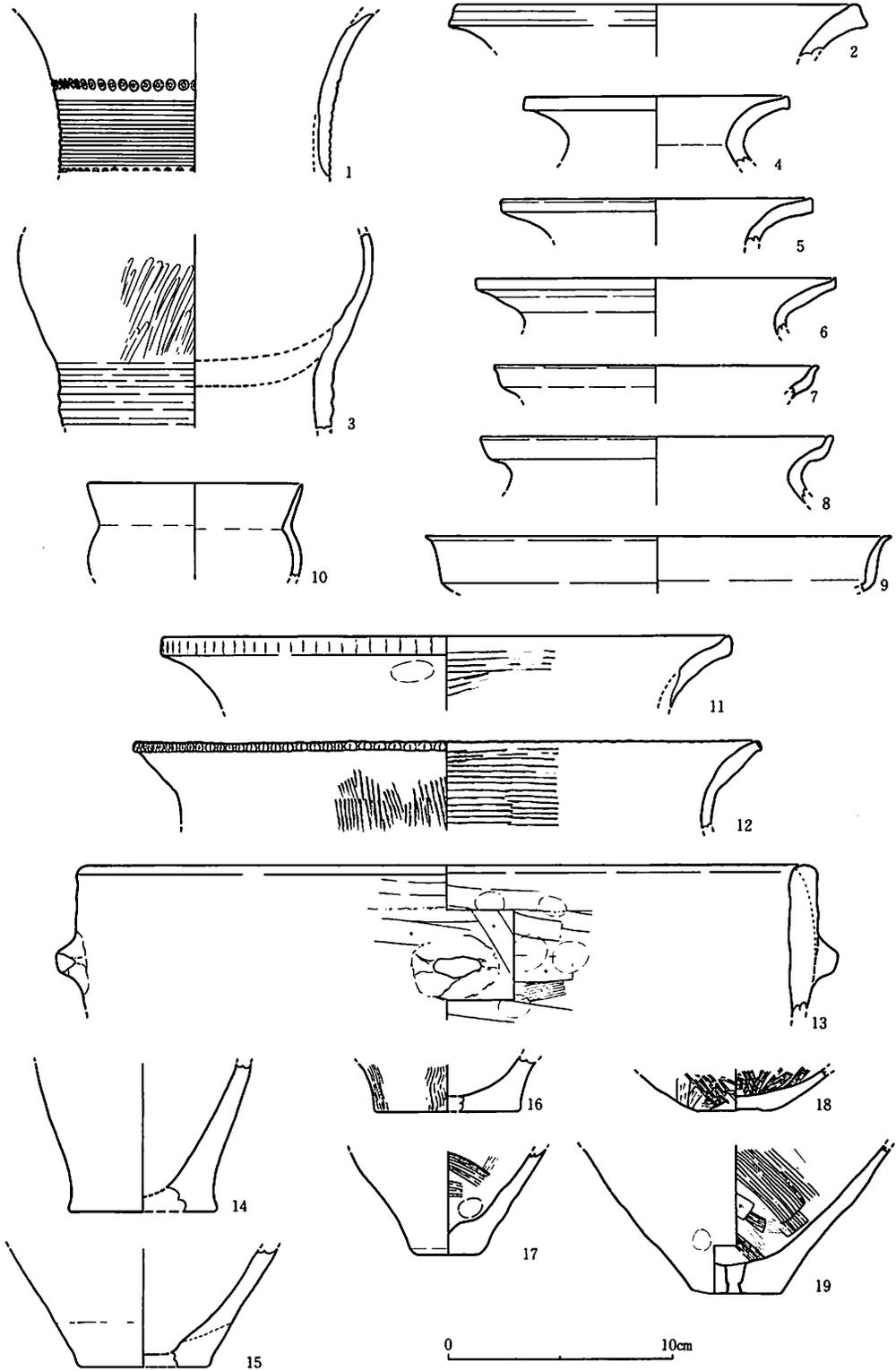
1は広口壺である。長い頸部に8条のヘラ描沈線文を施し、その上下端に竹管刺突文を巡らす。復原頸部外径は12.0cmを測る。摩滅のため調整は不明である。胎土に0.5~2.0mmの石英・長石・チャートを含み、焼成はやや軟質。暗灰白色を呈している。新段階後半に属するものであろう<sup>1)</sup>。

13は把手付鉢である。厚手大形で、復原口径は31.6cmを測る。口縁部は直口し、体部上半に横長の瘤状把手を、貼付け手法により付加する。断面には粘土紐の外傾接合が観察できる。外面は板ナデ、内面は横方向ハケの後、板ナデによる調整を行なう。胎土に0.5~2.0mmの石英・チャートを多く含み、焼成は良好。新段階に属する。

#### 2. 中期の土器(第3図2・3・11・12・14~16)

2は広口壺の口縁部と思われる。やや厚手で、斜め上方に大きく外反する。端面には強いナデによる凹線状のくぼみが巡る。復原口径は17.5cmを測る。胎土には0.5~1.5mmの石英・チャートを多く含み、やや軟質の焼成。淡灰橙色を呈している。

3は台付鉢である。強く張る胴部に直立する脚台部が接合されている。胴部の復原最大径は15.8cmを測る。内面には円盤充填技法による底部の痕跡が残り、胴部外面には斜方向のヘラ磨きを行なう。脚部外面には5+α条の太い凹線文を施す。透かし孔は残存部分では確認できな



第3图 A区溝2出土土器類実測图

## 10 第1節 弥生時代

い。胎土には1.0mm程度の石英・長石・チャートを若干含み、焼成は良好。畿内第IV様式に属する。

11・12はいわゆる「如意形口縁」をもつ甕である。11の復原口径は24.7cmを測る。端部を若干つまみ上げ、端面に刻み目を施すが、摩滅のため不明瞭である。内面は横方向の粗いハケ調整の後ナデ。頸部上半で粘土紐の外傾接合部分で割れている。胎土に0.5mm以下の石英・長石・チャートを多く含む。焼成はやや軟質で、淡灰黒色を呈している。

12は復原口径26.4cmを測る。口縁端部にヘラによる刻み目を施し、頸部外面に縦方向、内面には横方向の粗いハケ調整(4条/cm)を行なう。胎土には1.0mm以下の石英・長石・チャートを含み、焼成は良好で、淡黄白色を呈している。いわゆる「大和形甕」<sup>2)</sup>であるが、その中でも出現期の特徴を備えている<sup>3)</sup>。

14~16は前期あるいは中期に属する底部であるが、ここで一括して記述する。14は壺の底部と考えられ、復原底径は6.4cmを測る。胎土はやや粗く、2.0mm前後の石英・チャートを多く含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。15の復原底径は5.8cmを測る。体部下半で粘土紐の内傾接合が観察できる。胎土はやや粗く、1.0~3.0mmの石英・チャートを含む。焼成は良好で、淡赤褐色を呈している。16の復原底径は6.4cmを測る。外面は縦方向のハケ調整を行なう。胎土は粗く、3.0mmほどの石英・長石・チャートを多く含む。焼成は良好で、淡褐色を呈し、内面には黒斑が残る。

### 3. 後期の土器 (第3図4~9・17~19)

4は広口壺である。復原口径は11.6cm、同頸部内径は6.1cmを測る。強くくびれた頸部から短く外反する口縁部をもつ。端部に面をもち、やや厚手で全体的に小さい。外面は横ナデ調整を行なう。胎土には2.0mm以下の石英・チャートを少量含む。焼成は良好で、淡赤褐色を呈している。体部は口縁部に比べて、胴張りが大きいものと推定でき、京都市長刀鉾町遺跡にその類例が見られる<sup>4)</sup>。

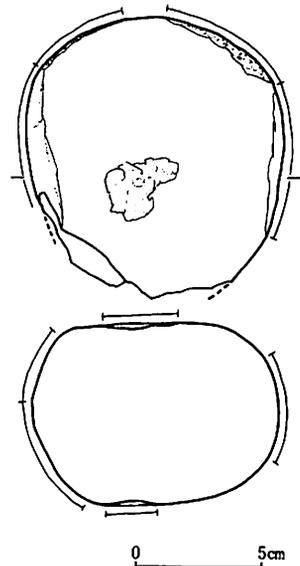
5は広口壺の口縁部と考えられる。摩滅が著しく調整は不明である。胎土には2.0mm前後の石英・長石を多く含む。焼成は良好で、淡褐色を呈している

6は甕の口縁部で、復原口径は16.0cmを測る。外面はナデ調整を行なう。胎土に1.0~2.0mmの石英・チャートと金色の雲母を含む。焼成は良好で、淡灰色を呈している。

7・8は受口状口縁をもつ甕である。7は復原口径14.4cmを測る。全体に摩滅が著しいが、一部内面に横ナデが認められる。胎土は稠密で、1.0mm未満の石英・チャートと金色の雲母を少量含む。焼成は良好で、淡褐色を呈している。8は復原口径15.6cmを測る。内外面とも横ナデ調整を行なう。胎土には2.0~4.0mmの石英・チャートを多く含む。焼成は良好で、淡橙色を呈している。

9は高杯である。復原口径は20.7cmを測る。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、端部が外方に短く張り出している。胎土はやや粗く、0.5~2.5mmの石英・長石・チャートを含む。焼成は良好で、淡黄橙色を呈している。

17～19は後期に属する底部である。いずれも内面に横～斜方向のハケ目をもつ、いわゆる「クモの巣状のハケ調整」<sup>5)</sup>を行なっている。18は底面が円形にくぼんでおり、「底部輪台技法」<sup>6)</sup>による成形を行なっている。外面はハケ調整の後、細かいヘラ磨きを行なう。19は底部中央に焼成前に穿たれた円孔をもち、甌の機能が考えられる。この孔は下方から一旦穿孔した後、上方より工具を途中まで挿入し、やや角度をつけて回転させているため、中ほどで段がついている。底径は17が2.6cm、18が3.2cm、19が4.0cmを測り、それぞれ暗灰褐色、淡橙色、淡黄白色を呈し、焼成はいずれも良好である。19は若干胎土が粗く、3.0～4.0mmの石英・長石を多く含む。その他、叩きを施した甕の胴部片も数点出土している。



#### 4. 布留式土器 (第3図10)

A区溝2から布留式土器も出土している。10は小型丸底壺で、第4図 A区溝2出土石器実測図復原口径は9.4cm、胴部最大径は9.5cm、口縁部高は1.9cmを測る。摩滅が著しく、調整は不明である。焼成はやや軟質で、赤褐色を呈している。口縁部が小さく外反し、口径と胴部最大径がほぼ等しいなどの特徴をもち、奈良県明日香村上ノ井遺跡S E030下層に類例が求められる<sup>7)</sup>。

#### 5. 石器 (第4図)

A区溝2からは、弥生時代の土器とともに敲石、砥石破片、不明磨製石器片が各1点出土した。

このうち敲石は、花崗岩製で下端部を一部欠いている。残存長11.3cm、幅10.2cm、厚さ7.2cm、重さ1220gを測る。表裏には、敲打による浅いくぼみが各1箇所、両側縁と上端周辺には敲打痕が見られる。特に両側縁は、敲打によって面をなしている。

### 第2節 平安時代

確実に平安時代に属する遺構は、井戸が4基(A区井戸4～6・B区井戸5)検出された。平安時代の遺物は主にA区南半部の各所で出土しているが、いずれも後世の遺物とともに出土しており、検出された井戸も概して浅いことから、調査地内では平安時代の生活面はすでに削平されているものと思われる。ただしA区南端では平安時代の遺物包含層が認められたため、今回の調査区より南では平安時代の生活面が検出される可能性もあろう。以下、検出された井戸の遺構と遺物について記述する。

#### 1. A区井戸5 (第5～9図, 図版第4上)

A区井戸5はA区の中央部にあり、上部は後世の柱穴や土坑が掘り込まれていた。掘り方の平面形は一辺が3m強ほどの隅丸方形で、四辺はほぼ正方位に一致している。掘り方内には段

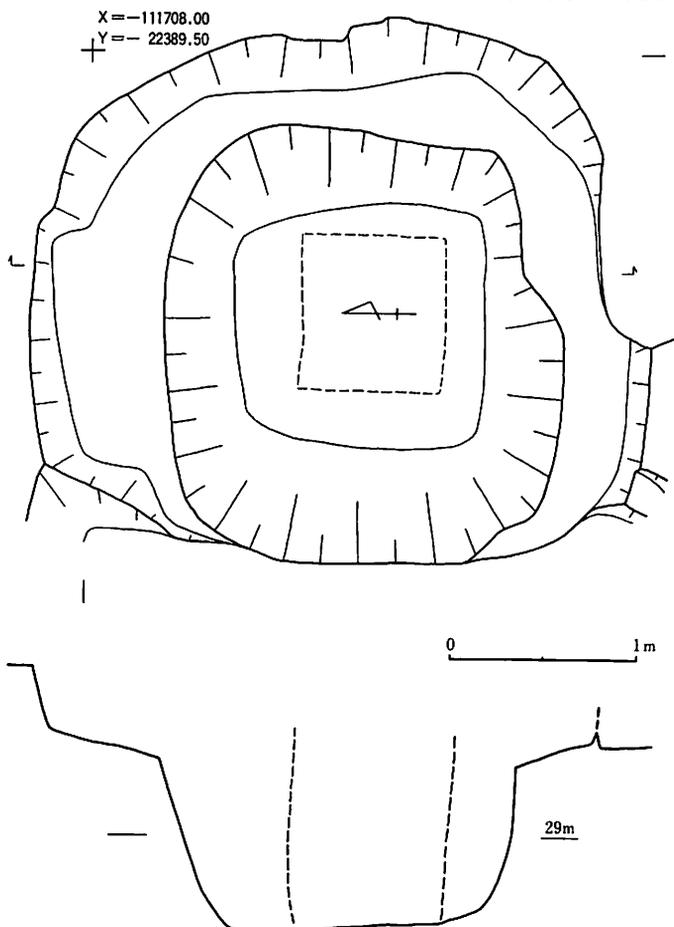
12 第2節 平安時代

がつき、井戸底から1mほどは内法が2m前後になっている。掘り方内の埋土はかなり締まった、やや緑がかった褐色土であるが、井戸中央の80cm角ほどの範囲は灰色の砂質土で、木質は検出できなかったが、本来は木枠が組まれていたものと見られる。なお井戸底の高さは標高約28.5mで、砂礫層には達しているが今回の調査で検出した井戸の中では最も浅い。

遺物は主に木枠の裏込土と見られる褐色土中から出土しており、12世紀前半代と考えられるものがある。灰色砂質土中から出土した遺物には裏込土中と同時期のものがあるが、むしろ時期のさかのぼる10世紀代と思われるものが含まれていた。

第6図1～12は土師器の皿で、いずれも口縁部が外反し、端部が少し立ち上っている薄手のものである。大きさは口径の12～12.5cmのもの(1～6)と、15cm前後のもの(7～12)の2種類がある。なお9には口縁の一部に燈心をたてた痕跡が認められる。

13～16は黒色土器の碗である。13・14は内面のみにミガキが施され、内面が黒色、外面は灰褐色～赤褐色を呈している。15・16は内外面とも細かいミガキが施されて、内外面および胎内部も黒色を呈している。なおいずれも器表面に、雲母かと思われる細粒が目立つ。17も内面が

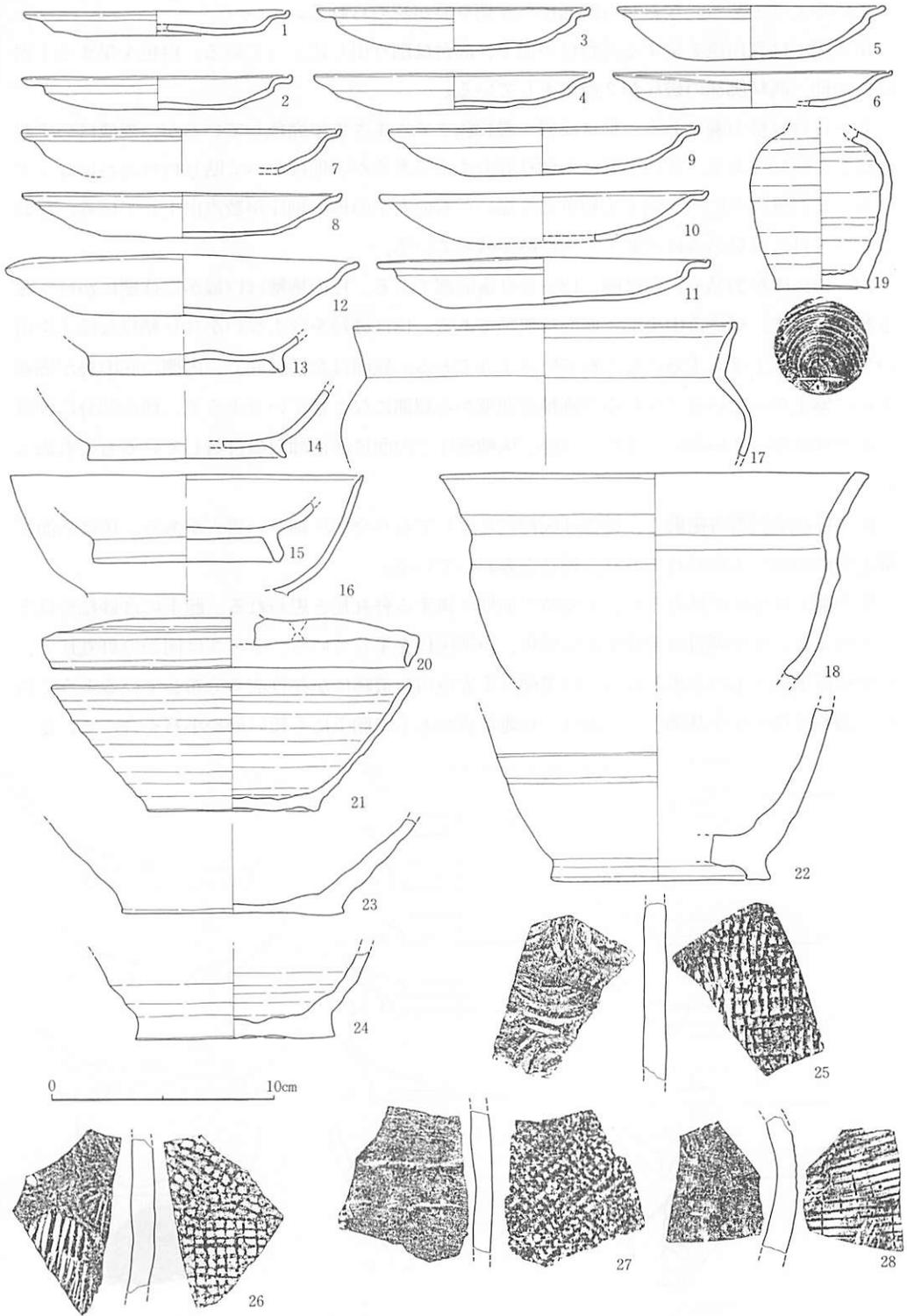


第5図 A区井戸5遺構実測図

黒色を呈する甕である。外面には炭化物の付着があり、これも表面には雲母らしい細粒が目立っている。

18は土師器の甕あるいは鉢である。胎土にかなり砂が混入されており、軟質の焼成で、全体に淡赤褐色を呈している。

須恵器には小形花瓶(19)、蓋(20)、碗(21)、壺底部(22～24)、甕(25～28)などがある。20の蓋は焼成前に孔があけられているものである。孔は上下から工具先を回転させて穿っているが位置が若干ずれており、孔の通じている部分の径は1mm程度になっている。21はかなり粗い仕上げの碗で、内外面ともロクロ引きの凸凹が顕著である。底面は高台を貼りつけているが、底部切りはなしはヘラによっ



第6図 A区井戸5出土遺物実測図(1)

14 第2節 平安時代

ているようである。なお24も底面にヘラ切り痕が認められる。

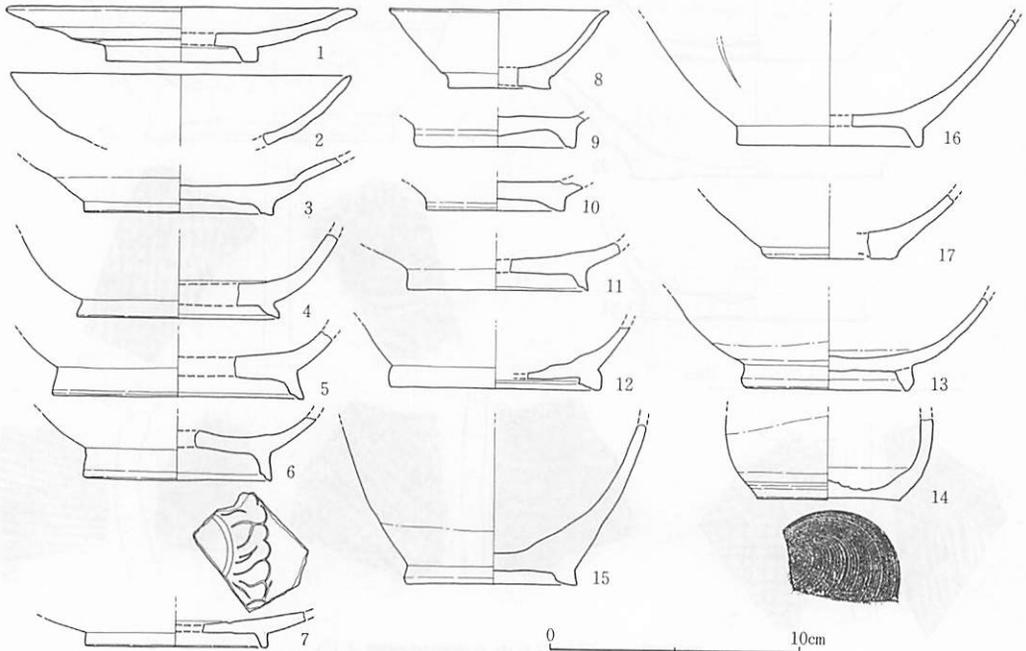
第7図1は乳白色を呈する高台付の皿で、高台は削り出しによっている。白色を呈する土器はこの他、高杯脚部の破片が2点出土している。

2～11は緑釉の碗である。釉は淡緑～濃緑色までさまざまに発色しているが、焼成はいずれも概して良好である。8の小碗は糸切り底のままであるが、他はすべて貼り付け高台になっている。また見込みにヘラ先で宝相華文を描いたものも7の他、細片が数点出土している。なお5と9～11には見込みに三叉トチンの跡が残っている。

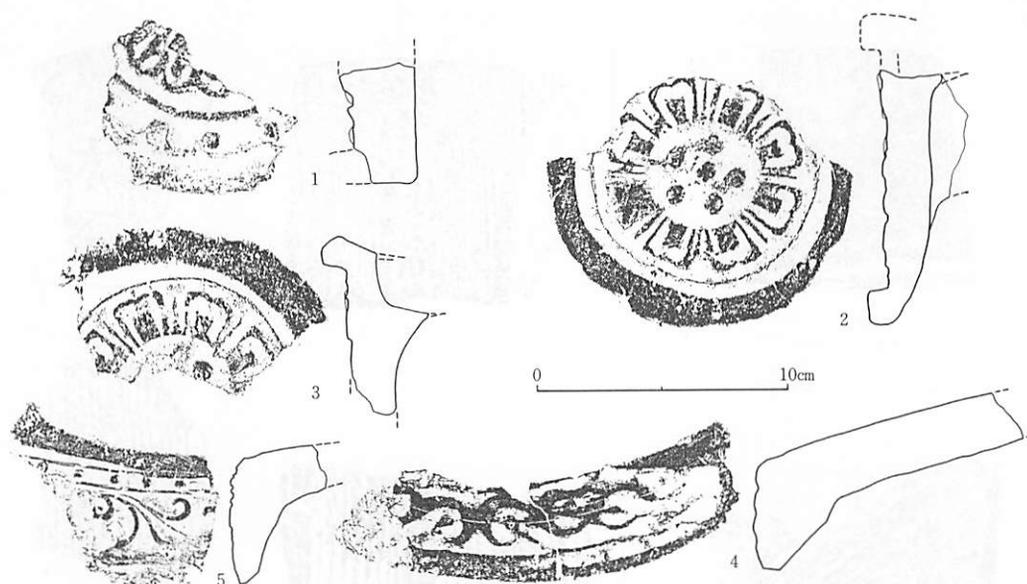
12～15は灰釉製品で、12は碗、13～15は壺底部である。12の施釉は口縁から体部にかけてなされたようで、見込み中央部と底面は無釉である。13は砂粒を含まないかなり精良な胎土を用いており、仕上げも丁寧になされているようである。底面は糸切り底で、内側の底中央が渦巻き状に盛上がっている。なお壺の施釉は頸部から肩部になされているようで、残存部分にはほとんど釉は掛っていない。またこの他、灰釉碗片で内面に赤色顔料の付着しているものもあった。

16・17は中国製青磁碗で、釉色は灰緑色を呈しており全体に細かい貫入がある。16は外面に縦方向の刻線が入れられており、輪花を表わしている。

第8図1は小片ではあるが、平安時代前期に属する軒丸瓦と思われる。胎土には砂粒をほとんど含まず、やや硬質の焼成で表面黒色、内部灰色を呈している。2・3は同範の軒丸瓦で、12世紀前半代のもと思われる。同範例は平安京内の遺跡にかなり広く分布しているようである。調整は指ナデを基調としており、粗雑な感がある。胎土にも粗い砂や小石を含んでいる。



第7図 A区井戸5出土遺物実測図(2)



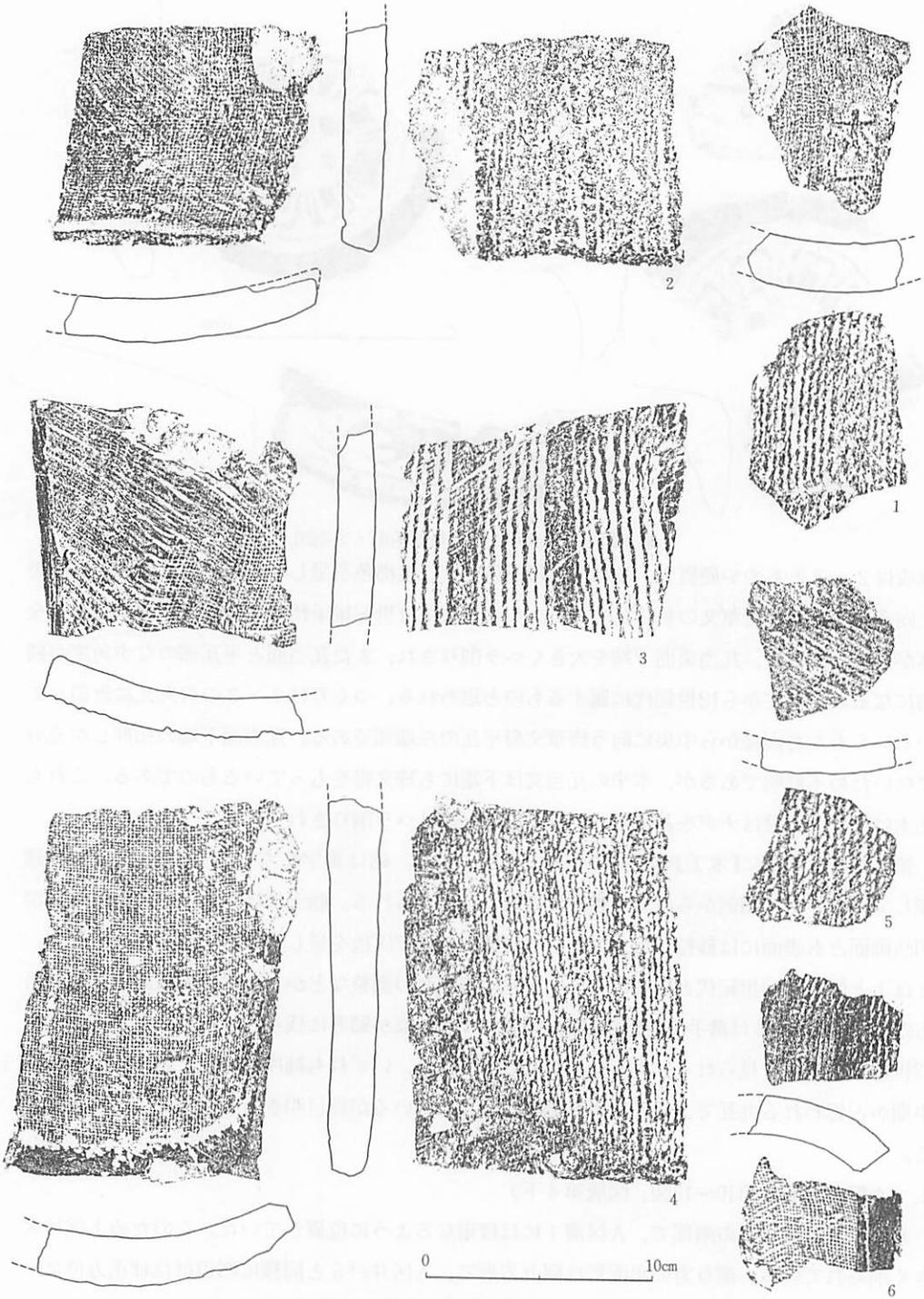
第8図 A区井戸5出土軒瓦拓影・実測図

焼成は2・3ともやや硬質で、2は全体に灰色、3は淡褐色を呈している。4は両端から中央に向う、退化した唐草文の軒平瓦である。この文様は11世紀後半代からの系統<sup>8)</sup>であるが、全体がやや小振りで、瓦当裏面下端を大きくヘラ削りされ、また瓦当面と平瓦部のなす角度が鈍角になることなどから12世紀代に属するものと思われる。つくりは2・3の軒丸瓦に近似している。5も左右両端から中央に向う唐草文軒平瓦の左端部である。瓦当面下端の范押しが充分でないため不鮮明であるが、本来の瓦当文は下端にも珠文帯をもっているものである。これも胎土は粗く、調整はナデを基調とし、瓦当裏面下端はヘラ削りされている。

第9図1は凹面に『木工』銘の押印のある平瓦である。銘は裏字になっており、同印例は確認していないが、類例から見て10世紀代のものと考えられる。胎土にはあまり砂を含まないが凹凸両面とも表面には砂粒が目立つ。やや硬質の焼成で灰色を呈している。2～5は平瓦で、2は1と同じく10世紀代と思われる。3・4は側端面の調整などから2よりも時期のやや下るものと思われる。5は薄手の平瓦で、凹凸両面に糸切り痕が顕著に残り、灰白色を呈すもので、12世紀代のものと見られる。丸瓦は出土点数も少なく、いずれも細片であった。6は平安時代中期かと思われる丸瓦で、凸面はナデ調整がなされているが縄目叩き痕も残っているものである。

## 2. A区井戸6 (第10～13図, 図版第4下)

A区井戸6はA区の南部で、A区溝1にはほぼ重なるように位置していた。このため上部は大きく削られている。掘り方の平面形は隅丸方形で、A区井戸5と同様に四辺はほぼ正方位に一致している。掘り方の一辺は3m程度で、A区井戸5よりやや小さいものになっている。また井戸の南側に半円形の掘り込みがあり、少ないながら出土遺物からは井戸と同時期と思われるが、直接の関係はわからない。



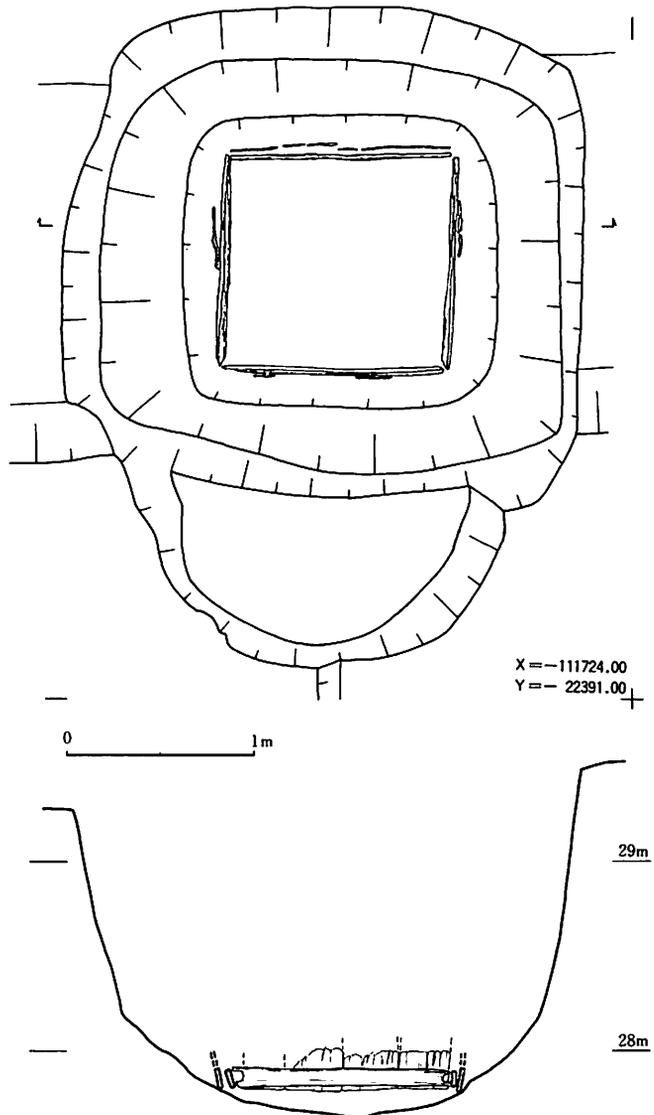
第9図 A区井戸5出土瓦類拓影・実測図

掘り方中央には方形に木枠が組まれていた。枠の痕跡は井戸底から1mほど上方から部分的に認められたが実際に木質の遺存していたのは、最も良く残っていた部分で、枠下端から20cm分程度であった。木枠は幅30cm、厚さ3~4cmの板を縦に並べ、内側の要所に横棧を当てて固定したものである。棧木は最下段のみ遺存しており、長さ1.3m、幅10cm、厚さ4cmほどの材が用いられ、東西方向のものは両端が「凹」字状の、南北方向のものは「凸」字状の仕口で組まれていた。井戸内の埋土は主に茶褐色粘質土であったが、枠の裏込土もかなり混りあっており、涌水もあって遺物を厳密に分けることはできなかった。出土遺物は量的には少なく、その中では瓦類が目立つものであった。

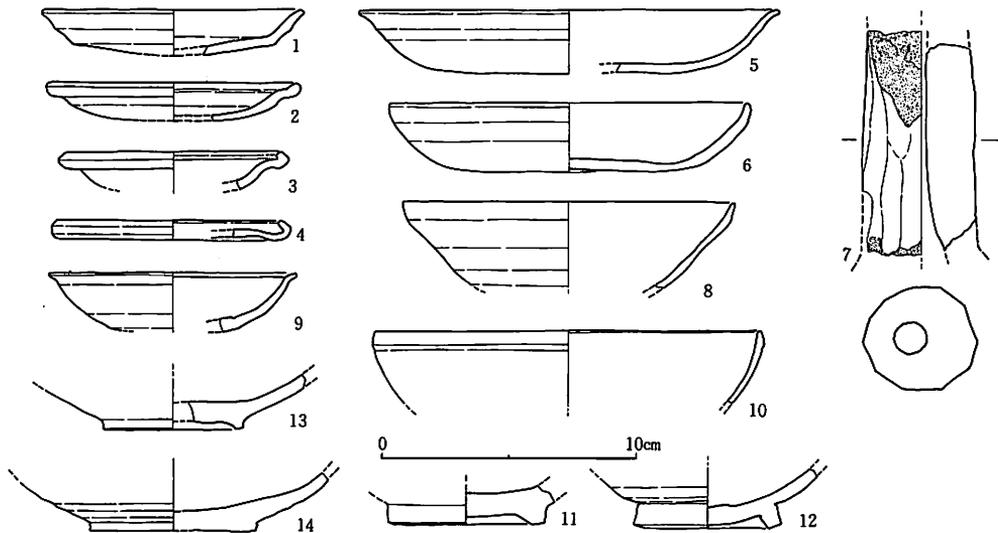
第11図1~6は土師器の皿で、口径では10cmほどのものと15cmほどのものに分けられる。1と5は基本的に口縁部外周を2段にナデ調整されたもので、口縁

端は軽く外反している。2・3は口縁部が強く外反し、端部を立ち上げた小皿で、2は淡赤褐色、3は白色を呈している。なお6は確実に木枠内部よりの出土である。7は高杯の脚部で、11面の面取りがなされているが、幅は一定していない。また中心孔は棒状工具を出し入れしてつくられたものらしく、孔の内部に縦方向の筋が多数認められる。

8~12は中国産の青磁で、釉色はいずれも淡灰緑色を呈している。8は口縁の外反する小皿で、見込みには円形に沈線が巡っている。9・10は口縁をやや肥厚させた薄手の碗で、10は小片からの復原のため口径が大きくなっているが実際は径12~13cmのものであろう。11・12の底部は削り出し高台で、高台部分は基本的には施釉されていない。



第10図 A区井戸6遺構実測図



第11図 A区井戸6出土遺物実測図

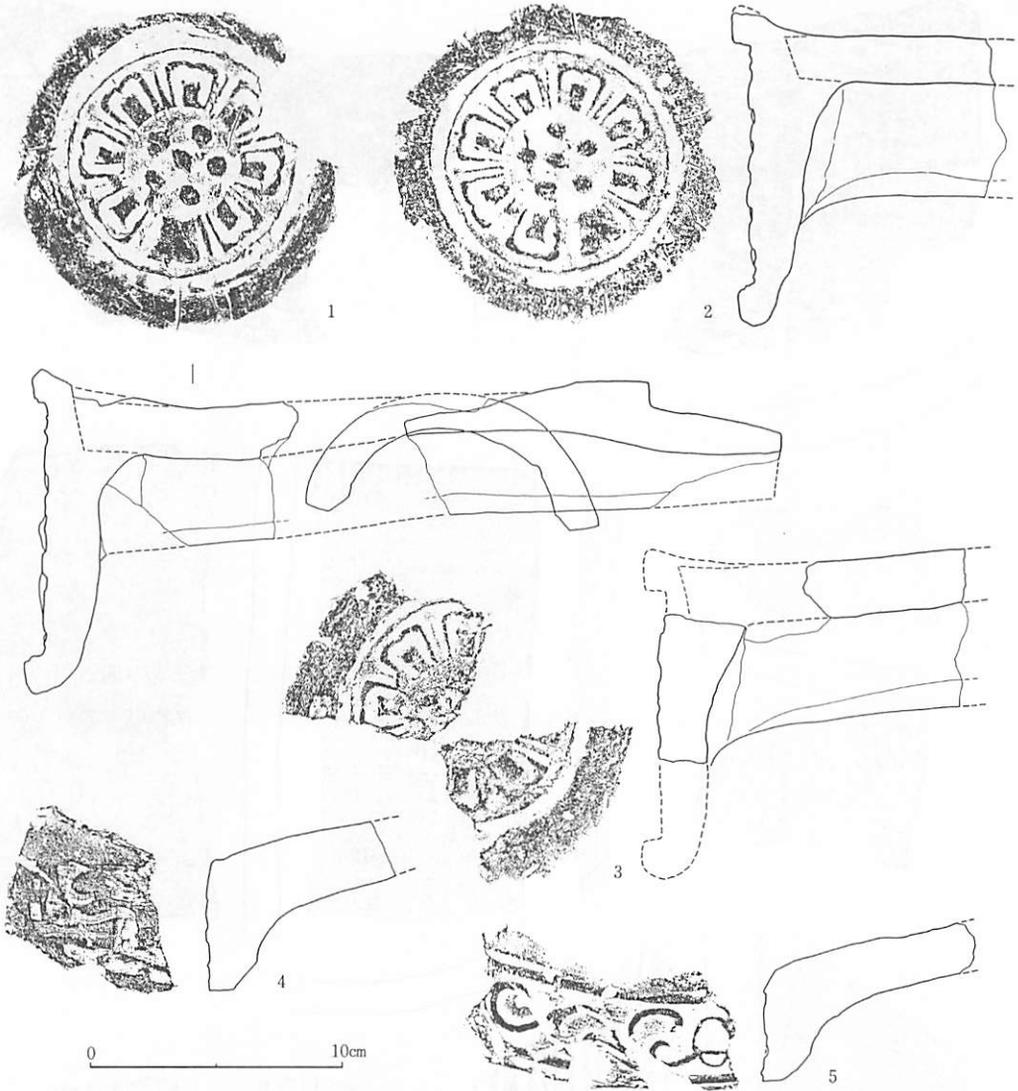
13は瓦器の碗で、底面には貼り付け高台がつくられている。外面は磨滅のため調整は不明であるが、内面には幅4mmほどの粗いヘラミガキがなされている。14は土師質焼成の皿と思われる土器で、底面は糸切りである。軟質で全体に灰褐色を呈し、内側全面に炭化物黒色の付着物がある。

第12図1～3は同範の軒丸瓦で、A区井戸5出土の軒丸瓦(第8図2・3)とも同範である。1は丸瓦部の一部を欠くものの、玉縁部まではほぼ完存している。丸瓦部凸面は部分的にナデ調整されているが、縄目叩き痕も明瞭に残っている。凹面側の布目痕はかなり細かいものである。

4は軒平瓦の左端部で、瓦範の押しが不十分なため文様が不鮮明であるが、第8図4の軒平瓦と同範と見られる。5は中央に卵形の文様をおき、左右に唐草の展開する文様の軒平瓦で、これも平安京内の諸遺跡に見受けられるものである。

第13図1・2は同じ形式と見られる平瓦である。どちらも硬質の焼成で暗灰色を呈しており、凹面には細かい布目痕が認められる。凸面側はハナレ砂が目立ち、部分的にナデ調整が見られるが、縄目叩きなどはなされていない。幅約16cmの小振りの平瓦で、小石を含む粗い胎土や調整などが第8図4、第12図4の軒平瓦に類似していることから、同じ窯でつくられたものかと考えられる。3～5は凸面に縄目の叩きがなされた平瓦である。3は火災にあったように淡赤褐色を呈している。4・5は凹凸両面に顕著に糸切り痕を残すもので、4の凹面には細かい布目が認められるが、5の凹面には布目が認められない。どちらも胎土には砂を含まず、硬質の焼成で灰色を呈しており、同形式の平瓦と見られる。

A区井戸6からは比較的限られた時期の遺物が出土しており、A区井戸5のように12世紀以前の遺物は認められなかった。なお井戸内からは部分的に炭化した木片や火を受けたらしい瓦も出土していることから、この井戸が火災後に埋め戻された可能性も考えられる。



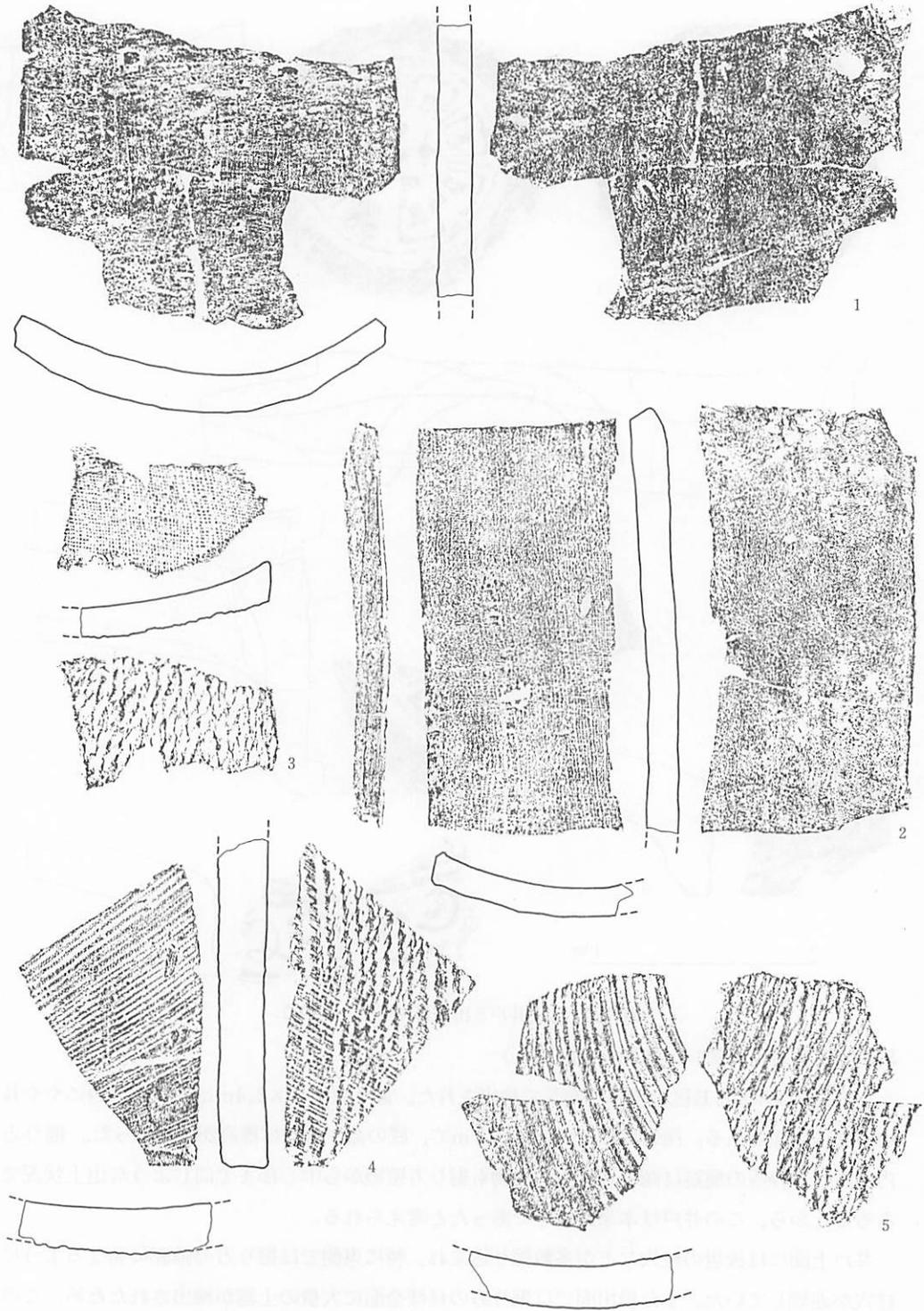
第12図 A区井戸6出土軒瓦拓影・実測図

3. A区井戸4（第14・15図，図版第5）

この井戸はA区とB区の境の南端部で検出された。掘り方は2×2.4mほどの、東西にやや長い方形の平面である。深さは検出面から約2mで、底の高さはほぼ標高28mであった。掘り方内からは木杵等の痕跡は認められず、遺物も掘り方壁際から中心部まで同じような出土状況であることから、この井戸は本来素掘りであったと考えられる。

井戸上面には後世の柱穴などが多数掘り込まれ、特に東側では掘り方の輪郭に重なるように柱穴が連続していた。また検出面では掘り方のほぼ全面に大量の土器が検出されたため、この井戸は当初土坑と判断していた。

土器類は検出面から約40cm下までの間に特に集中しているが、これより下方でも遺物は出土



第13図 A区井戸6出土瓦類拓影・実測図

しており、上層の集中部分の土器と井戸底直上付近出土の土器を比べても特に差異は認められなかった。

このことから、井戸を埋め戻すにあたっては、かたわらに多量の土器を用意し、ある深さまで土を埋めた後に土器を投入し、さらに土をかぶせる、といった行為がなされたように思われる。

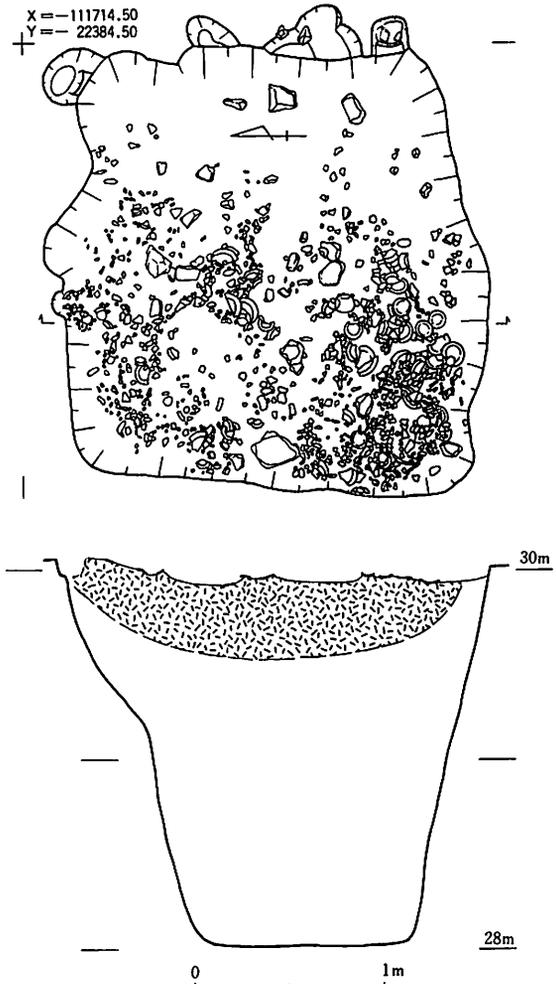
出土遺物はコンテナバットに約10箱分で、そのほとんどは土師器の皿である。他に緑釉碗片や、長さ4cm程度の鉄釘が数本分出土している。土師器の皿はその量に比べて種類は少なく、口径が15cm前後のもの(第15図1~11)と、10.5cm前後のもの(13~26)および口縁部を強く外反させるもの(27~41)の3種に分けられる。個体数のおおよその比率は1:2:1である。また年代は12世紀後半代と考えられる。

口径15cm前後の皿は口縁部外周を基本的に2段にナデ調整を施すのが特徴となる。口縁端部は軽く外反するものが多い。底部内面は一方向に平行するナデ調整がなされ、外面は未調整で指紋や掌紋が多数認められる。胎土には多くはないが粗い砂粒が含まれており、色調は乳白色~淡赤褐色を呈している。

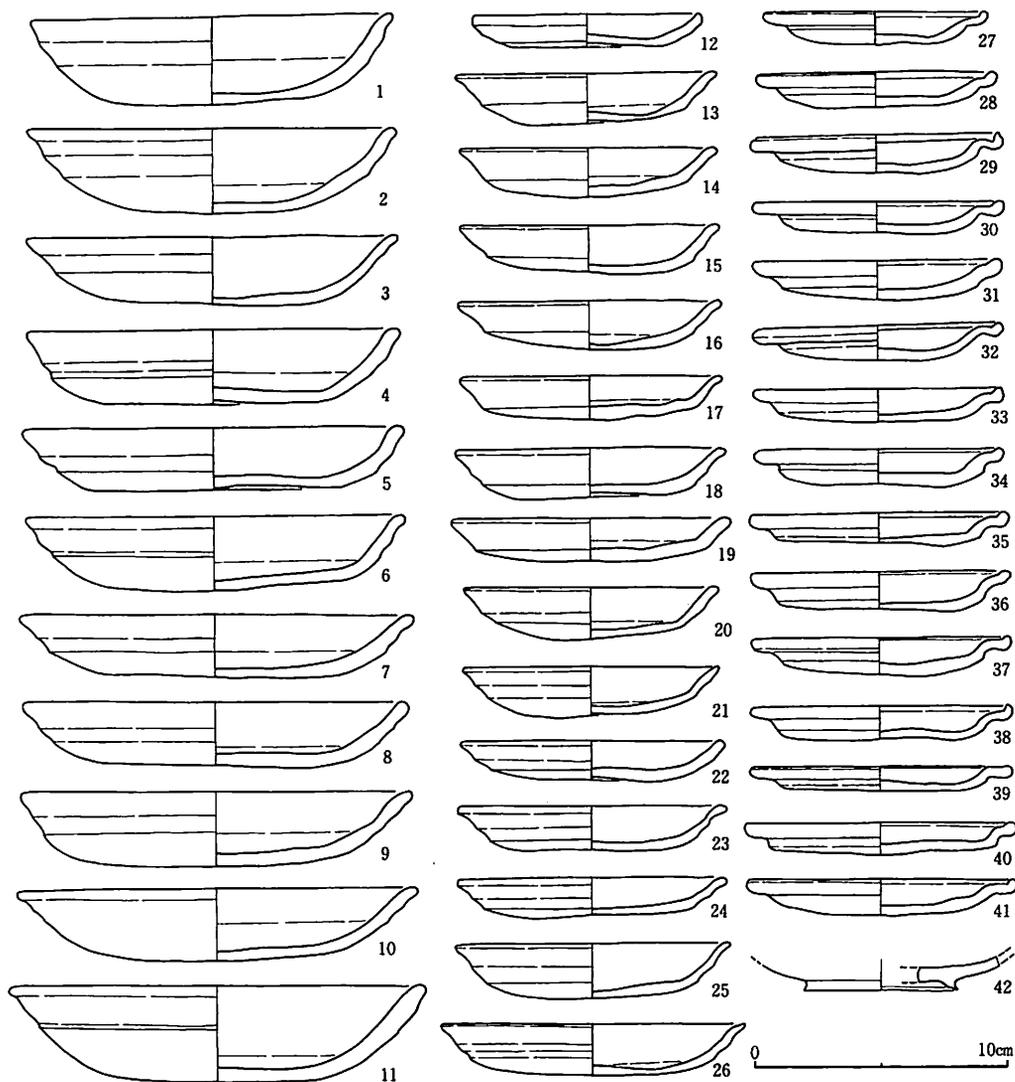
口径10.5cm前後の皿は前者の小型のもので、基本的な調整などは前者に等しく、口縁外周を2段にナデ調整を施していることが特徴となっている。第15図21は口縁の一部にススが附着しており、燈心をおいた痕跡も認められるもので、この大きさの皿には他に数点ススの附着しているものがある。

口縁の強く外反する皿の口径は10cm前後のものが多い。口縁は強く外反した後、端部を立ち上げ、または丸味をもたせて肥厚させている。口縁部以外の調整や胎土などは前2者と同様である。

なお第15図42は緑釉碗の底部である。須恵質焼成の器体に薄い黄緑色の釉が掛けられている。また12は13世紀代と思われる土師器の皿で、混入品と見られる。



第14図 A区井戸4遺構実測図



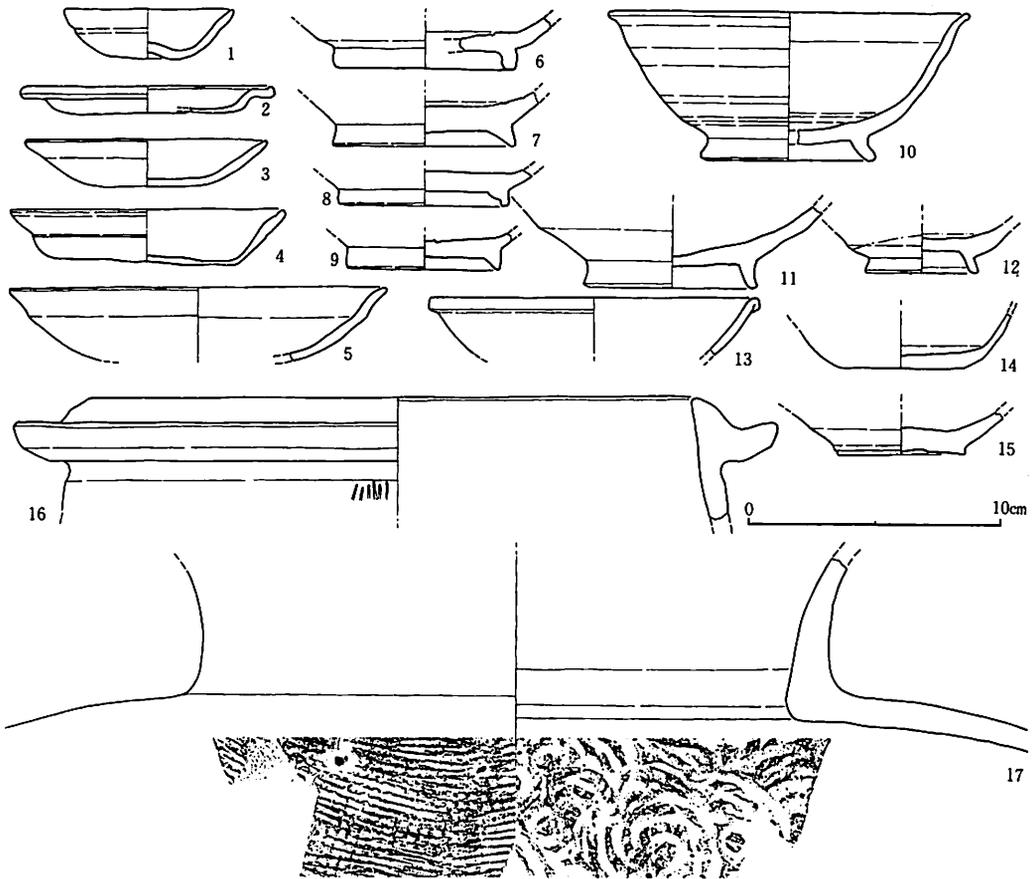
第15図 A区井戸4出土遺物実測図

4. B区井戸5（第16図，図版第6上）

この井戸はA区井戸4の東に近接して検出された。掘り方の平面形は一辺約2mの方形で、井戸底では方1m程度になっている。底面は標高27.5mほどである。木質は遺存していないが、埋土は中央の約60cm四方の範囲が砂質土で、その周囲は砂利を含む粘質土であったため、本来枠組があったと考えられる。

出土遺物は多くないが、素焼の土器より施釉されたものが多く、瓦類は出土していない。なおこの井戸も上部は後世の掘り込みがあり、第16図1・3・4はその出土遺物である。

第16図2・5は土師器の皿である。2は口縁を外反させ端部を立ちあげた薄手の小皿である。5は口縁がやや外反するもので、外面は口縁部のみナデ調整である。



第16図 B区井戸5出土遺物実測図

6～9は緑釉碗の底部である。いずれも糸切り底で、高台が貼り付けられている。8が須恵質焼成の器体で、他は土師質焼成のものになっており、釉はいずれもやや濃色に発色している。三叉トチンの痕跡は7・8に認められる。10～12は灰釉の碗で、大小2種がある。いずれも釉は見込み中央部と底面には施されていない。

13～15は中国製の磁器である。13は口縁端を折りかえして玉縁にした白磁の碗である。14も白磁の皿である。底部は平底で、底面には施釉されていない。15は蛇の目高台の青磁碗である。釉は高台の一部を除いて全体に施され淡灰緑色に発色している。また高台には6個の目跡がついている。

16は厚手の土師器の甕で、口縁近くにツバが貼り付けられ、外面のツバより下部は縦方向の粗いハケ目調整がなされている。胎土には粗い砂を多く含み、暗褐色を呈している。やや寸胴で丸底になる甕と思われる。

17は須恵器の甕である。他に同一個体と見られる甕片が出土しており、これには内面の当て具痕が粗い平行条文のものもある。

なお10・17・16は木枠の裏込土中からの出土である。

### 第3節 鎌倉・室町時代

今回の調査で検出した遺構では、この時期に属すると思われるものが最も多かった。検出された遺構には、溝・井戸・土坑・柱穴などがある。調査地内のほぼ全域から検出されたが、特にA区南半部に集中している。以下、主な遺構を種類別に記述する。

#### 1. A区溝1（第17～21図，図版第19・20）

A区溝1はA区の南部で東西方向に検出された。横断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦であるが東側がやや高く（標高約29.7m）、西側が低く（標高約29.4m）になっていた。溝幅は当初肩部で4.5mほどであるが、その後北側に黄褐色の粘質土を貼り付けて、幅3m程度に狭められている。溝内は水が常時流れていた様子ではなく、埋土は西半は主として暗褐色土で、東半は東北寄り部分が砂利層であった（図版第20上）。溝東端部の砂利層部からは牛の椎骨や下顎骨などが出土している（図版第20下）。

出土遺物は多彩であるが、年代は平安時代から室町時代のもものが混在しており、かならずしもすべてが溝に直接伴うものとは限らない。ただし量的には14世紀代と思われるものが多く、江戸時代まで降る遺物は出土していないことから、この溝のつくられた時期は室町時代と考えられる。

第18図1・2・4は褐色系の土器で、1の口縁には数箇所ススの付着が認められる。3は白色系の土器である。

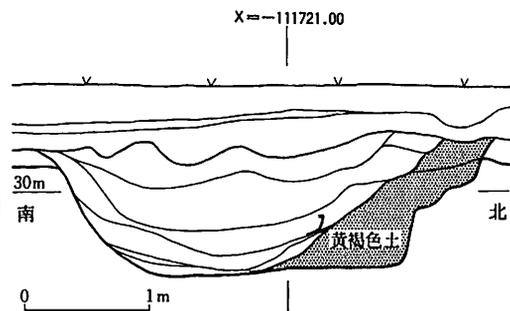
6～11は土釜の類である。8は土師質の焼成で他は瓦質焼成である。いずれも外面にはススが付着している。12は瓦質焼成の土器で、内面と外面の口縁部をナデ調整されており、ミガキはなされていない。底面には小さな粘土塊を貼り付けて三足をつくっている。

第19図13・14，第20図2は片口鉢で、いずれも東播系と思われる。第20図1・3，第21図2～5は甕で、第21図2～4は須恵器，他は陶器である。第20図1・3は常滑系と見られ、口縁の特徴から14世紀代のもと考えられる。常滑系の大甕片はこの他にコンテナバットで4箱分程度出土している。

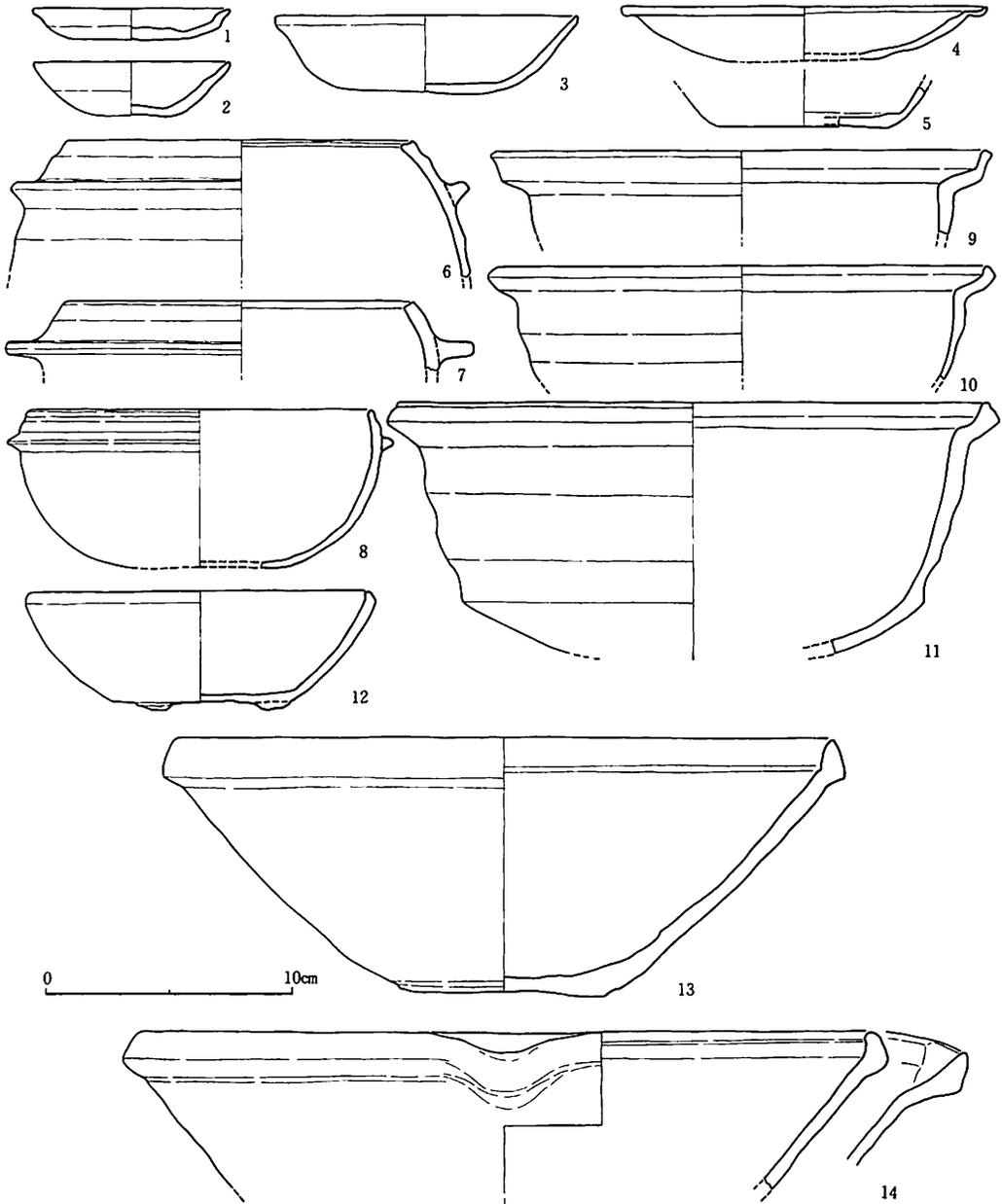
第20図4，第21図6は滑石製の石鍋である。どちらも外面にはススが付着している。第21図9は滑石製の小円盤で、石鍋を再加工したもので、温石として用いられたらしい。

溝内からの瓦類の出土は少ない。第21図7は三つ巴文の軒丸瓦で、室町時代に属すると思われる。8は平安時代の平瓦である。

輸入陶磁は破片ではあるが多数出土している。第19図5は灰色を呈する青磁である。図版第23の4・5・7～18・21・23～25・27・29・32・33・35もこの溝内から出土した。4は白磁碗，5は白磁壺の口縁部である。10と



第17図 A区溝1土層断面図

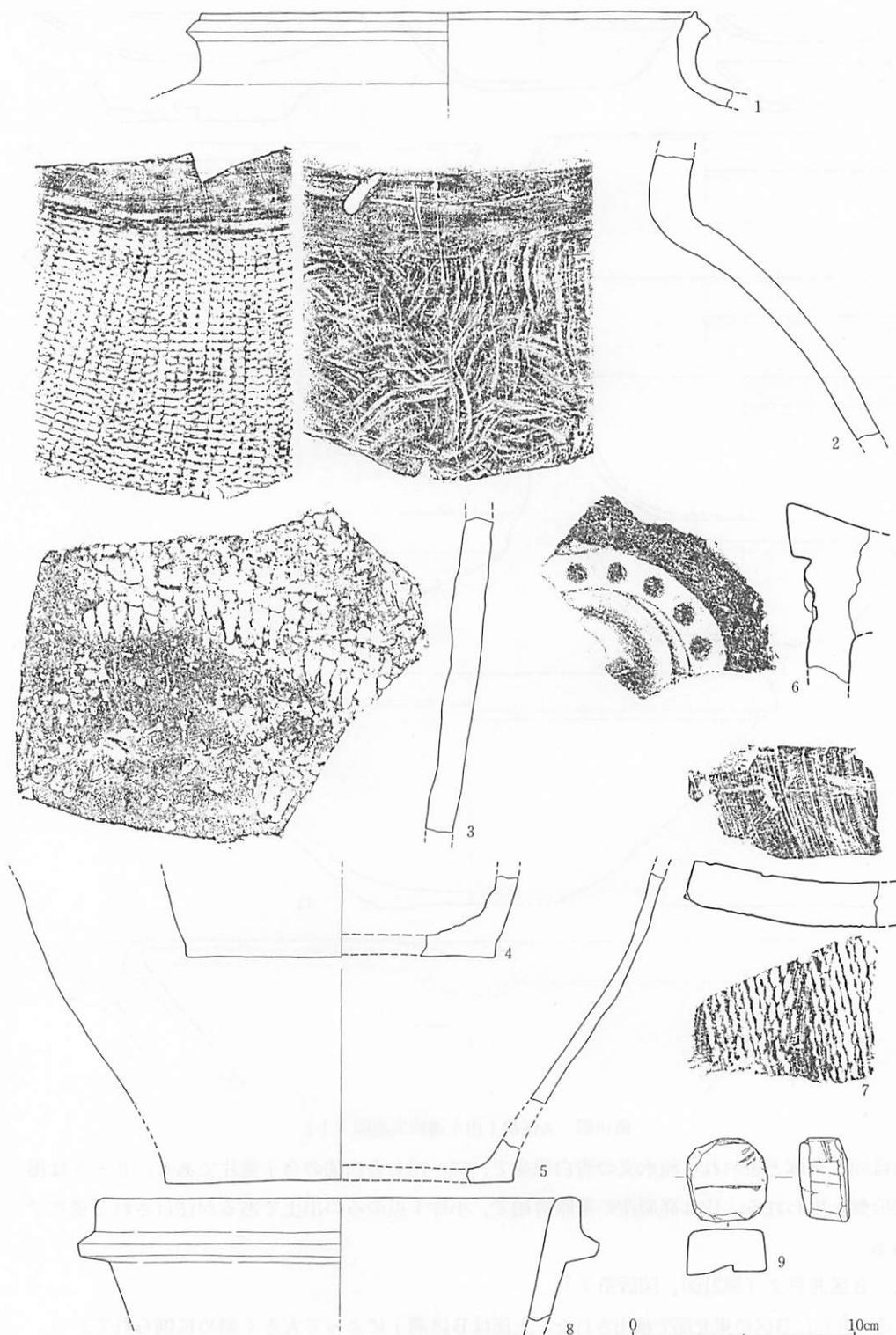


第18図 A区溝1出土遺物実測図(1)

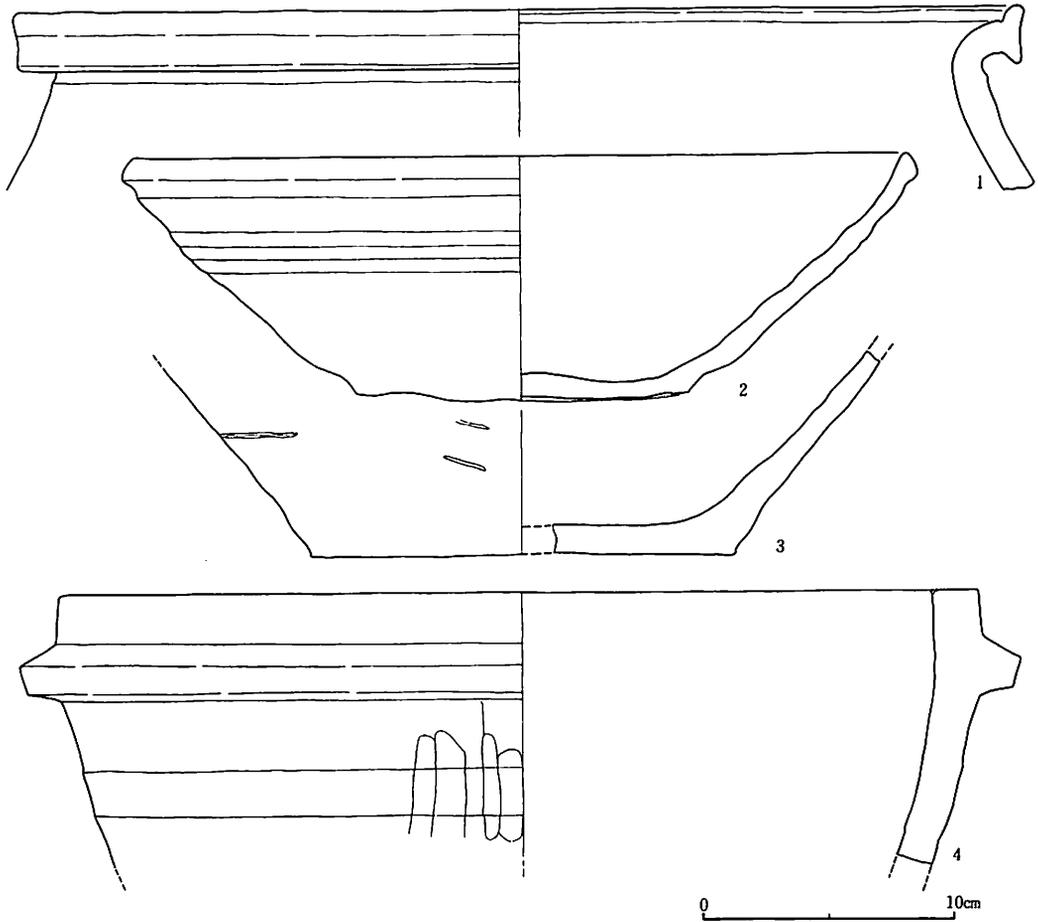
11は同一個体と思われる流水文の青白磁壺で、13~16も青白磁の合子蓋片である。8・9は褐釉の盤と思われる。12は高麗産の象眼青磁で、小片1点のみの出土であるが注目される遺物である。

2. B区井戸2 (第21図, 図版第7)

この井戸はB区の東北部で検出された。上部はB区溝1によって大きく斜めに削られている。掘り方の平面は丸味をもった方形で、一辺2.6mほどである。井戸底の高さは標高約27.3mで、



第19図 A区溝1出土遺物実測図(2)



第20図 A区溝1出土遺物実測図(3)

底面から30cm程度、内部の木杵が遺存していた。

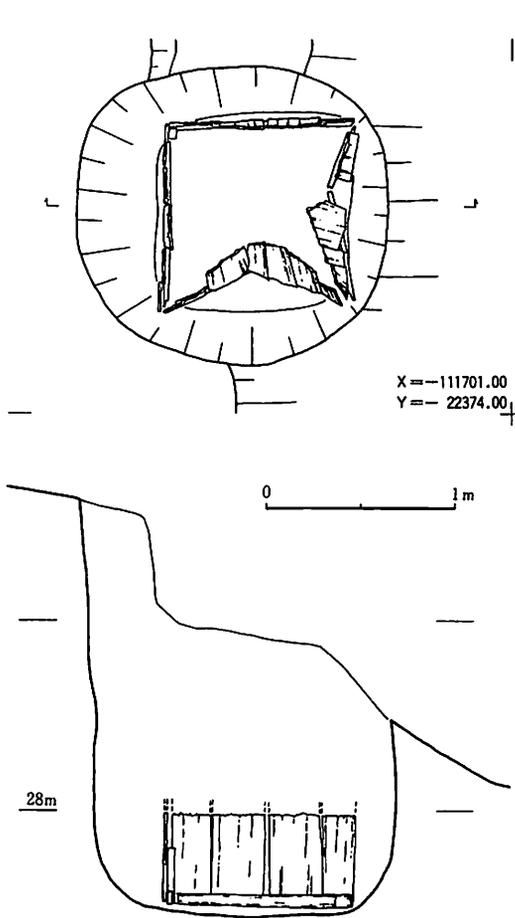
木杵は幅20cmほどの板を縦に並べ、要所に横棧を当てて固定されている。ただし東側と南側は最下の棧が折れ、板も内部にたおれ込んでいた。棧は最下段のみ検出されたが、上段の棧を受けるため、四隅に角材がたてられている。

遺物は少なく、常滑系の甕の破片1点と土師器皿の小片が出土しているだけである。このため井戸の年代が不確実であるが、井戸の構造から見て、鎌倉時代頃かと思われる。

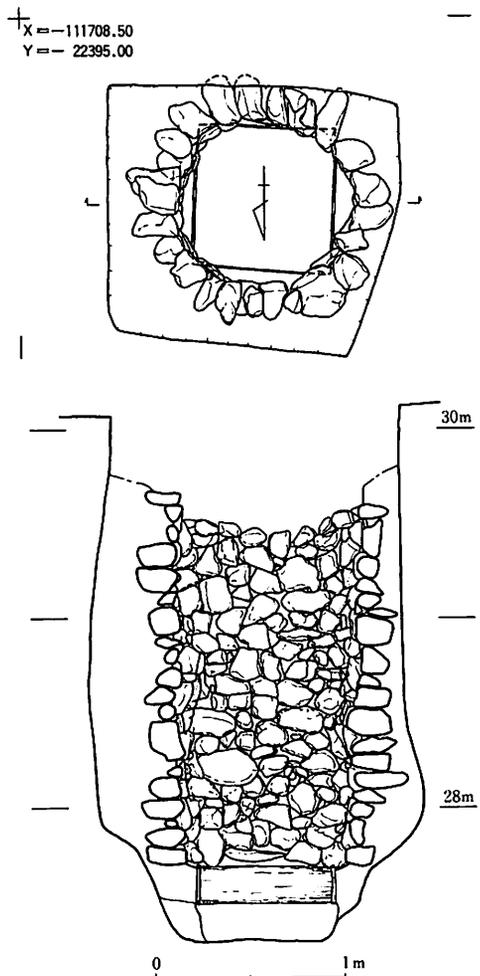
### 3. A区井戸3(第22, 23図, 図版第8)

この井戸はA区西端部の中央あたりで検出された。掘り方平面は略方形で、一辺1.5m前後である。掘り方壁面はほぼ垂直に下り、下方で段が設けられている。井戸底は標高27.3mまで至っている。内部には河原石を円筒状に積んだ石組がつくられており、その最下部に水留めと見られる方形の板囲いが設けられている。

石組みに用いられている石は主として人頭大前後のやや扁平な自然石で、長手方向が中心に向かうように積み重ねられているものが多い。1点のみであったがこの石組みの中に凝灰岩の切石が



第21図 B区井戸2 遺構実測図



第22図 A区井戸3 遺構実測図

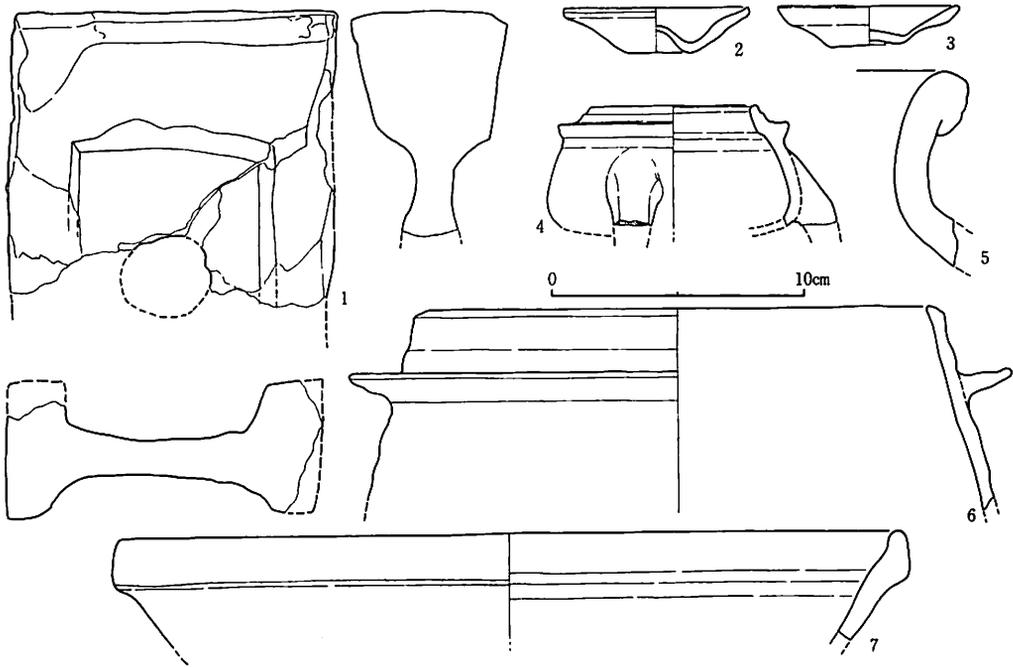
用いられていた。この石は厚さ約18cmで、平面は2辺が20cmほどの二等辺三角形に加工されている。

最下部の板囲いは幅18cm、長さ70~75cmの板を4枚組み合せたもので、隅部は各3本の鉄釘で固定している。なお井戸底は板囲い下端よりさらに20cm近く深くなっているが、これは井戸さらいなどの際に掘り下げられたものかと思われる。

石組みの裏込土は黄褐色の粘質土で、かなり砂利を多く混じえていた。この裏込土中には瀬戸系の灰釉陶片などが含まれていたが、量的には極く少ない。石組み内の埋土にもあまり遺物は含まれていなかった。

第23図1は有孔の磚である。この種の磚は京都市内の鎌倉~室町期の諸遺跡から出土しており、特に現在の京都駅北西あたりの遺跡で大量に出土しているがその用途は不明である。磚は断面形がI字状を呈し、全面に縄目叩きがなされている。

2・3は土師器の小皿で、4・5は瓦質焼成の羽釜である。4は脚が貼り付けられている。



第23図 A区井戸3出土遺物実測図

きわめて小形品であるが、外面にはススが付いている。6は大甕の口縁部で、玉縁の様子から備前産と見られる。7は東播系の鉢である。この他、瀬戸のおろし皿片なども出土している。

井戸の年代は遺物や構造から見て、14世紀代かと推定される。

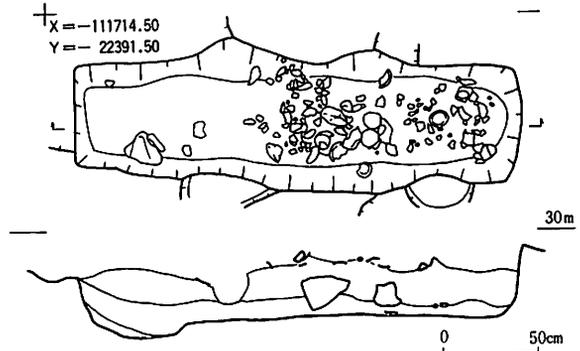
4. d-6 土坑2 (第24・25図, 図版第10)

この土坑はA区の中央部よりやや南寄りで見出された。土坑の西端部は後述のc-6土坑2が掘り込まれている。東西2.4m, 南北0.6mの細長い土坑で、深さは検出面から30cmほどである。土坑内の埋土は大まかには上下2層に分けられ、上層は黄色の粘質土、下層は砂利を含む暗褐色土であるが、出土遺物には差がない。土坑内から人頭大ほどの石が3個出土したが、この石の位置は上下層の中間にあたる。

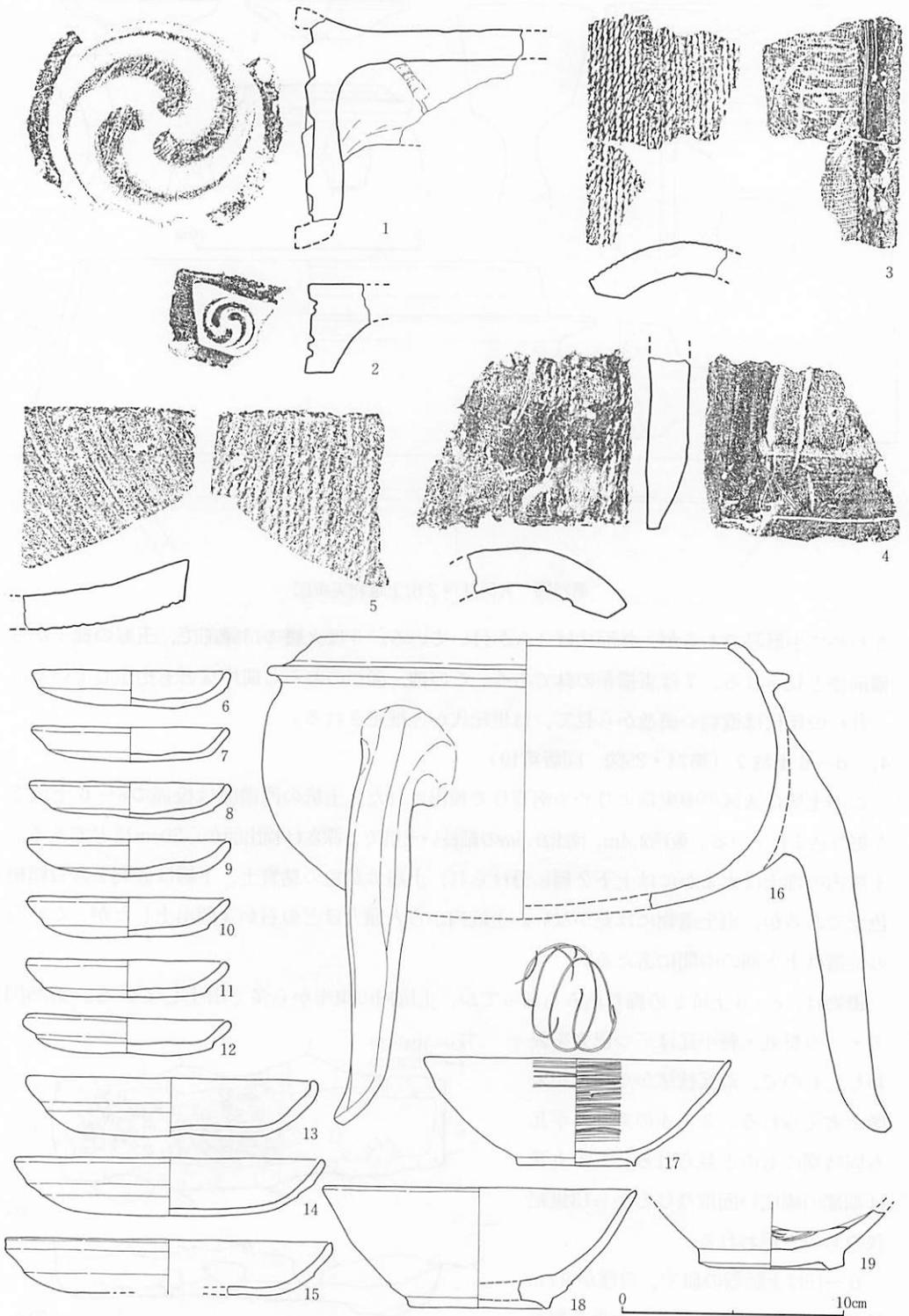
遺物は、c-6土坑2の掘り込みもあってか、土坑内の東半から多く出土している。第25図

1・2の軒丸・軒平瓦は三つ巴文を表わしたもので、造瓦技法から12世紀末頃と考えられる。3・4の丸瓦・平瓦も同時期のものと見られる。5の丸瓦は端部の幅広い面取りなどから13世紀代のものと思われる。

6~15は土師器の皿で、口径が9cmほどの小皿と、14cmほどの大小2種があり、量的には小皿が大半を占める。



第24図 d-6土坑2遺構実測図

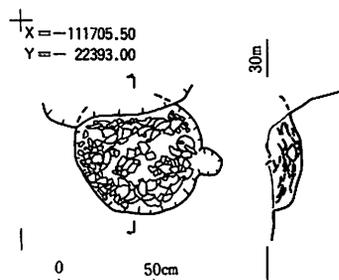


第25図 d-6土坑2出土遺物実測図

16は脚付の羽釜である。この個体は約2分の1の破片で、脚は2本取り付いているが、土坑内からはさらに2本の脚部片が出土している。17は瓦器の碗で、稠密な胎土が用いられ、焼成も良好である。18は東海地方産のいわゆる山茶碗である。底部には断面逆三角形の高台が貼り付けられており、高台の畳付けには部分的にモミガラらしい圧痕が認められる。19は中国製の白磁の碗である。残存部では内面のみに釉が施され、沈線で描かれた文様の一部が見える。

5. c-4 土坑3 (第26・27図, 図版第16上)

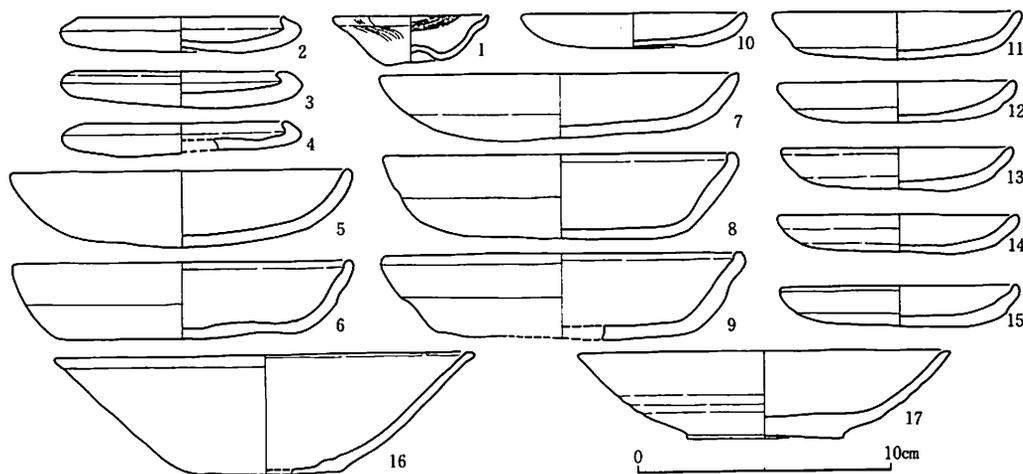
この土坑はc-4区の北寄りで見出された。北端は他の土坑により截ち切れ、上部もかなり削平されているものと思われる。平面は径70cmほどの円形で、深さは15cm程度であった。土坑内は検出面から底まで土器類と拳大の石が密に詰っていた。土器は出土状況から主として南方から投入されたようである。



第26図 c-4 土坑3 遺構実測図

第27図1は白色のいわゆるヘソ皿で、これは混入品かも知れない。2~15は褐色を呈する土師器の皿で、形から3種に分けられる。

2~4は口縁を内側に強く折り曲げた浅い皿で、出土点数は少ない。5~9は口径13.5~14.5cmほどの皿で、口縁端をやや内側に折り返しているものが多い。10~15は口径9.5cm前後の小皿で、量的にはこの種が多く出土している。17はロクロ成形された乳白色を呈する土器で、底面は糸切り底になっている。16は須恵器と瓦器との中間的なやや軟質焼成の土器で、全体に灰色を呈し、口縁部のみ灰黒色を呈している。薄手の器体で、底面は糸切りである。

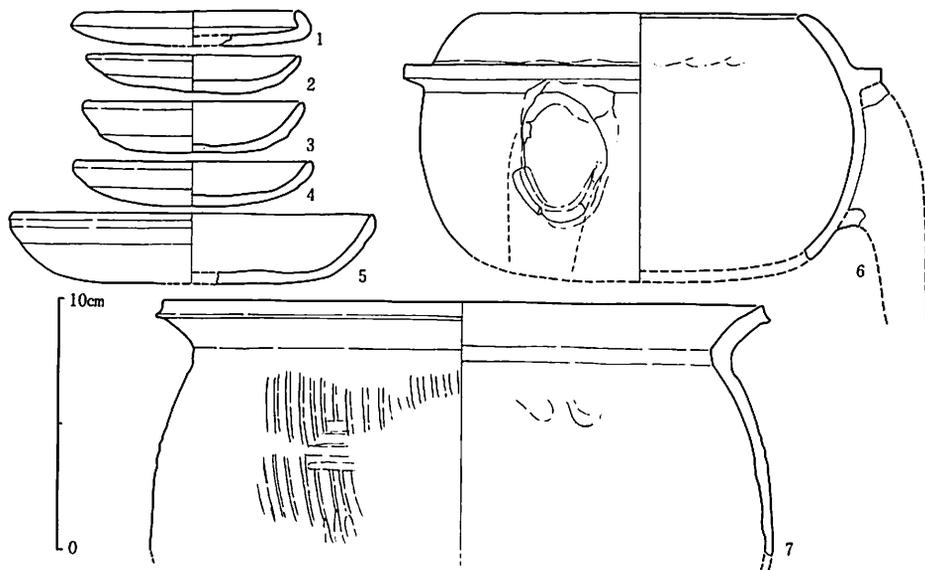


第27図 c-4 土坑3 出土遺物実測図

6. d-5 土坑3 (第28図)

この土坑は、A区井戸5掘り方の東南部に掘り込まれていた。平面は径約80cmの円形で、深さは20cm程度であった。

出土遺物はc-4土坑3と同種の土師器の皿がある。第28図6は瓦質焼成の羽釜で、ツバ直



第28図 d-5 土坑3 出土物実測図

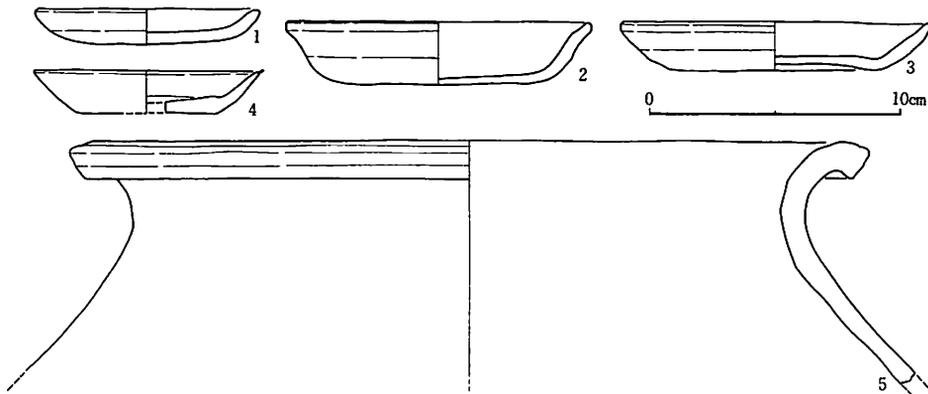
下に脚が貼り付けられている。7は土師器の甕で、体部外面は粗い平行条文の叩きがなされている。内面はナデ調整である。また外面の一部にはススが認められる。

土坑の規模や出土遺物から見て、c-4 土坑3 と同時期のものと13世紀代と思われる。

7. e-5 土坑3 (第29図)

この土坑はe-5 区の中央東寄りで見出された。東西に長い小判形の平面で、南北は約80cm、東西は2m程度と思われるが、西端は確認していない。深さは40cmほどで、断面は逆台形を呈している。出土遺物は多くない。

第29図1~3は土師器の皿で、口径約9cmのもの、口径約12cmの2種がある。4は口禿げを有する中国製の青磁皿である。釉は青味がかかった灰白色を呈している。5は須恵器の甕で、外面には比較的細かい平行条文の叩きがなされている。叩きは頸部までなされているが、その後ナデ調整が加えられている。

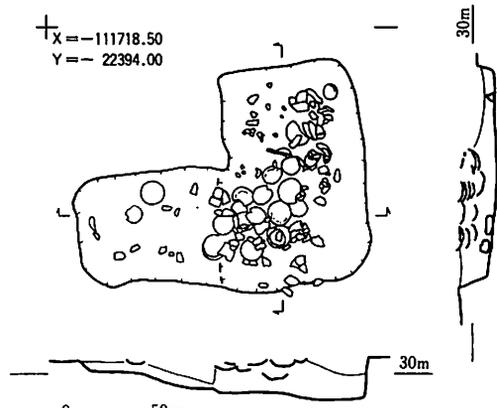


第29図 e-5 土坑3 出土物実測図

8. c-7 土坑1 (第30~32図, 図版第12)

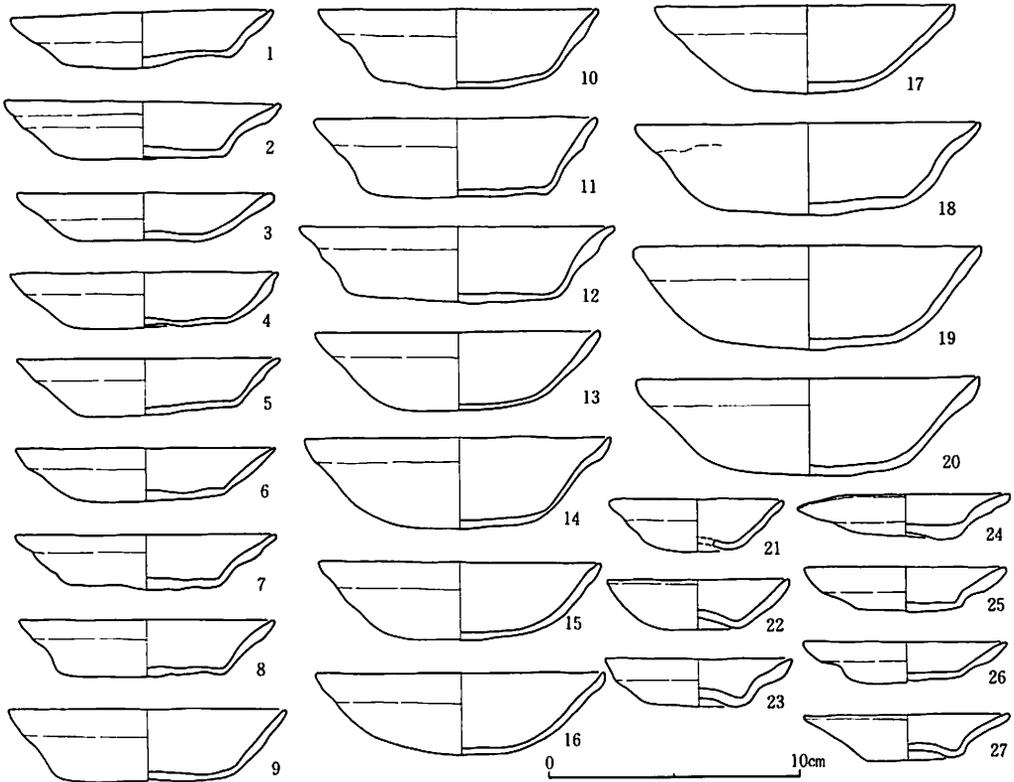
この土坑はA区南半の中央部で検出された。南端はA区溝1により斜めに削られている。また、土坑南半に直交するように土坑状の掘り込みがあり、一応c-7 土坑2としたが、出土土器の形式などは同一で、切り合い関係も今一つ判然としない。

土坑1は平面が南北に長い長方形で、南北約1.2m、東西約0.7m、深さは20cmほどであった。遺物は土坑内の中央部から西南寄りに特に集中していた。

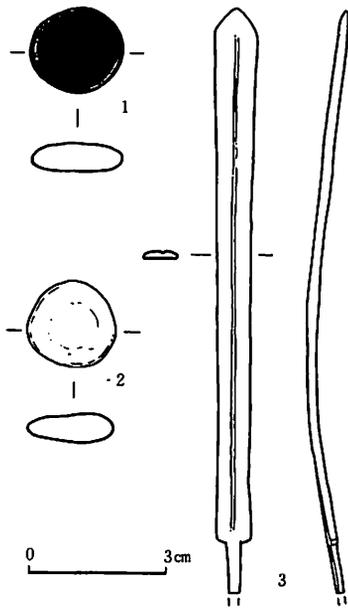


第30図 c-7 土坑1 遺構実測図

第31図は土師器皿の類である。土器は褐色系(1~12・23~27)と白色系(13~22)に大別できる。褐色系には口径8cm前後のもの(23~27)、口径10.5cm前後のもの(1~8)、口径11.5cm前後のもの(9~12)の3種がある。大きさには差があるが、調整などは基本的に同一で、内面と口縁部外周をナデ調整し、底面は未調整で指紋や掌紋が多数認められるものである。またいずれも器体の歪みが著しい。白色系には、口径7cmほどで底部中央の盛り上がるヘソ皿



第31図 c-7 土坑1 出土遺物実測図(1)



第32図 c-7土坑1出土遺物  
実測図(2)

(21・22)と、口径11.5cm前後のもの(13~17)、口径13.5cm前後のもの(18~20)がある。これも調整は内面と口縁部外周をナデ調整し、底面は未調整のものであるが、褐色系の土器より調整は丁寧で歪みも少なく、器壁の厚さも比較的一定している。また胎土も精良な土が用いられている。褐色系と白色系の個体数の比率は、およそ4:1程度であった。土器類の特徴からこの土坑は14世紀前半代のものと思われる。

土器類に混って基石が2点出土しているのが注目される。黒石と白石があり、どちらも石製である(第32図1・2)。また長さ13cm、幅0.7cm、厚さ約0.2cmの銅製品が出土している(同3)。この一端は茎状につくられ、もう一端は圭頭状につくられている。横断面は扁平なカマボコ状で、盛り上がった方の面に、縦方向の1本の沈線が認められる。

土坑内のほぼ中央、土器集中部の下位からは刀子も出土した(図版第12下)。刀身の錆化が著しいため細部はわからないが、全身20cm強、刀身幅2cm程度である。出土状態は南西-北東方向に傾けて置かれ、

南西端側には束と思われる木質が認められるため、切先は北東を向く状況であった。

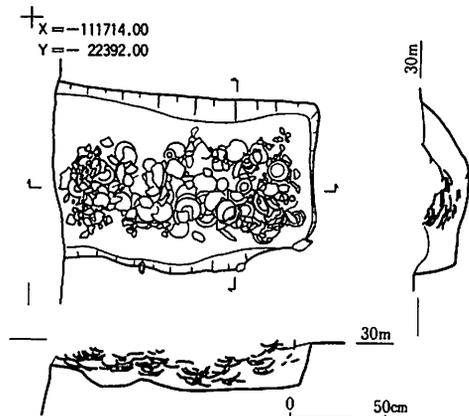
なお、この土坑内からは若干の魚骨も出土している。

9. c-9土坑2(第33・34図, 図版第11)

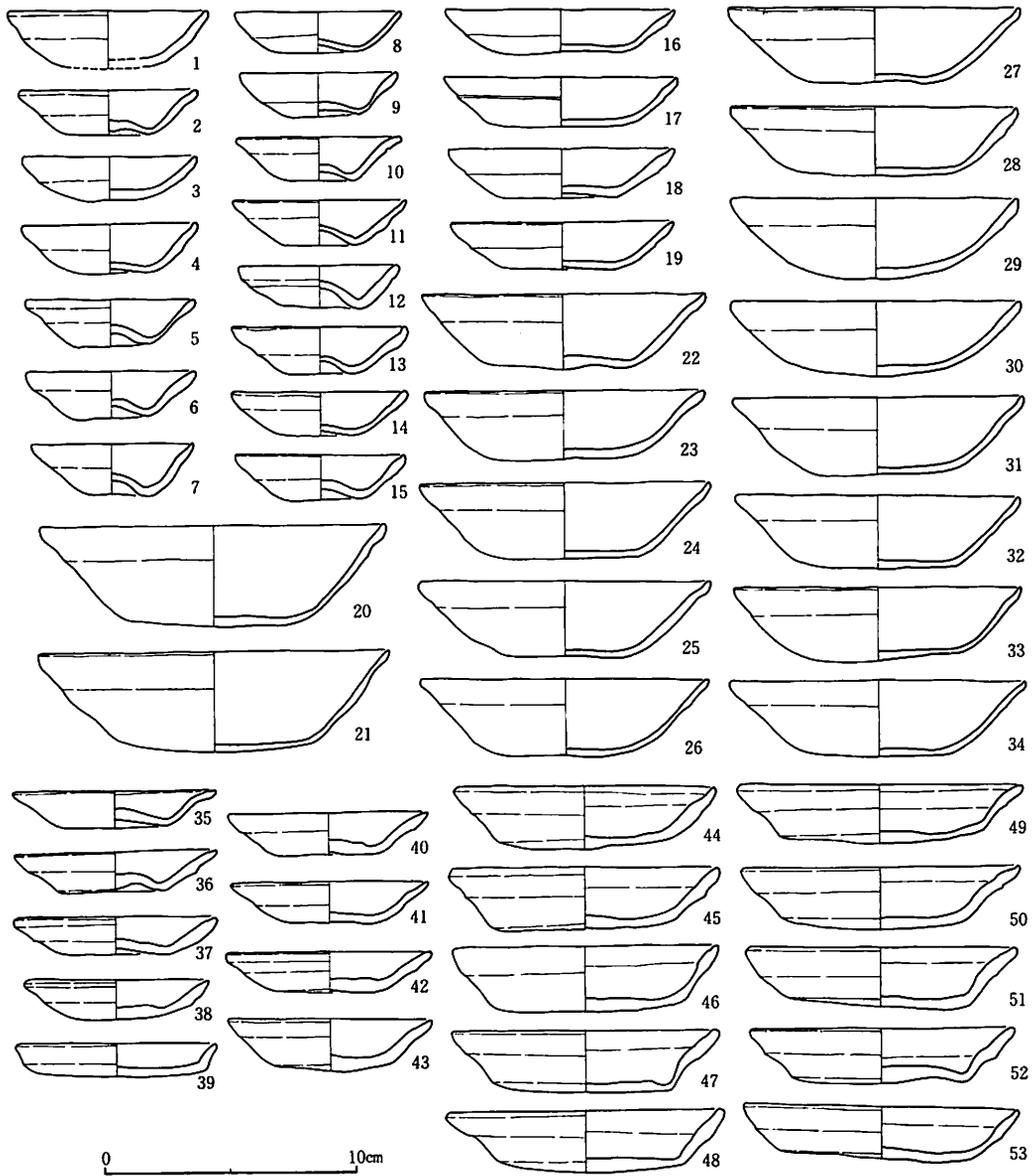
この土坑はA区中央部のやや南寄りで検出された。東部はd-6土坑2を切り込み、西端は近代の掘り込みで切り取られている。平面は東西に長い長方形で、南北約80cm、東西は1.4m以上である。深さは検出面から約25cmであった。土坑内からは土器類が多量に出土している。土器の重なりの様子から、投入は主に南側からなされたらしい。

出土した土器類は白色系(第34図1~34)と褐色系(35~53)に分けられる。土器の種類はc-7土坑1と同様であるが、白色系の中に口径約9cmの比較的浅い皿(16~19)が加わっている。この型の皿には口縁部にスガ付き、燈明皿とされたものがあるが、他の器種には燈明痕の認められるものはない。

この土坑からも刀子が出土している。出土位置は土坑中央部の南寄りの部分で、北西-南東方向に置かれている。これも錆化が著しく、細部は不明であるが、全長約30cmで南東側に木質



第33図 c-6土坑2遺構実測図



第34図 c-6土坑2出土遺物実測図

が認められる。

10. d-9土坑1 (第35・36図, 図版第14上)

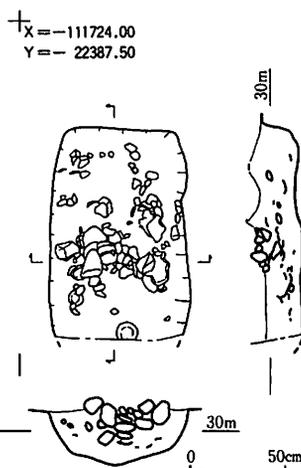
この土坑はA区の東南隅で検出された。南北に長い長方形の平面で、横断面は浅いU字形を呈している。東西は約70cm, 南北は検出した分が1.1mで、さらに発掘区外にのびているが、床面が南部でやや立ち上っているため、本来の南北長は1.2~1.3mほどと思われる。深さは約30cmであった。

この土坑の中には土器類とともに径10~20cmの河原石20個あまりが投入されていた。この土

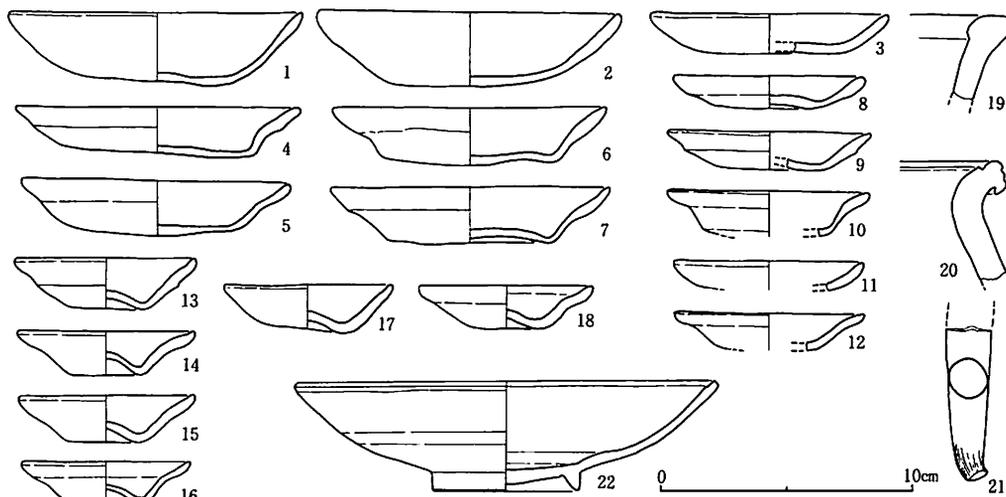
坑からも刀子が出土しており、土器類の形式や土坑の規模が、c-7土坑1・c-6土坑2と同様であるが、土器の量はかなり少ない。

第36図1～3・13～18は白色系、4～12は褐色系の土師器皿である。白色系土器の中では13～18のヘソ皿が目立つもので、焼成時の黒斑を有するものが多い。また3は燈明皿である。褐色系の中でも10～12は燈明皿として使用されている。

19は、口径60cmほどのタライ形の平底盤の口縁部であるが、この土坑からは口縁のごく一部だけが出土した。20は須恵器の甕である。21は脚付羽釜の脚部である。22は中国製と見られる青磁の皿で、高台内を残して全体にややくすんだ青白色の釉が施されている。細かい貫入があり、口縁端は釉が削り取られて



第35図 d-9土坑1遺構実測図



第36図 d-9土坑1出土遺物実測図

いる。

刀子は土坑中央部の石や土器集中部の下位から出土した。3片に割れており、全長は25cm程度と見られる。これも錆化が著しい。

11. c-9土坑1 (第37・38図, 図版第17)

この土坑はA区南端部で検出された。平面は南北に長い長方形で、南北1.1m, 東西0.7mを測る。深さは20～25cmである。この土坑は四隅に、土坑床面よりさらに10cmほど深いピットがつくられており、西北隅のピット底には石が入っていた。この土坑の北と西には他の土坑や住穴が連なっている。遺物は土坑の南半に、南方から投入された状態で出土した。

第38図1～3・9・10は白色系、4～8は褐色系の土師器皿である。3には燈明痕が認められる。11は円形の瓦器火鉢である。この他にもう1点同一個体と思われる破片があり、これに

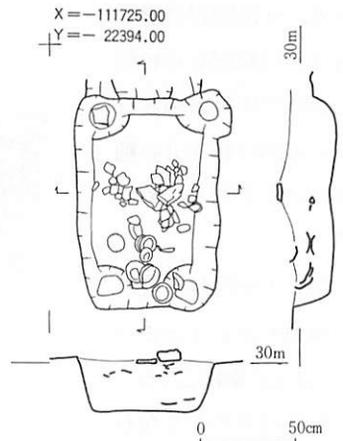
は短かい、逆台形の脚が貼り付けられている。12は陶器の甕で、口縁部から肩部にかけて、濃緑色の灰釉が施されている。

なお土坑中央部には扁平な石が2個、土器類とともに出土している。

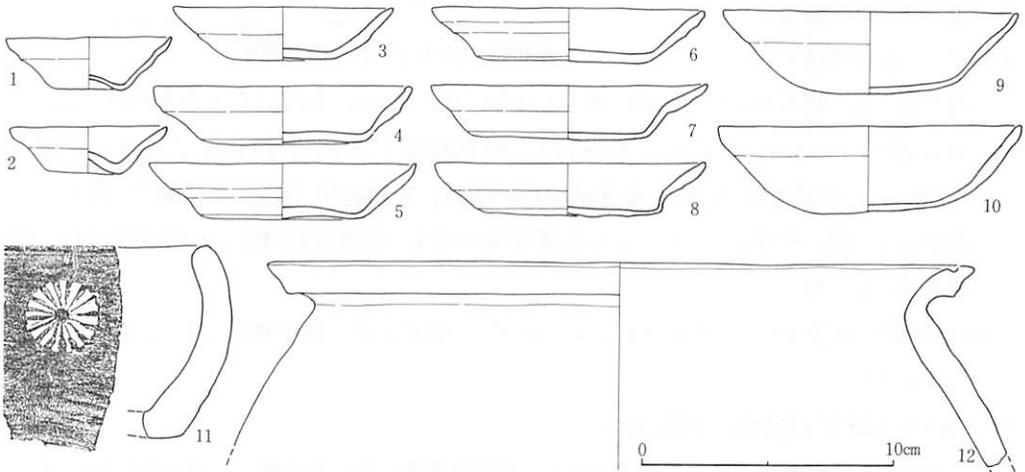
12. c-8 土坑1 (第39図, 図版第14下)

この土坑はA区の南端部で検出された。平面は一辺約80cmのはぼ方形で、深さは15cmほどであった。土坑の北半はA区井戸6の南に張り出した部分を掘り込んでいる。

土坑内の埋土には、挙大ないしそれ以下の礫を多数含んでおり、これに混って土器類が出土している。土器の形式はc-9土坑1と同様の褐色系土師器皿で、白色系土器は少なかった。



第37図 c-9 土坑1 遺構実測図



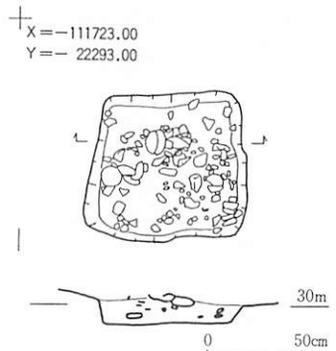
第38図 c-9 土坑1 出土遺物実測図

た。また破片が多く、完形に復原できるものは少ない。またごくわずかの骨片も出土している。

13. b-8 土坑群 (第40~43図, 図版第15)

この土坑群はA区の南西隅部で検出された。各々の土坑は不正円形または矩形を呈するようであるが、これが切れ目なく連続しており、また上層に礫が多量に散布していたため、それぞれの土坑を識別するのは困難であった。出土遺物にはやや離れた位置から出土したものが接合しており、この土坑群はほぼ同時期の内につくられたものと思われる。

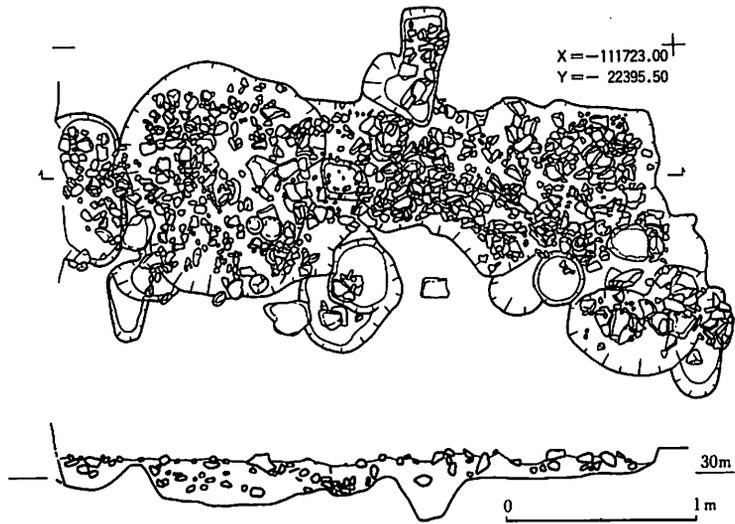
b-8 土坑2としたものは土坑群の西よりの部分である。第41図1~7は灰褐色を呈する土師器の皿で、口径が8.5cm前後のもの(1~5)と、13.5cm前後のもの(6・7)の2種がある。8は東播系のコネ鉢で、口縁部は灰黒色を呈して



第39図 c-8 土坑1 遺構実測図

いる。9は陶器の甕である。口縁部から肩部にかけて灰釉が施されているが口縁部分の釉はほとんど剥落している。

第42・43図は土坑群の東寄りからまとまって出土した銅銭である。これらはやや大きな石の傍から「サシ」の状態で検出された(図版第15下)。総計64枚で



第40図 b-8土坑群遺構実測図

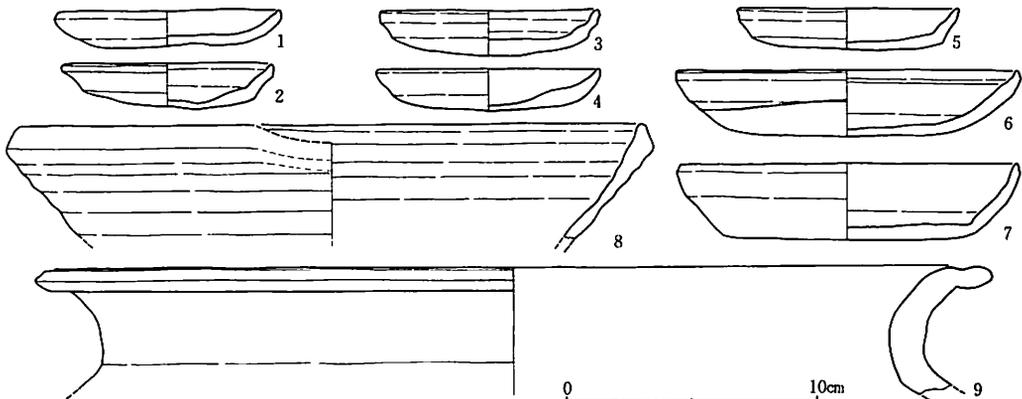
いずれも輸入銭と思われるが、銭銘の読みとれないものもある。種類は以下のものがある。

開元通宝(1~12), 乾元重宝(13・17), 太平通宝(15・16), 淳化元宝(17), 景德元宝(18), 天聖元宝(19~23), 皇宋通宝(24~33), 至和元宝(34), 嘉祐通宝(35・37), 治平元宝(38), 熙寧元宝?(39), 元祐通宝(40~42), 紹聖元宝(43), 元符通宝(44), 聖宋元宝(45~47)

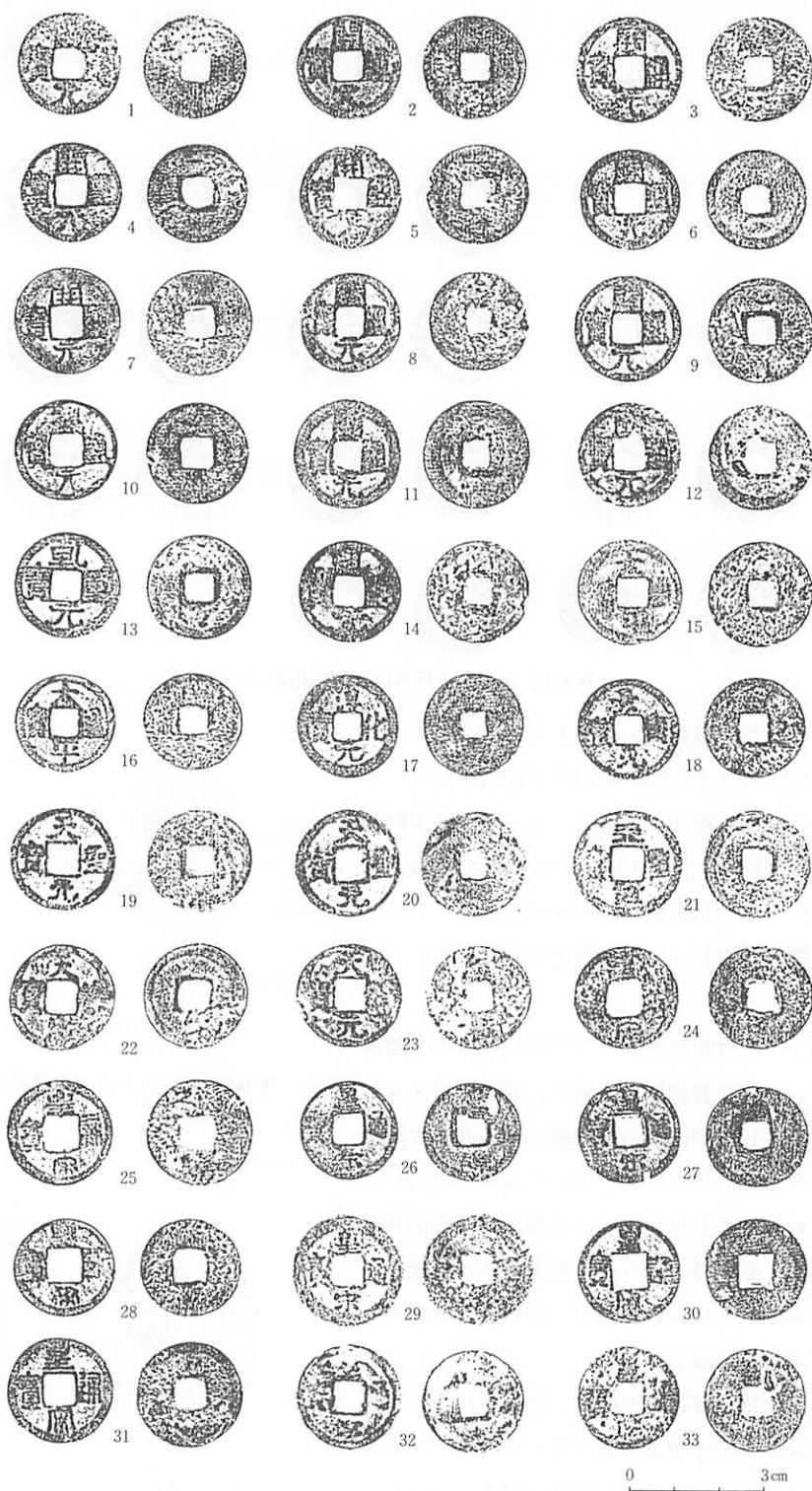
唐代の「開元通宝」から、最も新しいものは宋の「聖宋元宝」(建中靖国元年(1101)初鑄)までが含まれている。

#### 14. d-8土坑5(第44図, 図版第13)

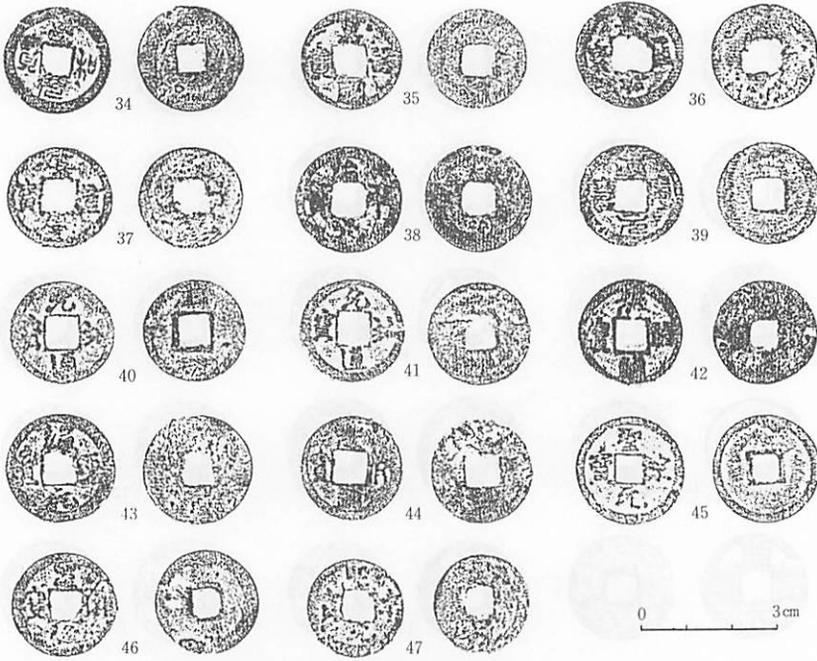
この土坑はA区南部の東壁際で検出された。平面は東西に長い長方形で、東西約1.4m, 南北約0.6m, 深さ約0.4mであるが、内部も周囲にも後世の掘り込みがかなりある。土坑内には拳大から人頭大の石が多く投入されていた。出土遺物には土師器皿, 陶器の甕などがあり, 土器の形式はc-9土坑1などと同じであるが, 出土点数は少ない。



第41図 b-8土坑2出土遺物実測図



第42図 b-8土坑群出土銅銭拓影(1)



第43図 b-8土坑群出土銅銭拓影(2)

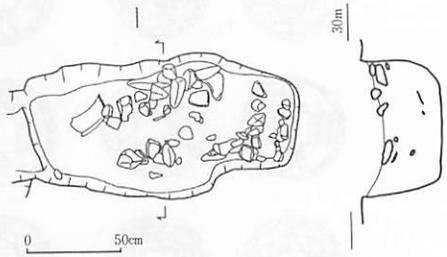
15. d-5土坑1 (第45・46図)

この土坑はA区中央部の東寄りで検出された。A区溝2の砂利層に掘り込まれている。平面は径約1mのほぼ円形を呈し、底は丸くなり、深さは35cmほどであった。遺物は底面から30cmほど上位で主に出土し、土器類に混じって拳大程度の石も出土している。

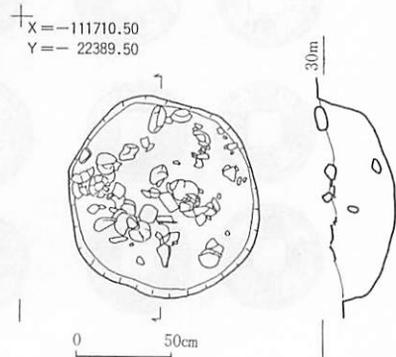
第46図1～7は褐色系、8～10は白色系の土師器皿である。11は瓦質焼成の土釜で、底面にはススがついている。12は中国製の青磁碗で、外面に手描きの鎬蓮弁の退化したものかと思える文様があるが、小片のため判然としない。13は東海地方系の山茶碗と思われる。底部は糸切りで、断面が小さな逆三角形の高台が貼り付けられており、畳付けにモミガラ（糞）の圧痕が認められる。

16. c-5土坑2 (第47・48図, 図版第16下)

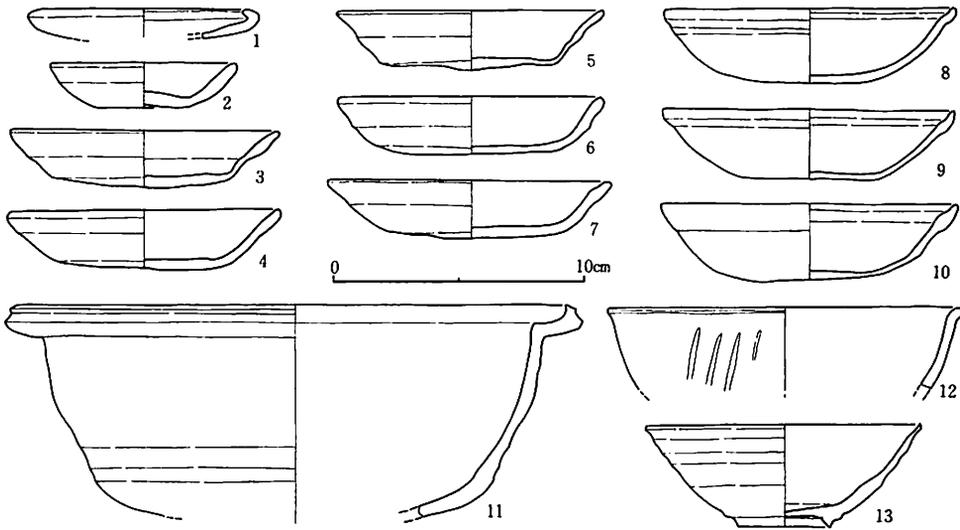
この土坑はA区中央部のA区井戸5の南で検出された。平面は不正形で、深さは30cmほどであった。北端部は他の土坑に切り切られている。遺物は底面



X=-111725.00  
Y=-22387.00  
第44図 d-8土坑5遺構実測図



X=-111710.50  
Y=-22389.50  
第45図 d-5土坑1遺構実測図



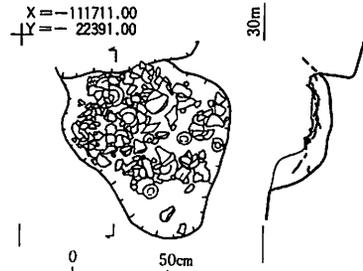
第46図 d-5 土坑1 出土遺物実測図

から10cmほど上位に集中しており、挙大の石も混っていた。

第48図1～3・17～19は白色系、4～16が褐色系の土師器皿である。他に瓦質の、短かい逆台形の脚を付けた円形火鉢の破片も出土している。

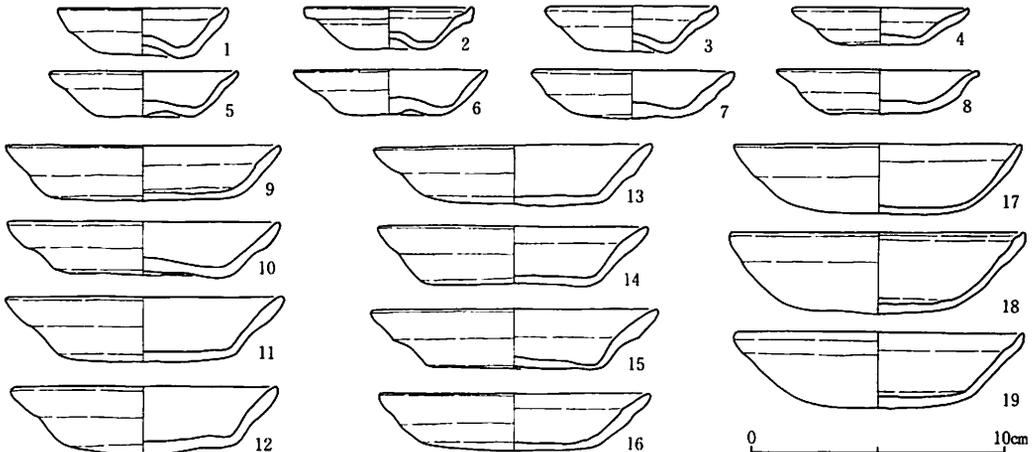
17. b-5 土坑1 (第49図)

この土坑はA区中央部西寄りの、A区井戸2の南で検出された。平面は径約60cmで、深さは50cmほどであった。東側にも同規模の土坑があり、それを切ってつくられている。この二つの土坑の北約1mにも同じように切り合いのある同大の二つの土坑がある。



第47図 c-5 土坑2 出土遺物実測図

第49図1・2・7は白色系、3～6は褐色系の土師器



第48図 c-5 土坑2 出土遺物実測図

42 第3節 鎌倉・室町時代

皿である。他に口縁部分が外反する瓦質の土釜片や平安時代の瓦も若干出土している。

18. d-6ピット群出土遺物

(第50図)

今回の調査では特にA区を中心に、多数の柱穴と見られるピットが検出された。その大多数にはほとんど遺物を含んでいないため、時期の判定が困難であるが、ここではd-6区で検出さ

れたピット群の遺物を一例として掲げる。d-6区では主に南北方向に連なるピット群が検出されている。

第50図1～3は白色系のヘソ皿で、4も白色系の土師器高杯の脚部である。細かく面取りされているが、幅は一定していない。5は滑石製の石鍋底部片である。底径の10cmほどの小形のものになると思われる。6は中国製の白磁の皿である。釉は底面をのぞく全面に施

され、少し青味がかった白色を呈している。口縁部はほぼ水平に外反し、端部に切り込みを入れて輪花を形取っている。

19. c-9土坑2 (第51図, 図版第22上)

この土坑はA区の最南端で検出したが、土坑の大部分が発掘区外に続いており、規模は不明である。

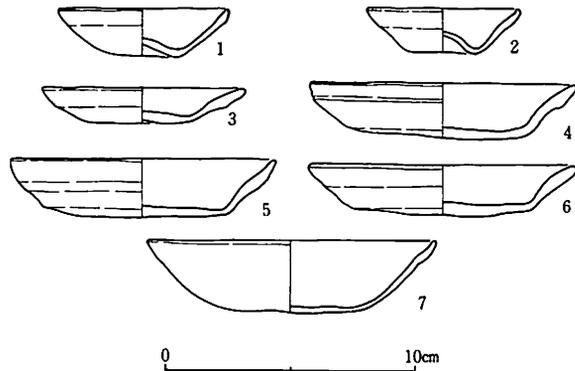
第51図1・2は口径13cm前後の土師器の皿で、2は燈明皿として使用され、口縁部の全周にススが付いたものである。3～5も土師器の皿であるが、底面に墨で「顔」が描かれたものである。3にはマユ・目・鼻・髭、4には目・鼻の一部・髪の毛、5には顎髭が認められる。6は陶器の襷鉢である。内面の下ろし目は疎らで、櫛ガキではなく、一筋ずつ引いているようである。見込みには\*印に筋がつけられている。あまり焼け締ってはいないが、硬質の焼成で、赤褐色を呈している。

土器から見て、この土坑の年代は室町最末期の15世紀代かと思われる。

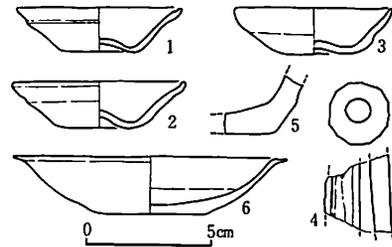
20. その他の遺物 (第52図)

第52図7はA区井戸3近辺から、9はd-6土坑2の南側で正位置で埋め込まれたような状態で出土した。2・4・5は近代のc-5土坑1の遺物に混って出土した。他は包含層中の出土である。

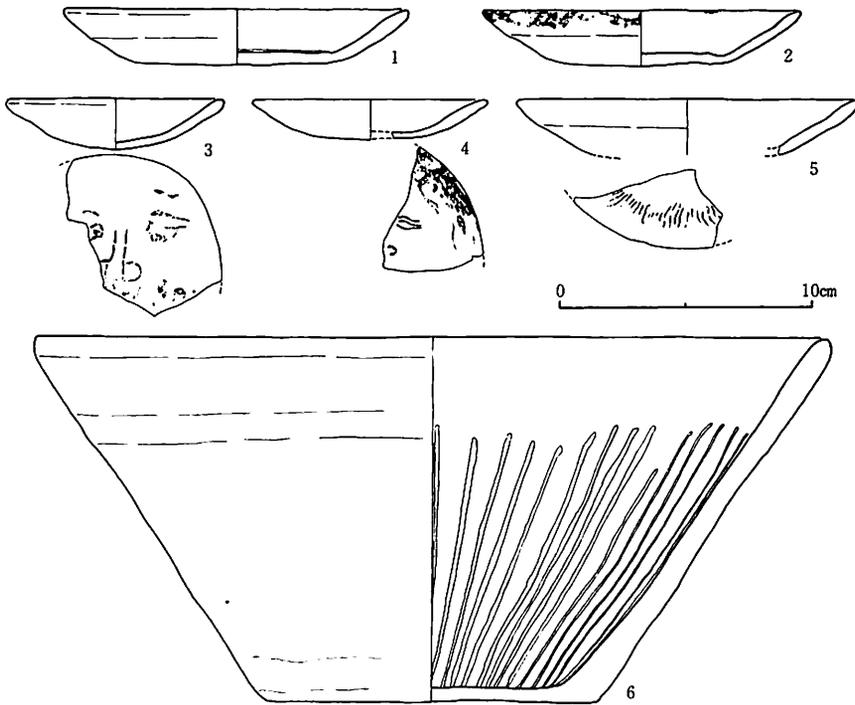
1・8は瓦器の碗である。1の焼成は比較的良好であるが、ミガキはかなり粗略で外面の凹凸も著しい。底部には断面半円形の高台が貼り付けられている。8は器体の外周に、縦に5個



第49図 b-5土坑1出土遺物実測図



第50図 d-6ピット群出土遺物実測図



第51図 c-9土坑2出土遺物実測図

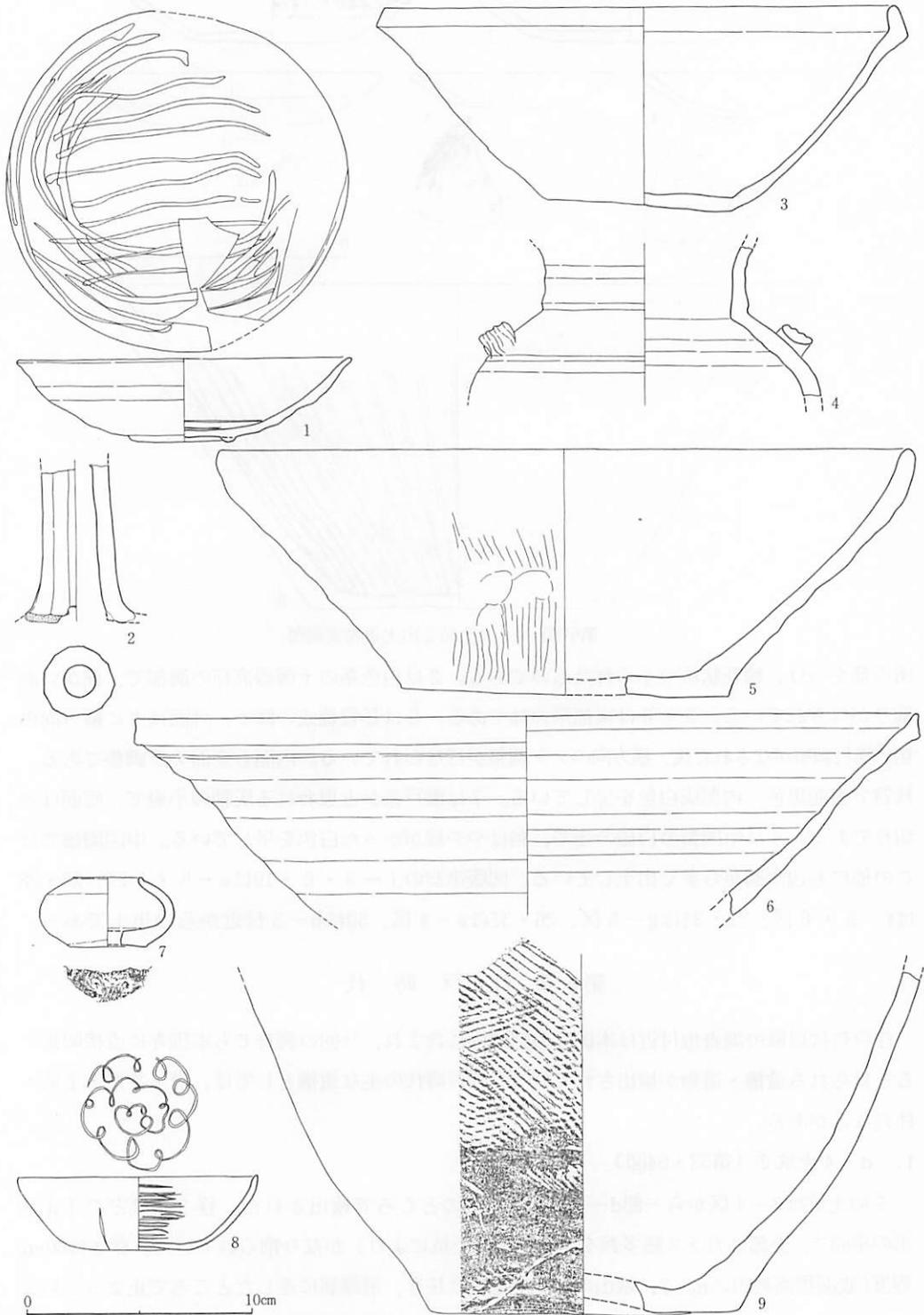
所の筋をつけ、輪花状につくられたものである。2は白色系の土師器高杯の脚部で、細かい面取りがなされている。3・6は東播系の鉢である。5は瓦質焼成の鉢で、外面は主に縦方向の粗い櫛目調整がなされた後、横方向のナデ調整が行なわれている。内面も全面ナデ調整である。軟質で表面黒色、内部灰白色を呈している。7は瀬戸系かと思われる灰釉の小壺で、底面は糸切りである。4は中国製の白磁の壺で、釉はやや緑がかった白色を呈している。中国陶磁ではこの他にも包含層から多く出土している。図版第23の1～3・6・19はe-5・6区、20・28はf-5・6区、22・34はg-5区、26・31はe-4区、30はb-3付近からの出土である。

#### 第4節 江戸時代

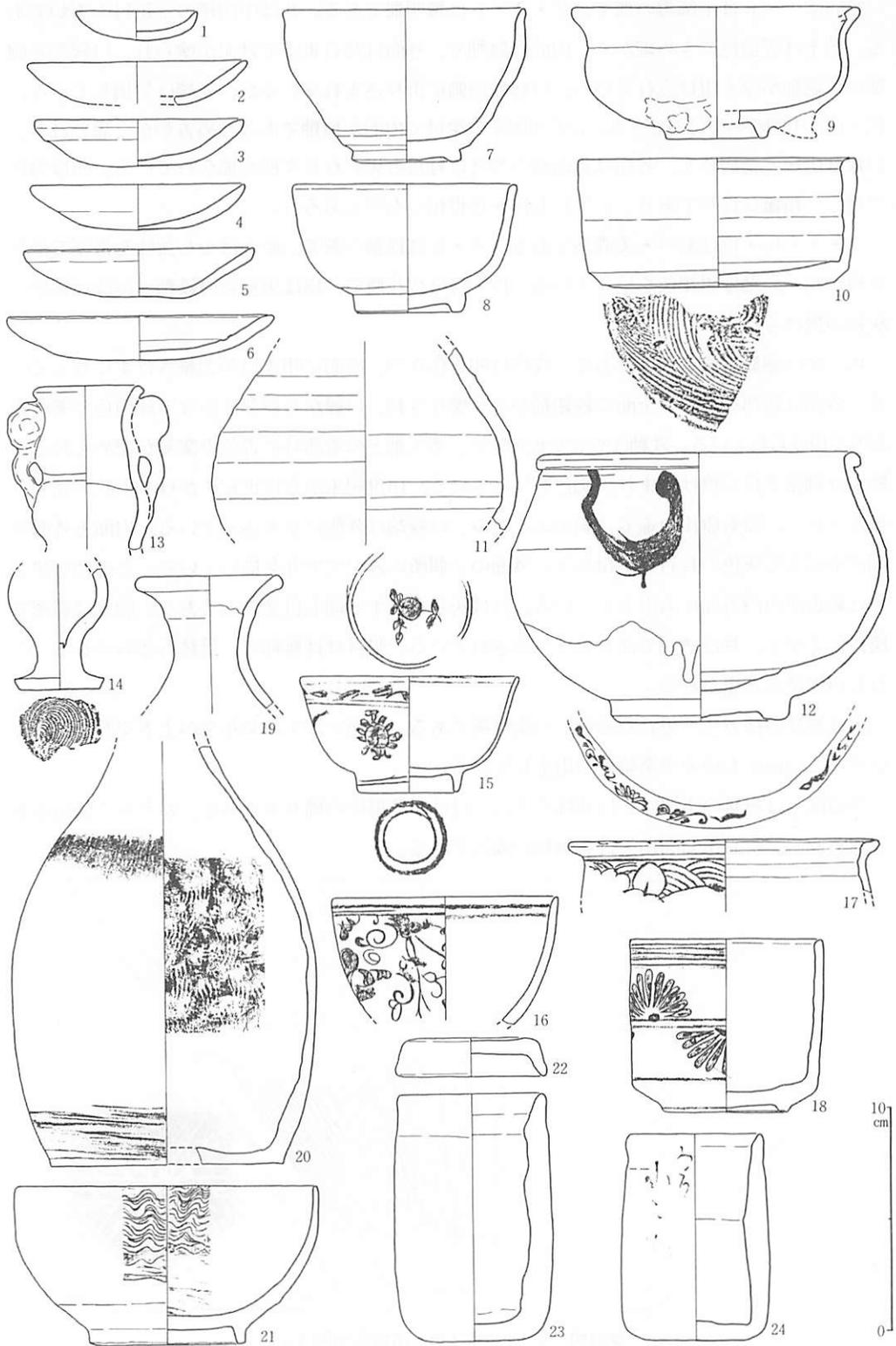
江戸時代以降の調査地付近は本国寺の惣境内に含まれ、今回の調査でも本国寺に直接関係すると見られる遺構・遺物が検出されている。江戸時代の主な遺構としては、溝・井戸・土坑・柱穴などがある。

##### 1. d-4土坑2 (第53・54図)

この土坑はd-4区から一部d-3区にかけてのところで検出された。径2mほどの不正円形の平面で、上部はガラス瓶多数を含む現代の土坑により、かなり削られていた。深さは60cm程度(底面標高約29.5m)で、地山の粘土層を掘り抜き、混礫層に達したところで止まっていることから、この土坑は土を採取した跡と考えられる。遺物は土師皿・焼塩壺、瀬戸・美濃・備前・唐津・伊万里および中国製の陶磁器類などが出土している。



第52図 その他の出土遺物（鎌倉・室町時代）



第53图 d-4土坑2出土遺物実測図(1)

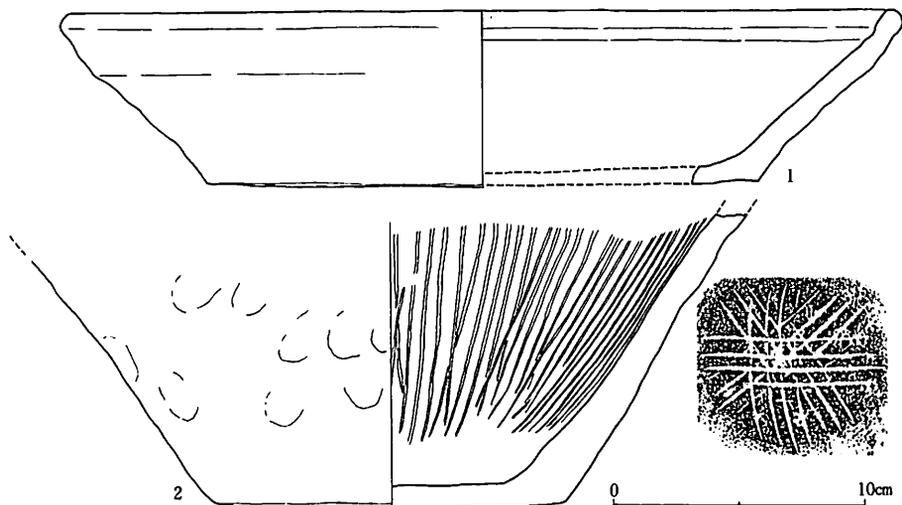
第53図1～6は土師器の皿で、2・4・5は燈明皿である。9は中国産の三足付の香炉である。胎土は灰白色できめ細かく、内面は無釉で、外面は高台裏まで鉄泥が塗られ、口縁部と脚部に青磁釉が厚く掛けられている。口縁は内側に折り込まれているが、先端は欠損している。15・16は中国産の染付碗である。17も中国産の染付で内面が無釉であるため香炉かと思われる。口縁は広縁で菊唐草文、外面は青海波の地文に牡丹と思われる文様が描かれている。胎は白色で薄く、精緻な作りである。いずれも15～16世紀のものであろう。

7・8・13・17は瀬戸・美濃系である。7・8は鉄釉の碗で、胎土は少し黄味を帯びてややきめが粗い。釉は黒褐色を呈している。13・14は仏花瓶で、13は黒褐色の鉄釉、14は淡緑色の灰釉が掛けられている。

19・20は朝鮮唐津の徳利である。成形は叩き作りで、内面に叩き目が調整されずに残っている。外面は底部を除いて全面に鉄鉛釉がハケ塗りされ、口縁から肩部にかけて緑白色の薬灰釉が厚く掛けられている。鉄釉はややかセ気味で、薬灰釉との境部分に青色の窯変が認められる。胎土は稠密で良く焼け締まり、褐色を呈している。16世紀末から17世紀にかけての唐津徳利と推定される。12も唐津の壺で、胴がふくらみ、口縁端は外側に巻き込んでいる。内面と外面の胴部中ばまで灰色の長石釉が掛かり、外面の一個所に鉄泥で半丸を描いている。この他唐津系では絵唐津の四方皿片も出土している。21は灰色を呈する刷毛目文の碗である。胎土は稠密で灰白色を呈し、釉は透明で高台裏まで施されている。畳付けは無釉で、目跡も認められる。これも唐津系かと思われる。

18は初期の伊万里と思われる筒形の染付碗である。外面には半截菊花文が上下交互に廻っている。この他にも伊万里系染付が出土している。

第54図1は無釉の平皿、2は摺鉢で下ろし目は5条単位の櫛ガキである。おそらく備前系かと思われる。なお第53図10・11も無釉の陶器である。



第54図 d-4 土坑2 出土遺物実測図(2)

第53図22～24は焼塩壺の蓋と身で、刻印はないが24の外面には墨書がある。文字は縦2行に書かれているようであるが、かなりかすれているため、判読できない。焼塩壺はこの土坑から他に、27の大きさのものが2点出土している。

## 2. B区溝1 (第55・56図)

この溝はB区の東端の北から南まで通して検出された。肩部の幅は、東側が未確認であるが、少なくとも8mはあろう。溝底の幅は約5mで、横断面は逆台形を呈しており(第55図)、溝というより堀といった規模のものである。埋土は3層に大別できる。最下層は黄褐色の砂礫層で、この層にも陶磁器片を若干含んでいる。その上層は厚さ50～80cmの砂層であった。この砂層はほぼ均質で、遺物は少ないが、陶磁器片や木炭細片を含んでいた。これより上層は主として暗褐色の粘質土で、陶磁器類を中心に、多量の遺物が含まれていた。先に触れたようにこの溝の中ほどは掘り下げなかったが、南端にあけたサブトレンチの断面では厚い砂層がなく、下層は黄褐色土で、この中にも多量の陶磁器類が含まれていた。遺物の量がかなり大量であるため、以下そのごく一部を紹介する。

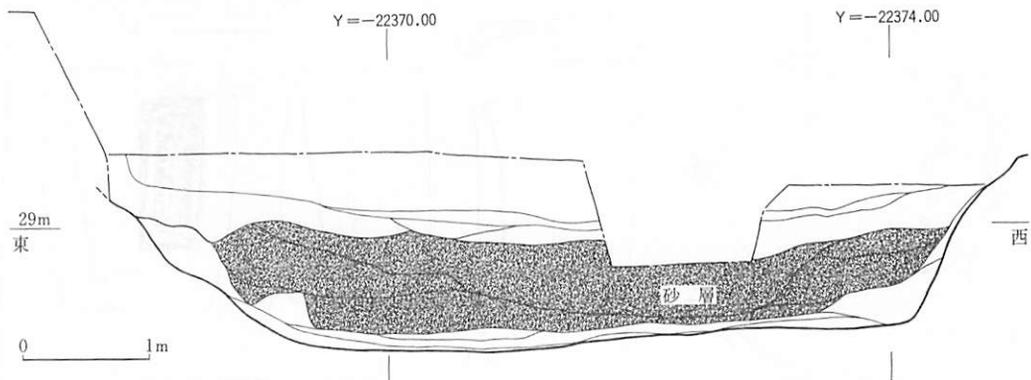
第56図1・2は土師器の皿で、1は燈明皿として使われている。3は白色を呈する素焼の小壺で、外面には雲母粉が認められる。

3は褐釉を施した皿で、釉は畳付けを除く全面に掛けられている。また畳付けと見込みに5個の目跡が認められる。

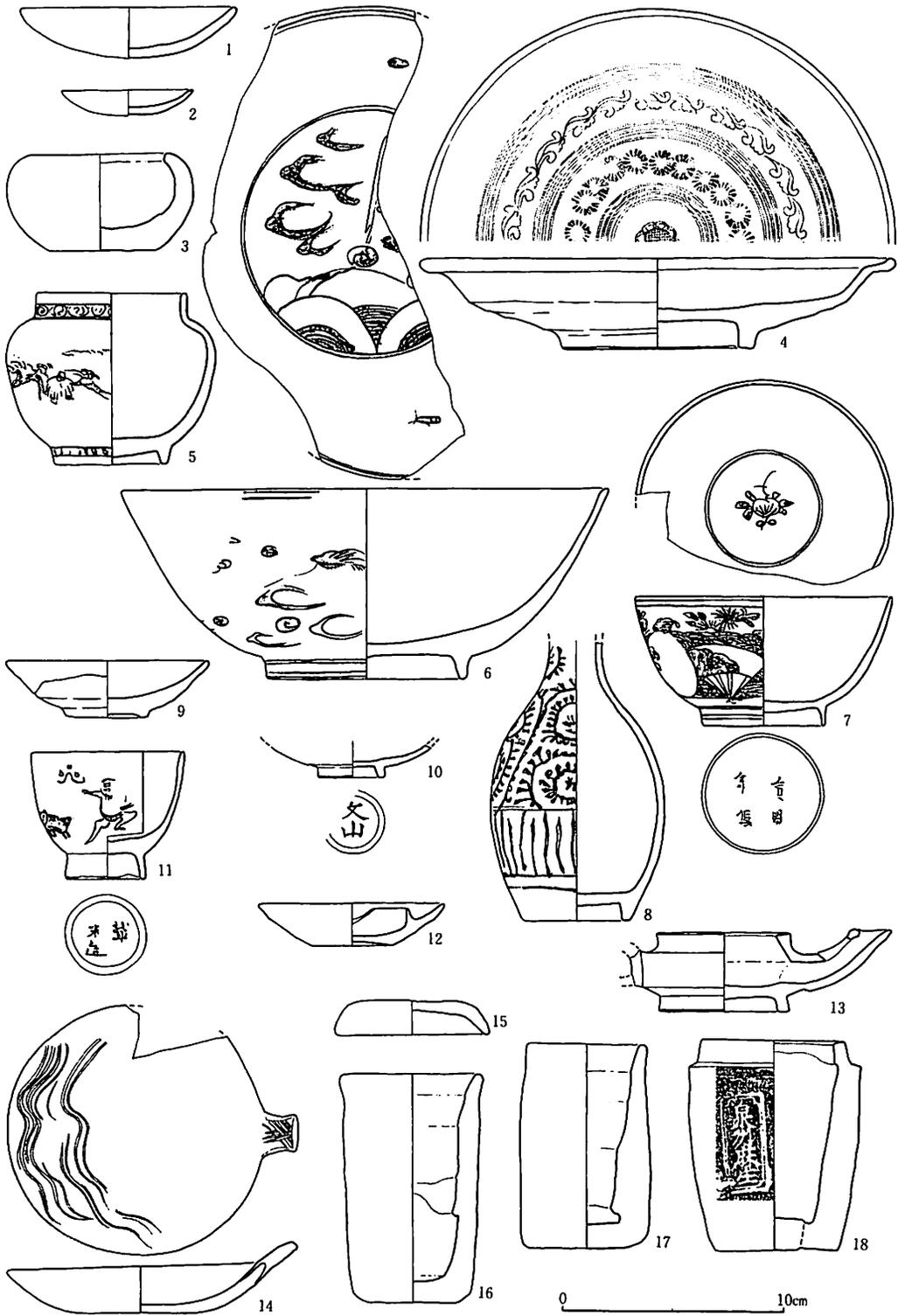
伊万里系の染付もかなり出土している。5は初期伊万里の小壺、7は青海波に扇文様の碗、8はいわゆる「蛸唐草」文の徳利である。6の鉢には外面に龍が描かれている。欠損が多い。

9は内面と口縁部外周に濃緑色の灰釉を施した小皿、10は淡灰緑色の釉の京焼碗で、高台内に『文山』の墨書がある。

11は銚絵の煎茶碗で、外面にユーモラスな描写で、犬・相撲・座頭?・鶏?が描かれており、高台裏には『豊米造』の銚絵銘がある。「豊米」は江戸時代後期の文人陶工、青木木米(明和四年[1767]生、天保四年[1833]没)の別号である。「豊米」の号は特にその晩年に用いられた。木米は江戸後期の陶芸界で様々な事蹟をなしており<sup>9)</sup>、今回の調査でその作品が出土したこと



第55図 B区溝1土層断面図



第56图 B区溝1出土遺物実測图

は興味深く思われる。

12～14は燈火用の器具である。12・13は灰黄色の釉が掛かっている。14は土師質焼成の器体で、全体に淡緑色の釉が薄く施されている。15～18は焼塩壺の蓋と身で、18には『泉州床生』の刻印がある。

### 3. その他の遺物（第57～60図）

今回の調査で出土した江戸時代の陶磁器類のうち、注目すべきは、多くの墨書銘のある碗皿類が一括して出土していることであろう。一部であるが、そのうち主要なものを紹介する。

第57図1はA区南部東寄りの包含層から出土した。瀬戸の灰釉片口で、胎は灰白色、釉色は薄い緑色を呈し、底面は無釉である。内面に3個の目跡が付く。底面の、高台裏には『元貞龍』、高台の周囲は『□京□戊辰天二月十八日求之』とある。遺物の該当するような時期の「戊辰」の年は、永禄11年(1568)、寛永5年(1628)、降っても元禄元年(1688)であるが、年号の記述方法などから考え<sup>10)</sup>、このうち寛永5年が妥当かと思われる。おそらく本国寺僧の「元貞龍」なる人物が入手したものかと推測される。

2～14はA区北部の土採取坑から出土している。2は灰釉の、環状のつまみの付いた蓋である。下面に『戊午春秋 両頭学誠代□通之』の銘をもつ。「戊午」の年は元文3年(1738)、寛政10年(1798)、安政5年(1858)となるが、寛政10年以前には遡らないと思われる。14は灰白色を呈した素焼きの土器で、外面に『□弁通□』の墨書があるが、部分のため意味はわからない。

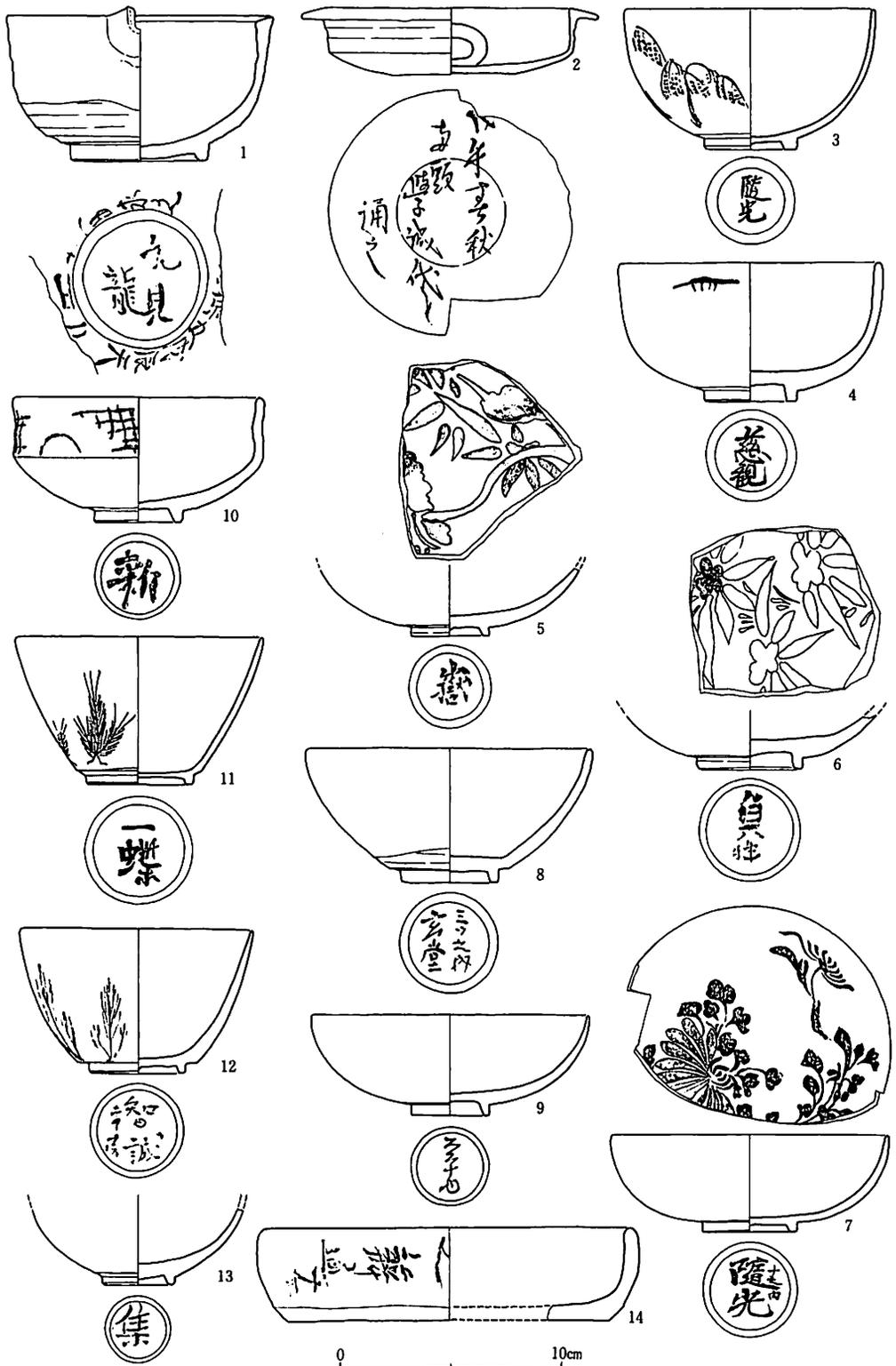
3～13のうち、8は黄瀬戸碗と思われるが、他はいわゆる「古清水」と呼ばれる碗皿類である。多くは黄白色の胎土に透明の釉を掛け、釉下に錆絵で柳木(3)、笠(4)、根小松(11)、染付で垣(10)、染付と錆絵を併用した根小松(12)等を描いている。また青や緑色を基調に朱や金・銀彩を効果的に使った上絵で桜竹文(6)、枝菊文(7)などの文様を施している。墨書銘はいずれも高台裏に書かれている。『随光』、『慈観』、『貞性』、『一蝶』の2字銘や『新』、『嶽』、『集』の1字銘があり、図示したもの以外に『春哲』、『玄秀』、『幸隆』、『集解』、『了泉』、『文句』、『観心』、『観嶺』、『玄』、『焚』などがある。また『三ツ之内 玄堂』、『十之内 随光』あるいは『十之内 春海』、『百二』など数字が記載されるものもある。

これらは本国寺に居住した僧名、もしくは坊院の名称かと思われ、数字の記載から同種の碗皿類が組物の什器として、京焼窯に注文され、寺院に揃えられていたのではないかと思われる。

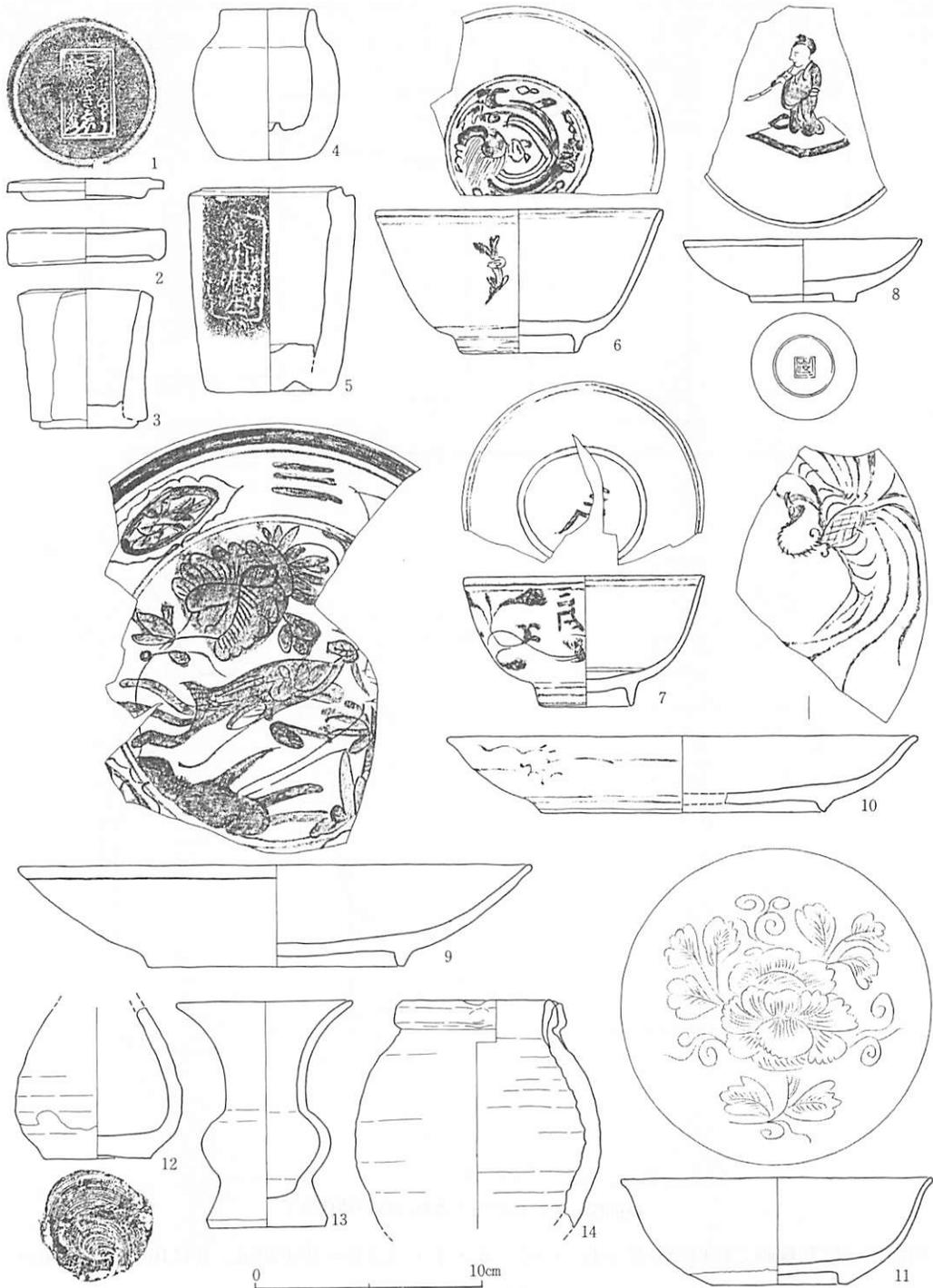
京都の窯業は、江戸時代中期から粟田を中心にその生産規模を拡大させていったことが文献等で明らかにされているもの<sup>11)</sup>、その作品編年や流通等の問題はいま一つ明瞭ではない。今回の出土資料はそれらを明らかにする重要な手がかりともなろう。

第58図1・3はB区、他はA区の主に土採取坑および包含層から出土している。1～5は焼塩壺の蓋と身である。各種のものがあるが、1は白色を呈するもので、上面に『奈んばん里う七度やき志本 ふか草四郎左衛門』の刻印がある。この他図示しなかったが1の身と考えられる<sup>12)</sup>、白色を呈した器壁の厚い扁平な壺も出土している。

6・7・9・11は中国産の碗皿である。6は見込みに団龍文、外面に橘文の描かれた染付碗

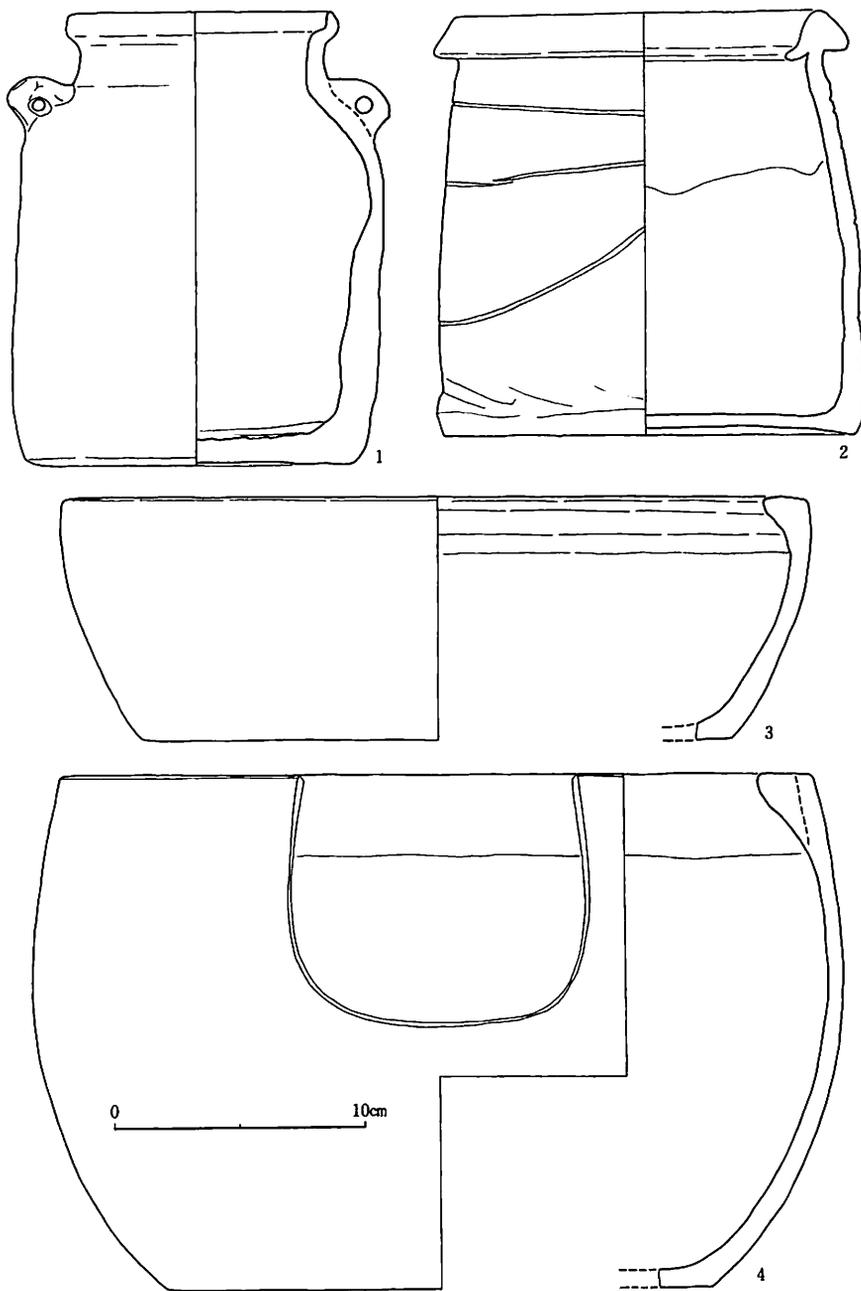


第57図 その他の出土遺物（江戸時代1）



第58図 その他の出土遺物（江戸時代2）

で、7は見込みに『寿』字、外面は唐草文の染付碗である。9は砂付高台をもつ、花鳥文の呉須染付皿である。11は端反り口縁の白磁碗で、器壁は薄く、底部は碁笥底で砂粒が付いている。



第59図 その他の出土遺物（江戸時代3）

内面には陰刻線画で牡丹文が描かれている。6・7・11は15～16世紀頃，9は16～17世紀頃のものかと思われる。

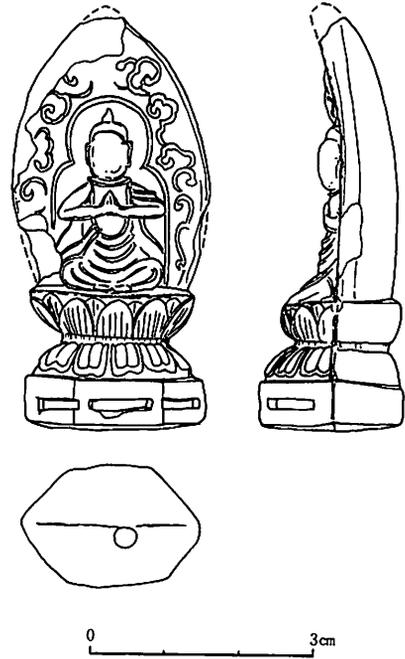
8・10は国産の染付と思われる，8は尺八を吹く人物，10は鳳凰文が描かれている。12は糸切り底の鉄釉の小壺で茶入れとして使われたものと思われるが，口縁部は打ちかかっているようである。13は灰釉の仏花瓶で，12・13は瀬戸・美濃系かと推測される。14は無釉陶器の小壺で，

口縁に片口がつくられている。

第59図もA区土採集坑から出土した遺物である。1は鉄釉の双耳壺で、内外面とも施釉されている。胎土は灰白色で、釉は光沢を帯びた黒褐色に発色している。瀬戸系かと考えられる。2は矢筈口の水指である。胎土は褐色を呈し、よく焼け締っている。口縁の一部から内面にかけて鉄釉が施されているが、他は無釉である。外面には数条の沈線が巡らされており、備前系と推測される。

3は淡灰褐色を呈する素焼の土器で、火鉢かと思われる。4は表面黒色を呈する瓦質焼成の風炉である。表面は丁寧に磨かれており、光沢もある。

第60図も、A区土採取坑のc-3区から出土した、素焼の小仏像である。仏は舟形光背を背に、二重蓮台に座した如来形で、手は合掌の形につくられている。全体は合せ型作りで背面には文様がなく、底面に空気抜き孔があげられている。



第60図 その他の出土遺物（江戸時代4）

#### 註

- 1) 佐原真『畿内地方』（『弥生式土器集成』本編2所収，東京，昭和43年）。
- 2) 小嶋暁子『5. 遺物』（第二阪和国道内遺跡調査会編『池上・四ツ池』所収，大阪，昭和45年）。
- 3) 松本洋明『弥生土器の考察—弥生時代中期の大和型の甕を中心として—』（『末永先生米寿記念献呈論文集』所収，昭和60年）。
- 4) 寺島孝一編『平安京左京四條三坊十三町一長刀鉾町遺跡—』（『平安京跡研究調査報告』第11輯，京都，昭和59年），第55図127。
- 5) 都出比呂志『古墳出現前夜の集団関係』（『考古学研究』第20巻第4号掲載，岡山，昭和49年）。
- 6) 同上。
- 7) 安達厚三・木下正史『飛鳥地域出土の古式土師器』（『考古学雑誌』第60巻第2号掲載，東京，昭和49年）。
- 8) 定森秀夫編『三條西殿跡』（『平安京跡研究調査報告』第7輯，京都，昭和58年），第129図68・69。
- 9) 河原正彦編『顯川・木米・道八』（『日本の美術』第227号，東京，昭和60年）。
- 10) 太田晶二郎『重要文化財嘉禎本十七条憲法は偽物である』（『東京大学史料編纂所報』第八号，東京，昭和49年）。
- 11) 中ノ堂一信『京都黨業史』（京都，昭和59年）。
- 12) 渡辺誠『焼塩』（『講座・日本技術の社会史』，東京，昭和60年），L類。

### 第3章 左京六条二坊六町の地

#### 第1節 平安・鎌倉時代

この六町の地は、平安・鎌倉時代の文献に現在のところ、皆無にちかい状態である。

平安時代の左京六条二坊の中では、五町の六条殿、十町の藤原経忠第、十二町の堀河館、十五・十六町の六条殿(後白河法皇御所)が知られる。しかし、平安後期から鎌倉期にかけての井戸が7基も検出されたことは、この地が生活空間として存在していたことにはまちがいない。

平安時代について鎌倉時代も、邸宅を指定する史料はない。焼亡記事の一つに『猪隈関白記』承元2年(1208)閏4月15日条がある。それによると

亥時許南方有火事、七条北東洞院西辺云々、于時大風吹巽風也、限東々洞院、限南七条、限西朱雀、限北四条大焼亡也、終夜焼亡也、焼亡所々、宣陽院六条殿後白河院長(坊)講堂是也、防門院坊城殿前太政大臣家 右大将公継家 中宮大夫公房家 源大納言通光家中院是也、新大納言公経家 藤三位雅隆家 六条三位経家々 高三位経仲家 左兵衛督教成家 治部卿業兼家 入道内府実宗、家 入道大納言定能、家 大外記良業家 大夫史国宗家、此外雲客家済々、諸人家不知其数、人多焼死云々、其中前民部大輔頼房子童焼死云々、余馳参宣陽門院之間、於四条町辺下人云、六条殿焼亡了、女院御幸於正親町第云々、仍余参正親町第、先之御(謁)成云々、褐女房退出、于時曉更也、

とみえる。この焼亡した地域に、坊門院の範子内親王・前太政大臣藤原頼実以下、下人まで、さまざまの人々が居住していたが、地域性の特色は希薄である。

仁治元年(1240)閏10月8日に摂政藤原兼経等によって、藤原資経・経賢兄弟が亡父の遺領の地六条坊門堀河の家地の争いを評議したことが平経高の日記『平戸記』にみえる。六条坊門堀河と言っても四方の記載がなく、発掘地であると確定できないが、それでも4分の1の確立で、近隣の様子がわかる記事として貴重である。それによると、

大式入道資経、与舍弟三品経賢卿、相論六条坊門堀河地事、依非差急事、裁決于今未断、(中略)件事、兩人亡父宰相入道、建久二年以件家地付属大式入道于時信濃守、彼時其父権右中弁也、書給讓状、件家地資経卿継母之領也、事理不可然、然而已以与判、若有子細歟之由雖存、讓状又其趣不見、多是祖父大納言結構歟、其後継母悔返讓実子経賢卿、建保五年之比云々、此讓状又不載子細、其後又悔返讓孫女経賢卿女子、云々、

とある。建久2年(1191)に資経は、父定経から継母の所領であったこの家地の讓状を与えられた。ところが継母は建保5年(1217)頃に実子経賢にその地を悔返して讓った。さらに、それも悔返して経賢の子の孫女に讓った。継母が資経に讓ったのは祖父経房の意向であると言う。さらにつづけて、

而資經卿入道申云、和与之物輒不可悔返之由所訴申也、大府卿申云、誠不可悔返歟云々、予申云、誠可然、但建久二年經賢卿誕生之後歟、無契約之旨者、不讓実子、可讓継子之儀、尤不審也、定有子細歟、然而經賢卿不申此子細云々。

と、和与の物は悔返さないのだと資経は訴えている。「評議了如例可注付之由、被仰、」とあり、裁決が下されたが、それについては史料は遺されていない。

## 第2節 室町時代以降

### 1. 本国寺の創建

発掘地点は、法務局の台帳によると、明治8年に本圀寺寺領と原野として登記されている。江戸時代の絵図等により、本圀寺の方丈の北裏に該当していることが判る。

本圀寺は、昭和46年11月に京都市山科区御陵大岩<sup>みさきおおい</sup>に移転したが、それまではこの六条二坊六町の地を中心として広大な境内の中に、本堂を始めとする諸伽藍を構えていた日蓮宗の総本山の一つである。

寺の創建は、日蓮が建長5年(1253)に鎌倉松葉ヶ谷に庵を造り、法華堂と称したことに始まると伝えている。日蓮は弘長3年(1263)に配所から許されて、法華堂を再興し、大光山本国寺を興した。二祖大國院法印位日朗は日蓮の寂後、松葉ヶ谷に移り、檀越である工藤長勝の力により、寺を営んだ。徳治2年(1307)鎌倉幕府將軍久明親王から4町の寺領を寄進され、將軍家の祈願所となり、四代日静の嘉暦3年(1328)に、後醍醐天皇の勅願所となった、と寺伝で説いている。

寺の文書によると、貞和元年(1345)3月7日付『光嚴院院宣』に、

勅願所本国寺今度被遷帝都訖、永為不易之寺地、任望之旨、六条楊梅東西二町・南北六町、令全管領、早可被致建造之由、院宣所候也、仍執達如件、

貞和元年三月七日 權中納言隆蔭 奉

三位僧都御方

とある。江戸時代の地誌『山州名跡志』(巻之21)によると、この文書の次に「尊氏公書 袖印有之、是四境傍爾書」とある文書を収録している。それは、

六条法華堂屋敷、南森裏田塚、北五条今道塚、東御所跡旧堀塚、西大宮蔽下、溝塚等事  
右任本地<sup>但四町四方</sup>入込<sup>結之</sup>之例、院宣所候也、沙石竹木御用地之外者、從望可有取用之状、如件、

貞和元年十一月廿一日 直義在判

本国寺

とある『足利直義御判御教書』を掲載している。しかし、二通の文書の四至も全く違い、文書形式もおかしい。院宣では江戸時代の全領域一西本願寺に割譲されない前の状態一である12町を示し、御教書では4町である。院宣を受けて御教書が発給されたのであるから、後世の仮託文書である。森田恭二氏は、論文<sup>1)</sup>の中で、この院宣を取り上げて、

貞和元年三月七日という年月日については、この年は十月二十一日改元であって不審な年

月日が記されている。文意についても、同時代の文書と比べて疑問点が多い。従って本国寺の場合、当初十二町寺地が与えられたかは疑問であるが、六条楊梅に後に十二町の「寺内」を形成する。それは東は堀川通、西は大宮通、北は五条松原通、南はおおよそ七条坊門小路までと考えられる。従って本国寺は南北朝期に六条に寺地を得てから買得などによって寺地を拡大し、中世後期には東西二町南地六町の十二町に及ぶ寺域を形成したと考えられる。このような結果をもとに貞和の文書が作られたと思われる。

と述べている。本国寺は鎌倉から京にいつごろ移ってきたか、時代を確定しえないが『日代御奏聞記録』によると、永徳元年(1381)関白二条師嗣は妙顕寺日霽に「洛中妙顕寺・本国寺等法華宗有之、未聞此義如何」とあり、洛中において妙顕寺と並び称される伽藍を有していた。移転期の貞和年間から約40年後の記述である。貞和元年の移動はともかく、貞和年間頃に中核となる寺院が造られたと推量される。この時期は、発掘の遺構からも推定される。

発掘地点で、鎌倉時代から南北朝にかけて土坑墓が検出されている。ところが、本国寺が移転して来た時期14世紀の後半以降の墓は検出されていない。発掘からも貞和年間頃に本国寺が、この地に造営され、伽藍の移築が行なわれたと思われる。織田信長が上杉謙信に天正元年(1573)または翌年に送ったと言われる上杉家本『洛中洛外図屏風』の右隻下(第61図)に、本国寺の境内が描かれている。禁裏や清水寺・三十三間堂・東寺と並んで、



第61図 上杉家本『洛中洛外図』部分

大寺院であったことがわかる。日蓮宗の一つの本山として重要な位置を占め、天文5年(1536)7月に起った延暦寺衆徒が洛中の日蓮宗徒を襲った天文法華の乱の拠点となり、防戦したことが同月27日条の『石山本願寺日記』にみえる。延暦寺側は、法華宗の寺院を破却し、宗徒は洛外に追放されたが、天文11年に還住した事件である。

『後鑑』永禄11月(1568)10月14日条に引く『安土日記』に、

十四日、芥川ヨリ公方様御帰洛、六条本国寺被成御座、天下一同開喜悦之眉訖、信長モ御安堵ノ思ヲ被成、

とあり、足利義昭が織田信長に奉じられて本国寺に入ったことはこの寺の大きさと、のちに述べる要害の地であったことがわかる。『当代記』に、この翌年の条に、

去年、<sup>(昭)</sup>義秋御所の六条本国寺々中坊共、不残近衛之御所江被運送、義秋家屋并近習之衆為私宅、義秋暫此寺に令居住給間、可被加懇詞之旨、寺僧思を成之処、還て及此儀、為比興之由、京師の上下歌之。

とあり、織田信長が義昭のために建てた近衛御所(旧二条城)に本国寺の建物を移築したとある。寺院建築の他に、僧侶の住む一般的な住宅が多くあったわけである。

天正19年(1591)になると、本願寺の12世准如は、現在の西本願寺の寺領を豊臣秀吉から寄進

をされた。『豊臣秀吉朱印状』(本願寺文書)に、

今度当寺京都へ被引越付而、於六条屋敷傍示之事

南北二百八十間・東西三百六十間之内、本国寺屋敷南北五十六間・東西百二十七間相除之、  
其外令寄附之畢、然上者、地子之儀、如田畠年貢、全可有寺納候也、

天正十九

閏正月五日(朱印)

本願寺殿

とあり、本国寺の南の方六分の一を本願寺に割愛して、現代まで洛中に大伽藍を有していた。

貞享2年(1685)水戸の徳川光圀は、本国寺で母の追善供養を行なってから、寺では「国」を「圀」に改めて、本圀寺と称した。水戸藩が幕末期にこの寺を京都の本拠地としたのも、この縁によるものである。

天明8年(1788)正月30日の大火で、洛中のほとんどが焼亡した。本圀寺も経蔵<sup>2)</sup>等を少し遺して、全焼した。再建されたが、五重塔等は最後まで建てられなかった。

## 2. 本国寺の溝

A区溝1は、A区南部東西方向に検出された。逆台形の横断面で、西半部分の底面が深くなっている。幅は4.5mほどで、その後北側に狭められて約3mの幅になっている。この溝と対応するとは速断できないが、幅6m深さ3mの石垣を施した濠の一部が同町の南に検出されている。

それは本圀寺跡として、京都市埋蔵文化財研究所が、昭和54～56年にかけて発掘調査が行なわれた。それによると<sup>3)</sup>、

発掘調査によって溝で区画された寺内町の一面が明らかになった。その区画内では建物、井戸、柵などが検出されている。この寺内町は後に溝に代わって大規模な濠をそなえ、防御的色彩の濃いものになった。濠は大量の焼土によって埋没しており、天文法華の乱によって全焼した本圀寺寺内町の状況をよく物語っている。

と報告されている。室町時代において、溝が洛中にあり、それを囲む溝が烏丸通りでも検出されている<sup>4)</sup>。本国寺では、溝を濠まで拡大し、要害の地としていた。元亀2年(1571)9月18日付耶蘇会士ガスパル・ピレラの本国寺の報告によると、

都に在る僧院の中三箇所に就き特に予が見たる所を述べし。第一は六条と称する僧院にして、法華宗といふ宗派に属し、三百七十人の坊主此所に住す。此堂は小銃弾の到達することを得べき広さの敷地内に在り。此地所は方形にして、各方面の大き等しく、敷地の周囲には深さ及び幅相当なる濠あり、唯一の通路を有す。堂は甚だ広大にして、太く且つ高き見事なる杉の柱を以て成る三つのナベより成り、建築後四百年なれども甚だ新しく十年ならんと思はる程なり。周囲に相当に大なる堂数箇所あり。収入ある人及び此僧院の富裕なる信徒、信心の爲め同所に建築したるものなり。構内には坊主等の宿泊する家あり。市街の如く整然たるものにして、本堂より稍稍速く、各頗る立派にして、絵画樹木、其他見事なる物を備へたり。

と『耶蘇会士日本通信』にみえている。僧侶は370人も居住し、そこは深い幅のある濠がめぐらされ、正方形で小銃弾がとどかない広大なものであった。この濠については『本圀寺文書』中に、

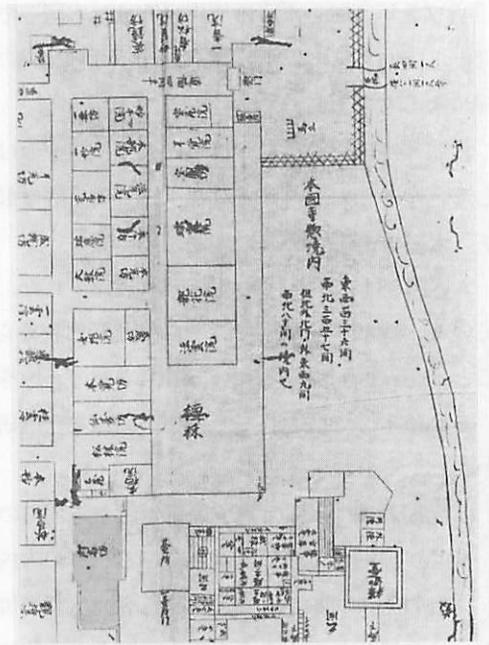
「信長公惣構土手寄附之時之状」

土手万端油断有間敷候、普請無油断之旨、委細心得候、近日可帰候、尚其節見物可申候、早々馳走尤候、かしく、

十一日

久太郎

と、永禄11年(1568)10月11日信長が堀秀政に書状を送っている。奥野高広氏は「自筆かもしれない」<sup>5)</sup>と言われた。濠を掘った土を土手として普請するわけで、我々が想像する以上に大規模であったろう。信長が入洛の折に本国寺を陣に用いていたのは前述の通りである。寺内は「市街の如く整然たるもの」であり、天文法華の乱の、防戦の一大拠点として、日蓮宗の団結を象徴した伽藍であった。本能寺の変の折、羽柴(豊臣)秀吉もこの寺を陣所<sup>6)</sup>に用いている。天正19年本願寺に一部割譲されたが、現在でも北は五条松原通り(猪熊通りに北門がある)、南は左女牛通り、東は堀川通り、西は大宮通り(樋口通りに西門がある)の旧寺内に多くの子院が遺っている。第62図、図版第24に掲げた平安博物館蔵『本国寺惣境内之図』(江戸末期の写



第62図 『本国寺惣境内之図』部分

2紙(縦31.1×94.2cm)によると、子院は北から掲げてゆくと、次のようになる。

- |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 一音院 | 看松坊 | 妙賢院 | 英鏡坊 | 本実院 | 福寿院 | 春不院 | 宝塔院 | 嶽松院 | 学不院 |
| 南林坊 | 松翁院 | 不性院 | 心亮院 | 不光坊 | 成就坊 | 善証院 | 玄乗坊 | 本照坊 | 実円坊 |
| 円心坊 | 玉昌坊 | 玉林院 | 一雲院 | 恵龍坊 | 桂雲院 | 妙干院 | 本龍院 | 法光院 | 本行坊 |
| 本光坊 | 大教院 | 瑠庇院 | 花陽坊 | 一妙院 | 一要坊 | 円龍院 | 本覚坊 | 仙寿坊 | 松林院 |
| 本栖院 | 久成坊 | 法雲院 | 龍花院 | 瑞雲院 | 宝園坊 | 不覚院 | 宝蔵院 | 青陽坊 | 是真坊 |
| 本妙院 | 林昌院 | 玉持坊 | 真如院 | 本義院 | 三知院 | 遠光院 | 吉祥院 | 十住坊 | 観持院 |
| 双林院 | 本住坊 | 成軌院 | 遠照坊 | 陽運坊 | 乘円院 | 仏乗坊 | 宝泉坊 | 教行院 | 本法院 |
| 高龍院 | 十乗院 | 乗澄坊 | 円教院 | 教蔵院 | 喜見院 | 多門院 | 本源院 | 常証坊 | 受潤院 |
| 蓮心院 | 英妙院 | 真乗坊 | 玄妙院 | 持珠院 | 万慶院 | 乘林院 | 観喜院 | 大雲院 | 戒善院 |

以上、子院の数は90ヶ寺にのぼり、本寺の境内には、本堂・釈迦堂・御影堂・台所・十羅利

女堂や多くの番所と行者部屋を始めとする宿坊があった。惣境内の面積は「東西百三十六間・南北三百五十七間・但此外北門ノ外東西九間・南北八十間ハ境内也」と記してある。

図には堀川に「長さ4間1尺、横は1間1尺5寸」の石橋が掛けられているのみである。東に堀川、他の三方には子院を置いているようすは洛中における、要害の地としての面影が遺されている。

#### 註

- 1) 森田恭二「中世京都法華『寺内』の存在—六条本国寺を中心として—」(『ヒストリア』第96号, 大阪, 昭和57年)21頁。
- 2) 経蔵(重要文化財指定, 慶長12年加藤清正建立)。
- 3) 京都市編『史料京都の歴史』2 考古(東京, 昭和58年)144頁。
- 4) 玉村登志夫「中世の京都—室町時代の京都—」(『講座考古地理学』3 所収, 東京, 昭和60年)94頁。
- 5) 奥野高広『織田信長文書の研究』下巻(東京, 昭和44年)214頁。
- 6) 『兼見卿記』天正10年7月10日条。

#### 付節 本圀寺文書について

本圀寺の古文書は、東京大学史料編纂所が2回探訪を行ない、影写本2冊として架蔵している。

第一回目は1冊目(請求番号3071.62-50-1)で、奥附に

右本圀寺文書 十一通

本圀寺ハ京都下京区柿本町ニ在リ明治十九年

八月編修星野恒探訪明年七月影写了。

とある。次に、明治20年5月に『本圀寺器物目録』(請求番号2060-30)1冊を書写架蔵した。これは、

享保(11年5月)年中

武藤四郎右衛門

以 御意京都大寺之

靈宝古記御尋ニ付、目録

相認差上ル扣也。日達(花押)  
廿六世

との識号がある本である。

さらに、第二回目の古文書の探訪は、2冊目(請求番号3071.62-50-2)で、奥附に

二冊目、七七点(文書七六点、書蹟一点)

大正九年五月影写。

とある。

本文書は玉石混淆である。上記の目録の年号の頭の部分に「\*」記号を附したのは、影写本に朱筆で「偽」とある文書で、「△」は疑問あるとするものである。しかし、戦国期以降にみるべき文書がある。

東京大学史料  
編纂所探訪 本圀寺文書目録

## 第一回探訪

1. 永禄12年8月11日付室町幕府奉行人連署奉書。
2. 3月26日付三淵大和守藤英書状。
3. 天正13年11月20日付豊臣秀吉朱印状。
4. (慶長2年カ)2月17日付長束大蔵大輔正家書状。
5. (永禄年間カ)8月20日付(竹内秀治カ)書状。
6. (寛永年間カ)9月25日付板倉重宗書状。
7. (永禄年間カ)9月14日付日隆書状。
8. (永禄年間頃)10月3日付日体・日継連署書状。
9. 7月28日付長遠寺自実書状。
10. (明暦2年～寛文7年)8月28日付久遠寺日尊・本門寺日豊連署書状。
11. 元文元年9月11日付北小路治部大輔奉書。

## 第二回探訪

1. \*嘉暦3年11月21日付後醍醐天皇繪旨。
2. \*建武4年7月6日付光厳院院宣。
3. \*貞和元年3月7日付光厳院院宣。
4. \*貞和4年5月15日付光明院繪旨。
5. \*正月13日付光明院繪旨。
6. \*3月17日付光明院繪旨。
7. \*8月24日付光明院繪旨。
8. \*10月27日付光明院繪旨。
9. \*觀応2年5月4日付崇光院繪旨。
10. \*文和3年10月3日付後光厳院繪旨。
11. \*正平20年11月25日付後村上天皇繪旨。
12. \*6月14日付後円融天皇繪旨。
13. \*応永5年2月10日付後小松天皇繪旨。
14. \*応永24年2月7日付称光院繪旨。
15. \*永享5年10月3日付後花園院繪旨。
16. \*明応8年6月20日付後土御門院繪旨。
17. \*永正7年8月14日付後柏原院繪旨。
18. (大永3年)8月7日付後奈良院繪旨。
19. \*5月2日付正親町院繪旨。
20. \*11月27日付後陽成院繪旨。
21. \*12月24日付後水尾院繪旨。
22. △寛永19年11月16日付明正院繪旨。
23. △正保2年9月23日付後光明院繪旨。
24. \*3月29日付後西院繪旨。
25. 寛延元年7月21日付桃園院繪旨。
26. 宝暦12年12月1日付後桜町院繪旨。
27. \*3月28日付鳳詔案。
28. \*霜月11日付日蓮伊豆赦免状。
29. \*9月12日付日蓮龍口赦免状。
30. \*文永10年後5月28日付日蓮土籠赦免状。
31. \*文永11年2月14日付日蓮赦免状。
32. \*5月7日付平頼納書状。
33. \*弘安5年10月3日付讓状。
34. \*元応元年10月13日付讓状。
35. \*貞治3年2月8日付讓状。
36. \*応永16日閏3月28日付讓状。
37. \*永(享21カ)年正月   付讓状。  
(破損)
38. \*寛正7年正月16日付讓状。
39. △長享3年7月20日付讓状。
40. 明応7年11月3日付讓状。
41. 永正3年閏11月19日付讓状。
42. 永正18年6月10日付讓状。
43. 大永2年12月24日付讓状。
44. 天文22年7月15日付讓状。
45. 天正6年卯月5日付讓状。
46. 文禄5年卯月27日付讓状。

- 47. 元禄3年8月13日付讓状。
- 48. 元禄11年仲春日付讓状。
- 49. 建武3年11月26日付足利尊氏寄進状。
- 50. 建武5年3月日付足利義詮禁制。
- 51. \*貞和4年6月3日付足利尊氏禁制。
- 52. \*観応2年2月27日付足利尊氏御内書。
- 53. 12月29日付足利尊氏卷数返状。
- 54. 享徳元年11月13日付室町幕府奉行人連署奉書。
- 55. 3月11日付晴元書状。
- 56. 12月14日大館左衛門晴光書状。
- 57. 8月7日付三好長慶書状。
- 58. 3月6日付松永久秀書状。
- 59. 8月18日付松永久秀書状。
- 60. \*4月22日付某書状。
- 61. (永禄11年10月)11日付織田信長書状。
- 62. 永禄12年8月11日付柴田勝家書状。
- 63. 10月8日付毛利輝元書状。
- 64. 8月11日付奉行人連署奉書。
- 65. 3月12日付増田長盛書状。
- 66. 10月19日付施薬院全寮・増田長盛連署書状。
- 67. 5月12日付然休書状。
- 68. 慶長16年12月26日付藤堂高虎書状。
- 69. 12月26日付藤堂高虎書状。
- 70. 元政上人卷子。
- 71. 正月11日付徳川光圀書状。
- 72. 2月25日付徳川光圀書状。
- 73. 6月4日付徳川光圀書状。
- 74. 6月5日付徳川光圀書状。
- 75. 7月28日付徳川光圀書状。
- 76. 10月28日付徳川光圀書状。
- 77. 12月8日付徳川光圀書状。

他に『本圀寺志』1冊(請求番号6115-57),『本圀寺年譜』15冊(請求番号2015-330)等が編纂所に架蔵されている。

また、本圀寺文書中に寺と関係のない文書ではあるが、貴重な文書2点が含まれているので、ここで全文を紹介する。

『足利尊氏寄進状』1通(目録番号49)。

(コノ處文字ヲ抜キタル痕アリ)

寄附 

石見国永久郷	小石見郷	津毛郷
正見別符	福屋郷	久利郷
用田郷	太田南方	上出羽郷
下出羽郷		
安芸国吉茂郷	久芳保	下品地郷
志波庄	志芳庄	能見庄
秋光保	多治庄	大朝庄
郡戸郷		
美作国青柳庄	栗倉庄	

以上貳拾貳ヶ所

62 付節 本圀寺文書について

右当寺造営之間，奉寄之状如件，

建武三年十一月廿六日源朝臣(花押)

この文書は圀城寺文書と思われる。他の1つは，

『足利義詮禁制』1通(目録番号50)。

(コノ四字黒ヲ抜キテ入筆シタル痕アリ)

「法花道場」(花押)

右軍勢并甲乙人等，不可致乱入狼籍

違犯之輩者，可處重科之状如件，

建武五年三月 日

である。

## おわりに

今回の調査では前述のように、弥生時代から現代にいたる様々な遺構・遺物が検出された。検出された遺構・遺物を時期によって大別すると、第2章で分けたように、弥生時代、平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代の4時期になり、そして各時期の特徴がそれぞれ異なっていることが注意される。ここでは各時期の様相を再度整理して、まとめにかえたい。

弥生時代の調査地付近は、北東から南西に流れる自然流路があった(A区溝2)。この流路は緩やかではあるが、常時ある程度の水流があったようで、淀みのような粘質土の堆積は認められなかった。また流れの方向は、現在の地形図等高線の傾向とも合致する。流路内から出土した土器類はいずれもかなり磨滅しており、上流から流されてきたものと思われる。調査地内では住居等の遺構は検出できなかったが、今度の周辺部の調査において弥生時代の遺構等が発見される可能性は充分にあると思われる。

平安時代では井戸が検出されたことから、この地が生活空間であったことがわかる。ただしいずれの井戸も平安時代の後半期に属すると見られ、それ以前については明らかではない。前述のように、調査地は左京六条二坊六町の堀川小路に面した部分と推定される(第1図)。六町内の宅地割りがどのようになされていたかわからないが、仮に四行八門制であれば第2図中のO・P・Q・Rの範囲が「西四行北四門」にあたり、P・Qを結ぶ線が六町の南北を2分する線になる。井戸の分布を見ると、この線の北側に添ったように数基が並び、2分の1町は意識されていたように思われる。ただ、A区井戸5・6はこの線の南北に分かれるが、同範の軒瓦が出土するなど、少なくとも12世紀前半の段階では、調査地内は同一の敷地であったように考えられる。

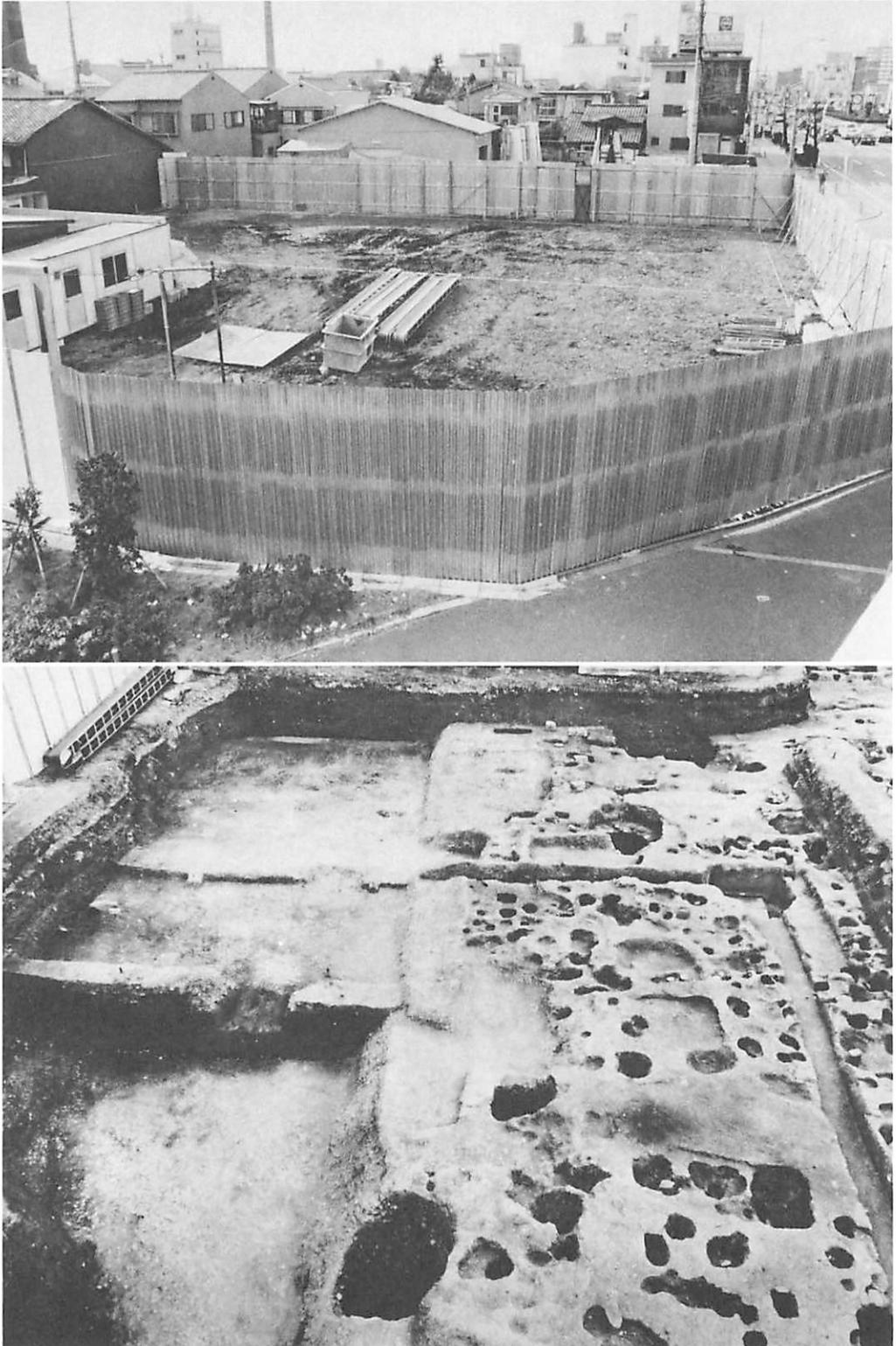
鎌倉時代になると、この地は墓地的な様相を呈してくる。検出された多くの土坑がすべて墓とは断定できないが、類例から見て、平面が長方形を呈するものや、円形のもののが大半が墓と考えられる。土坑の年代は13世紀前葉から(d-6土坑2など)、14世紀中頃(c-6土坑2など)にかけての時期にほぼ限られるようで、14世紀後葉以降のこの種の土坑は認められなかった。

変って14世紀後葉以降では、A区溝1や掘立柱の建物が土坑を切って多数つくられるようになる。柱穴については遺物が乏しいため必ずしも時期を限定できず、A区中央部の西端のように土坑とともに建物があったように見られる部分もあるが、その他の部分では「墓地」以降に営まれたようである。そしてこの時期は第3章で触れられたように、本国寺がこの地に移転してきたと伝えられる時期とも符合する。文献の上ではそは時期の移転にやや疑問の点もあるが、発掘調査の結果からはその可能性が大きいと考えられる。本国寺が移転当初より12町を占めていたかは問題が残るが、墓地のような場所であったために、ある程度の広さを確保できたとも考えられよう。この時期以来、調査地内は本国寺の境内地であり、今回の江戸時代頃の遺物に

は、仏花器や香炉、小仏など寺院にかかわる遺物が多く含まれている。

今回の調査にあたっては、現場中から本報告書の作製まで多数の方々の御教示、御援助を得た。発掘調査中は、下 嘉明氏はじめ株式会社下嘉商店の方々には社屋の一部を調査事務所として提供していただき、清水建設株式会社の水野勝治氏、鈴木貞治氏にも諸々の便宜を計っていただいた。また新日本航測株式会社の内田賢二氏よりは条坊に関する御教示をうけている。なお、京都市埋蔵文化財調査センターの玉村登志夫氏には終始お世話いただき、財団法人京都市埋蔵文化財研究所よりは条坊に関するデータ等の提供をいただいた。さらに、本書作製の終盤には平安博物館の片岡 肇、南 博史、山田邦和、水口 薫各氏の大きな援助もいただいた。末尾ながら厚く感謝の意を表するしだいである。

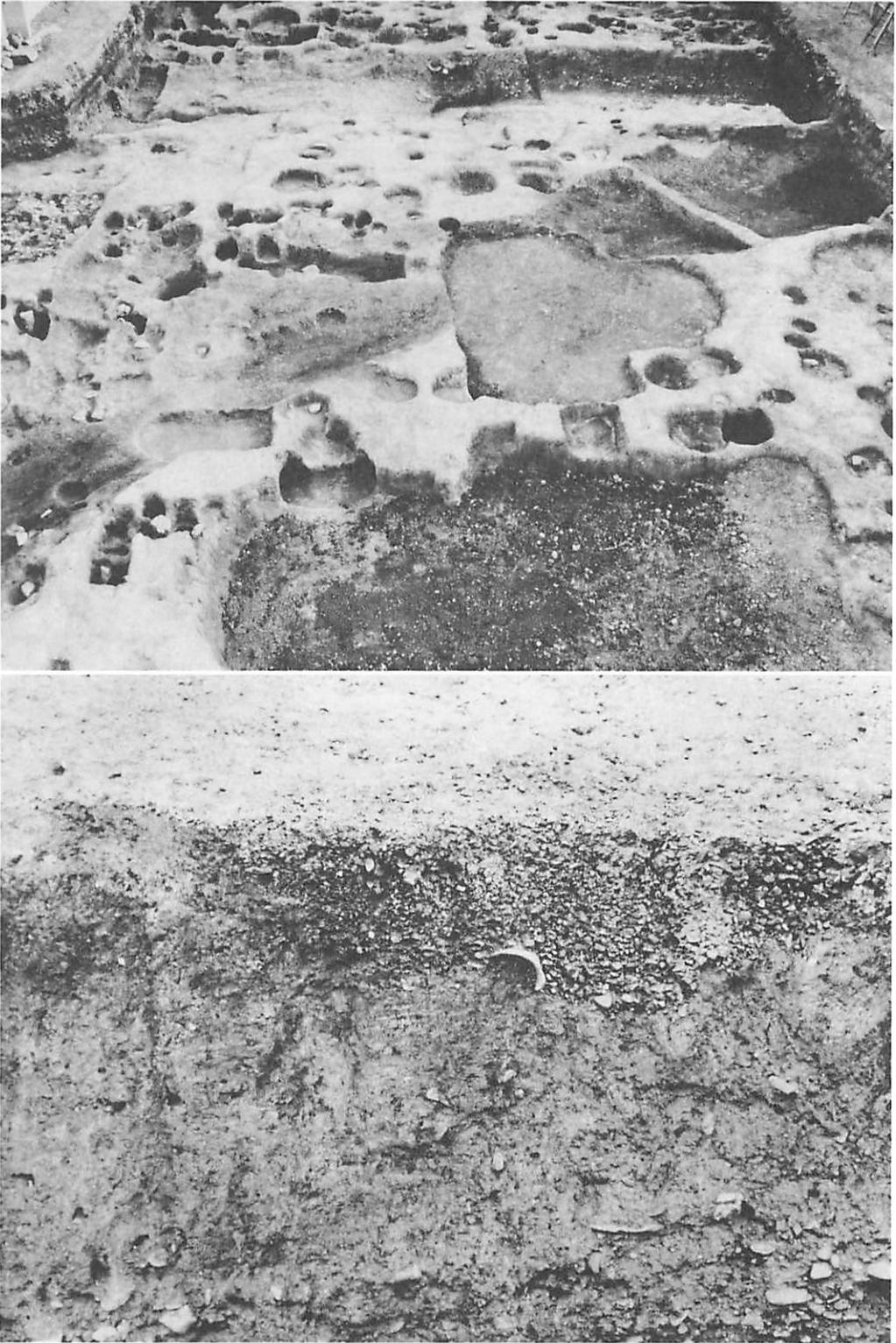
# 圖 版



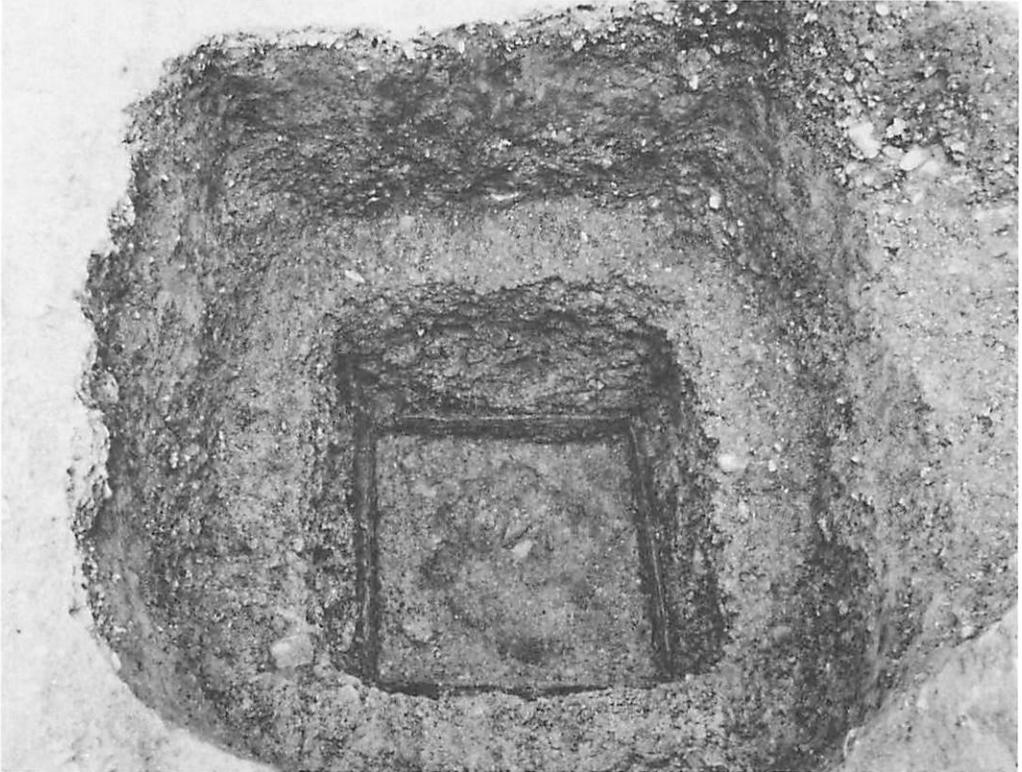
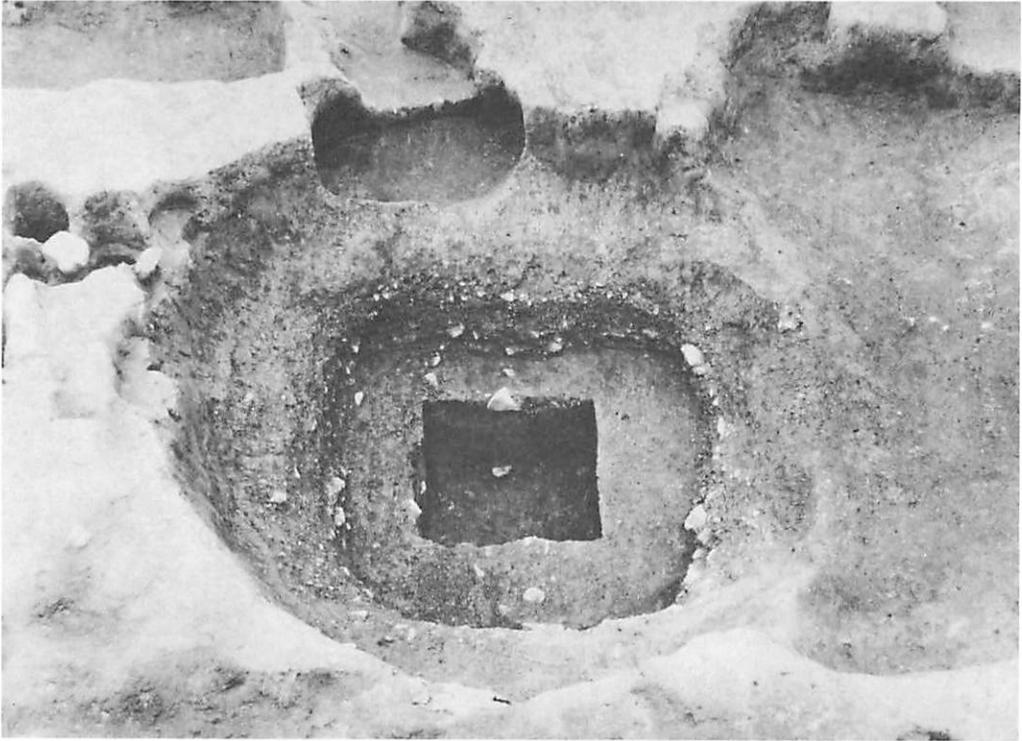
上：調査地全景(調査前，東より) 下：東半部完掘状況(北より)



上：北西部完掘状況(南より) 下：南西部完掘状況(北より)



上：A区溝2全景(北より) 下：同，断面土器出土状況



上：A区井戸5(北より) 下：A区井戸6(西より)



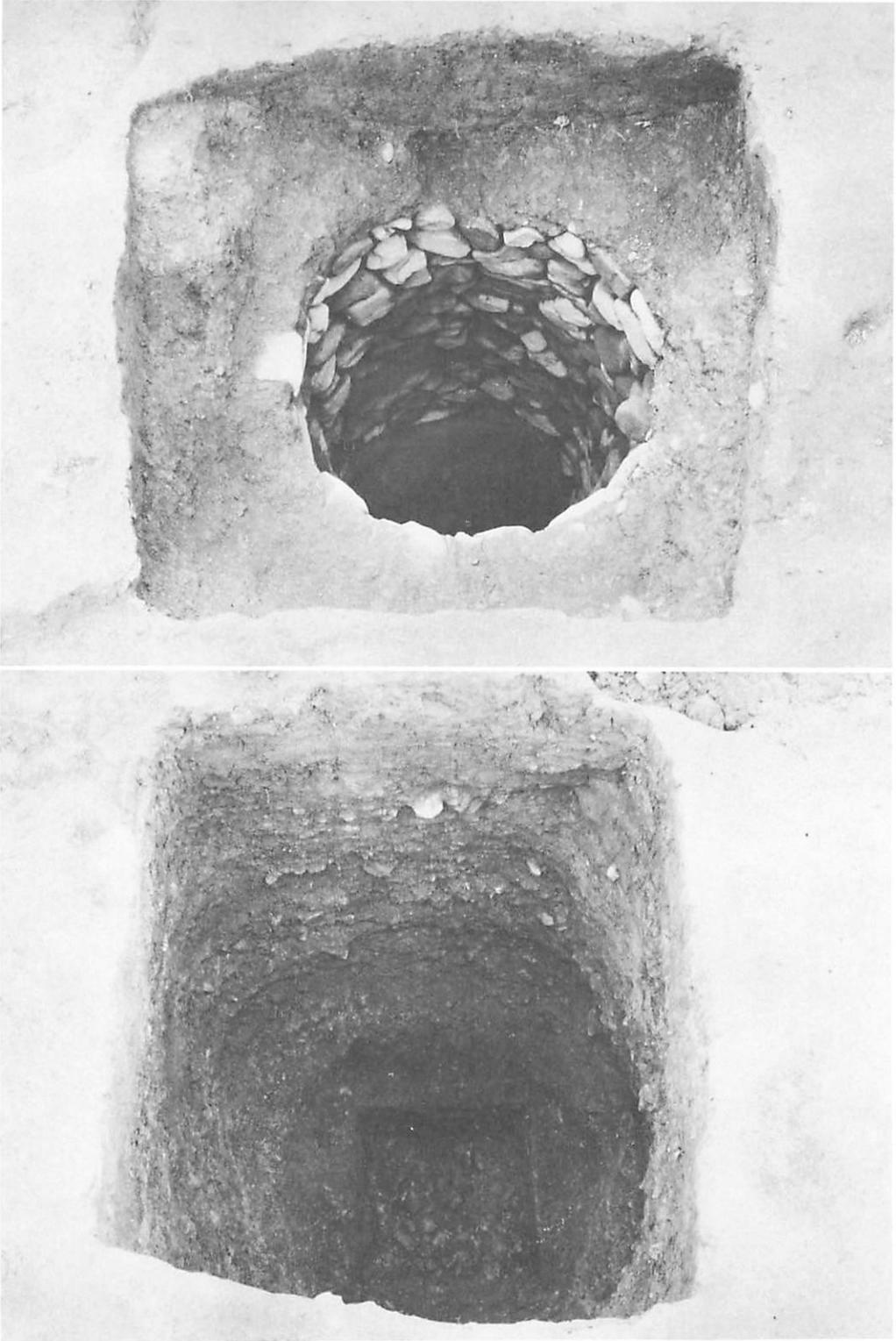
上：A区井戸4，上層遺物出土状況(東より) 下：同，完掘状況(西より)



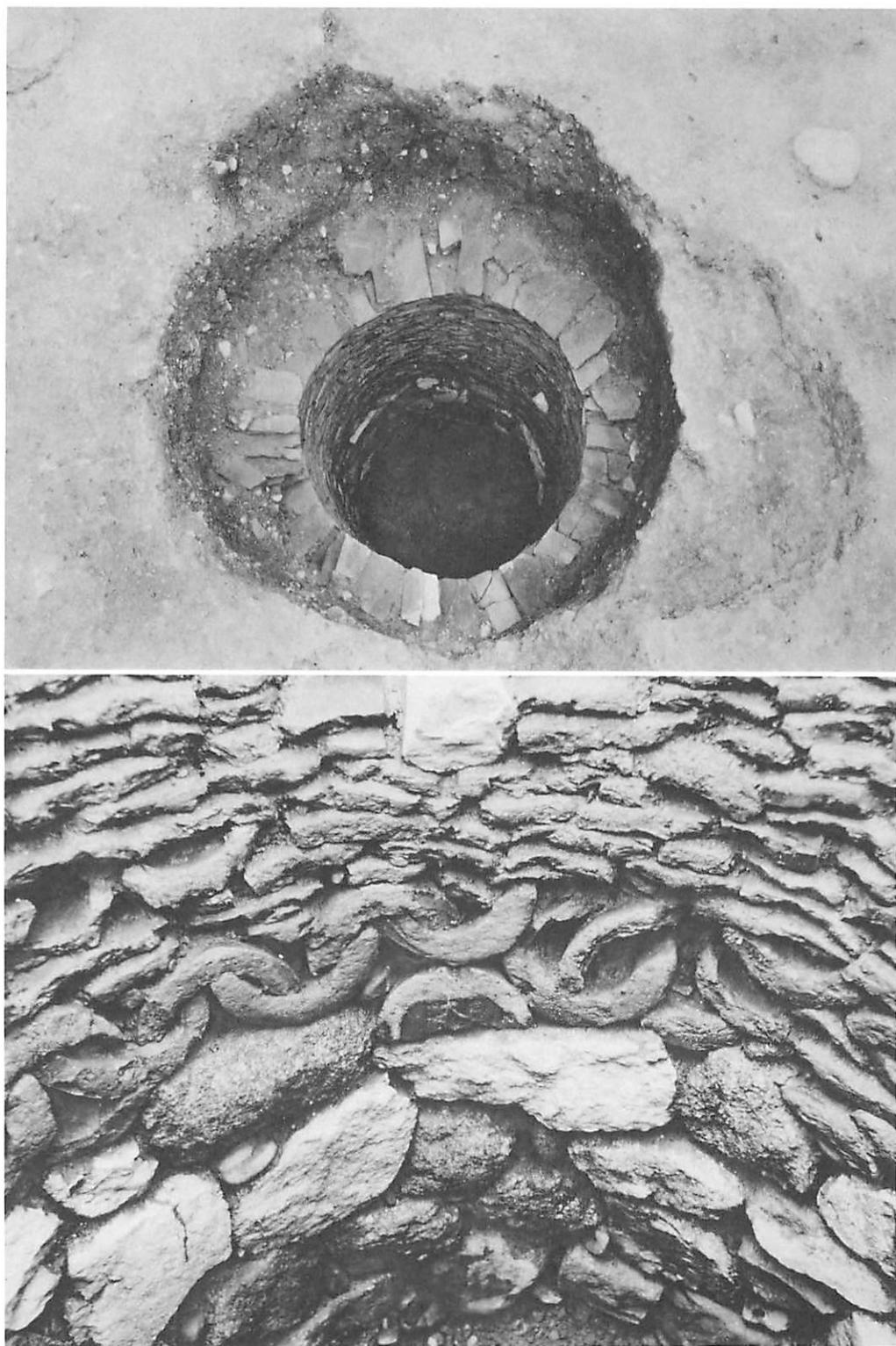
上：B区井戸5(南より) 下：B区井戸4(北より)



上：B区井戸2(北西より) 下：同，木枠残存状況(東より)



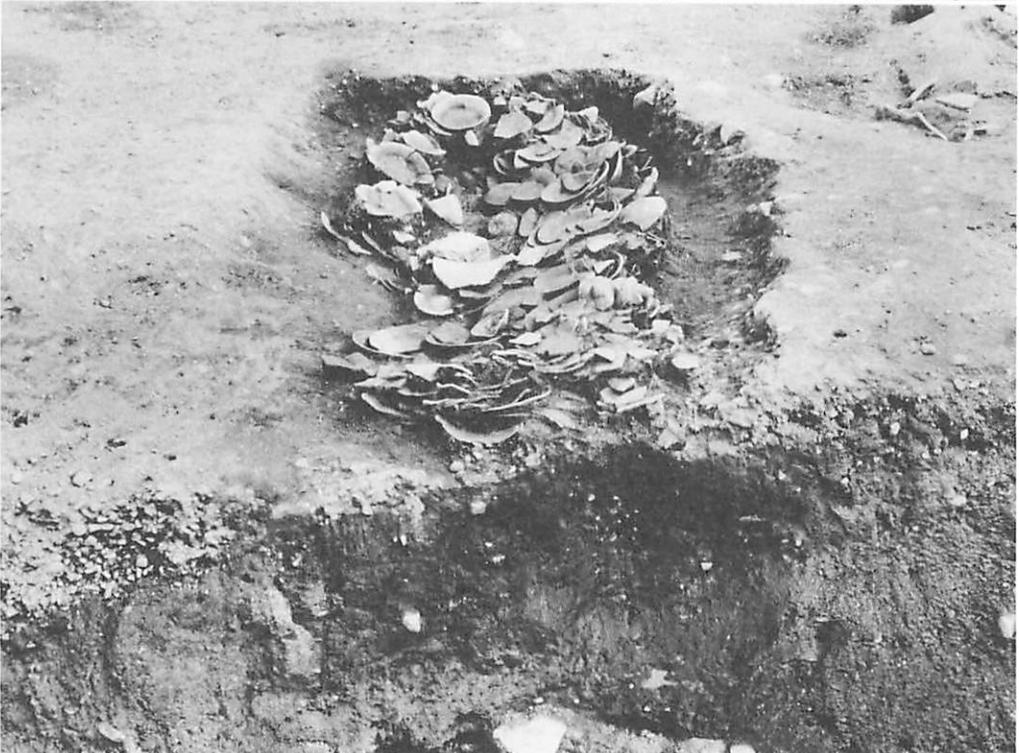
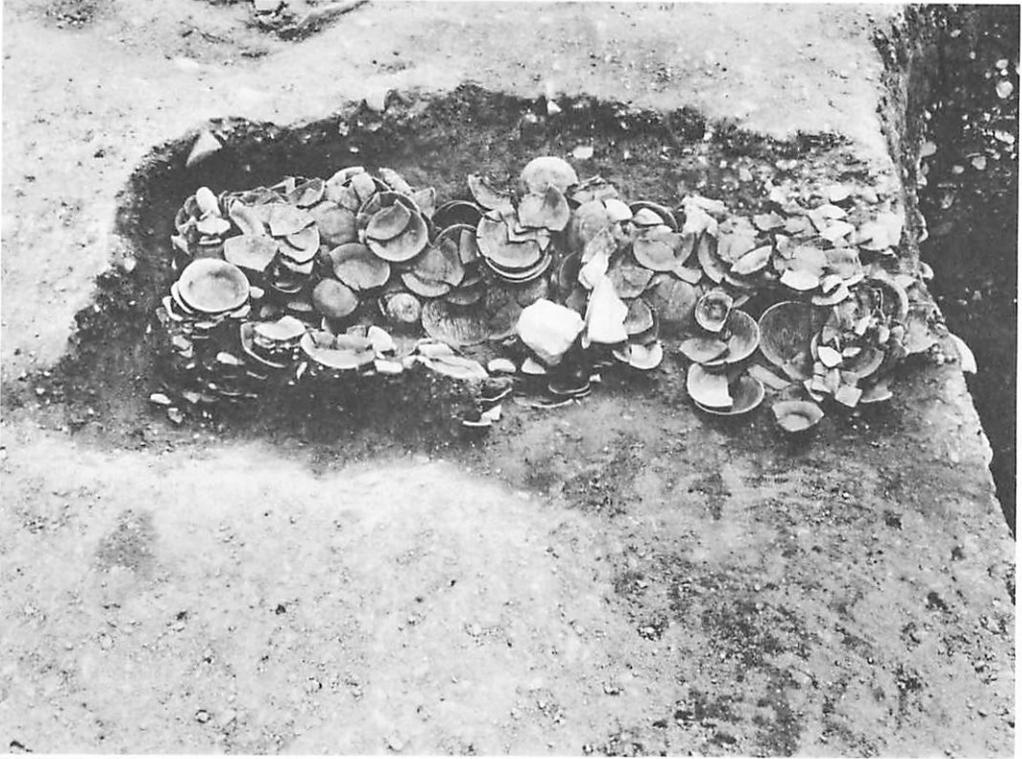
上：A区井戸3(北より) 下：同，完掘状況(西より)



上：B区井戸1(北より) 下：同，内部(南より)



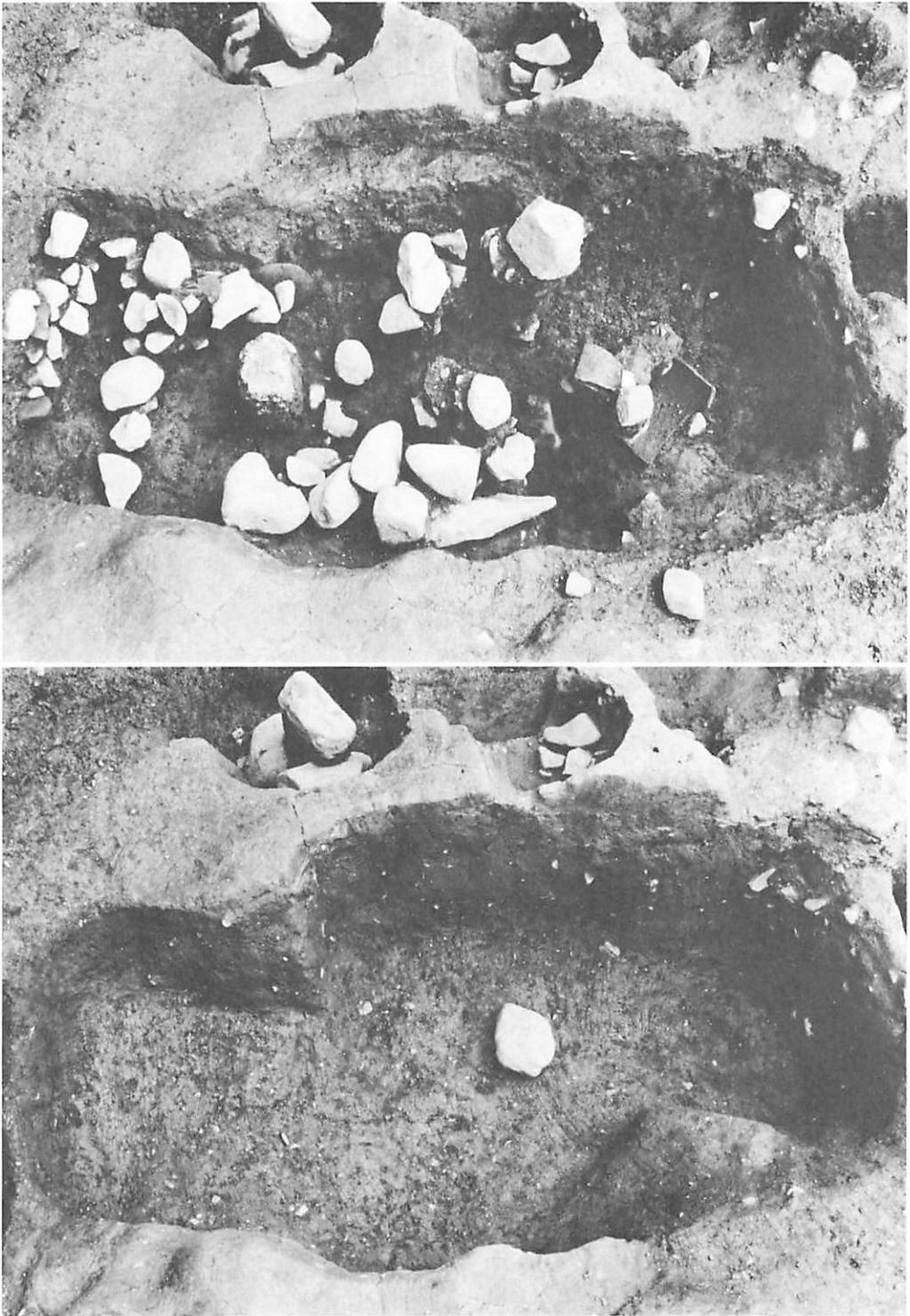
上：d-6土坑2，遺物出土状況(北より) 下：同，完掘状況(北より)



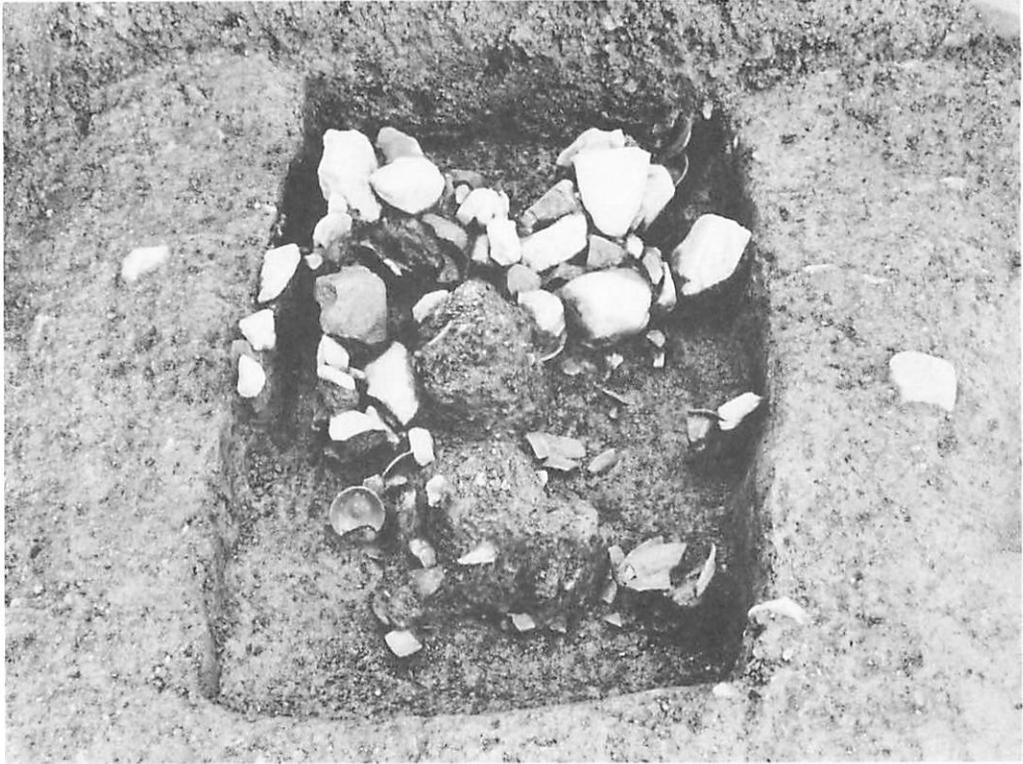
c-6 土坑2，遺物出土状況(上：北より，下：西より)



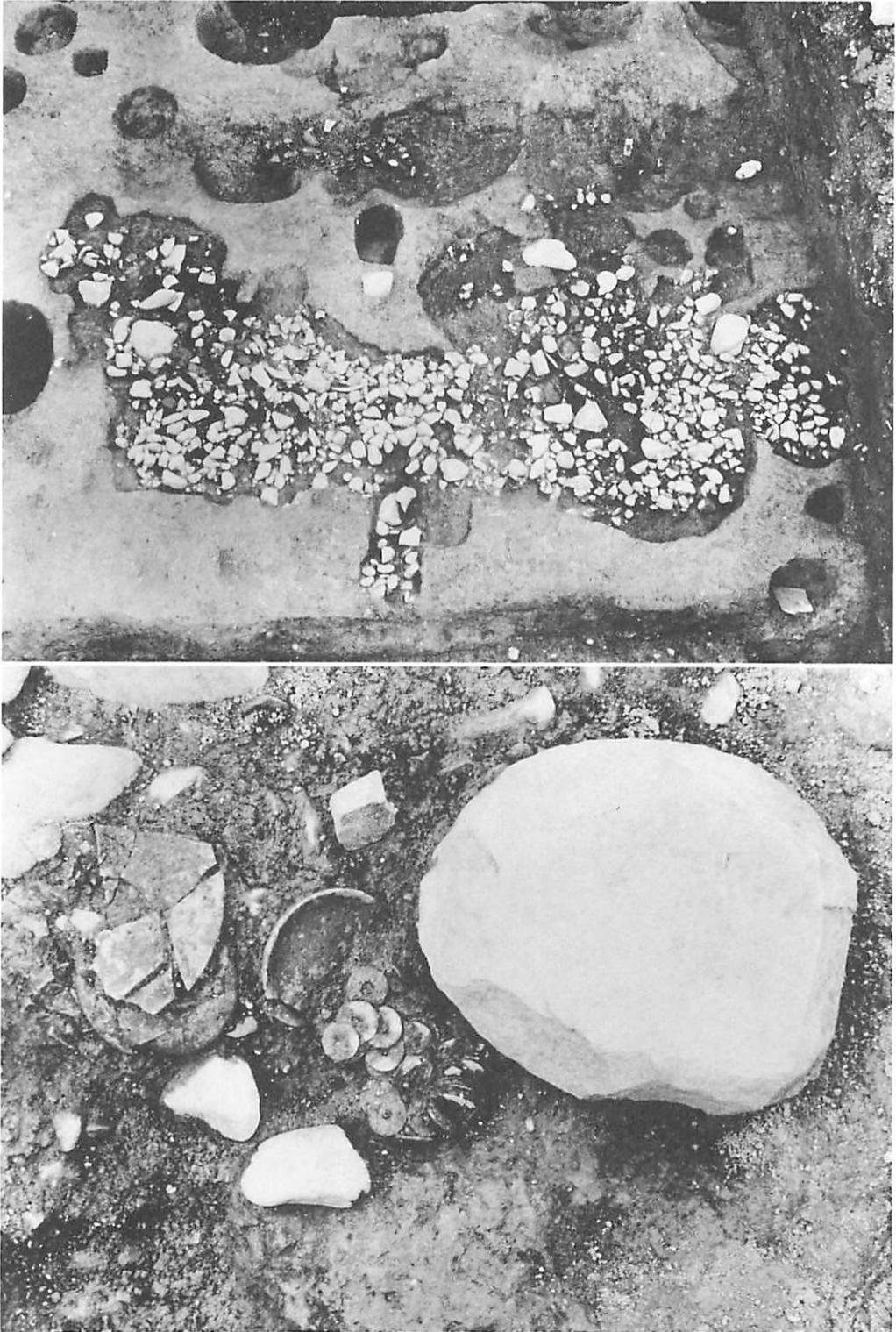
上：c-7土坑1・2，遺物出土状況(北より)  
下：c-7土坑1，刀子出土状況(北より)



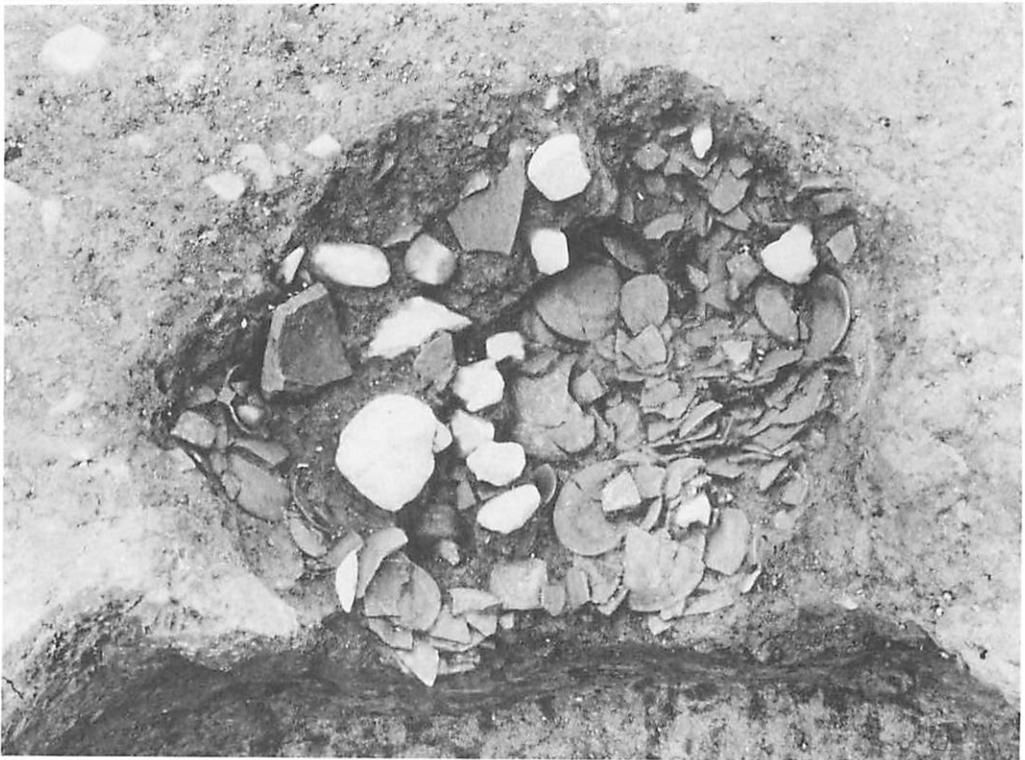
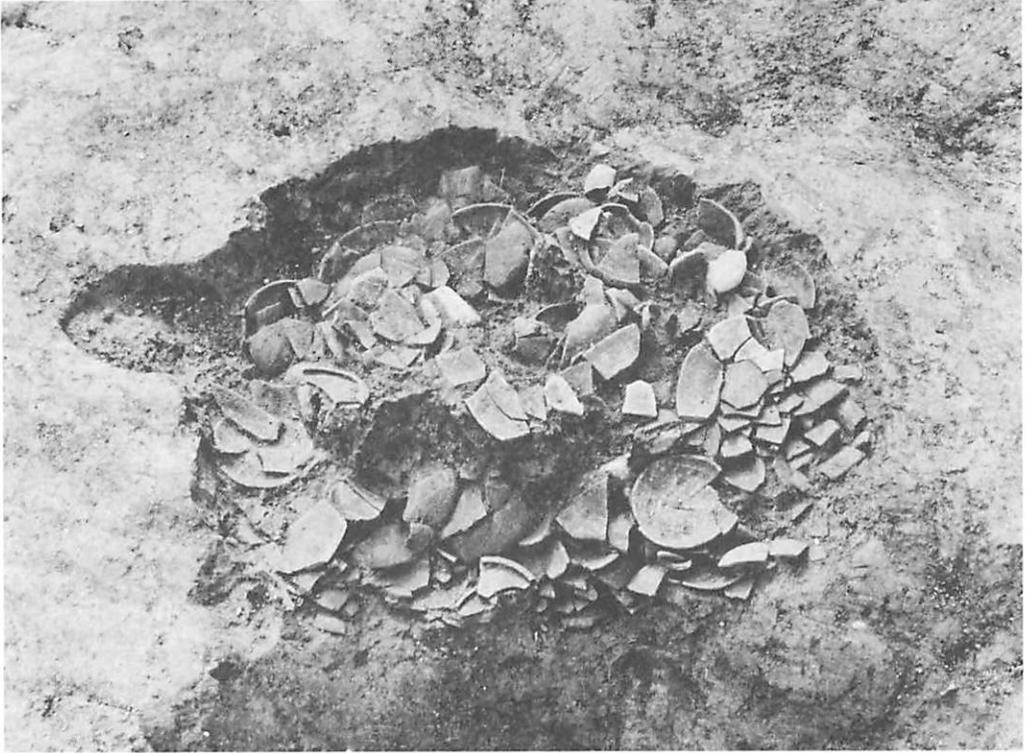
上：d-8 土坑 5，遺物出土状況(北より) 下：同，完掘状況(北より)



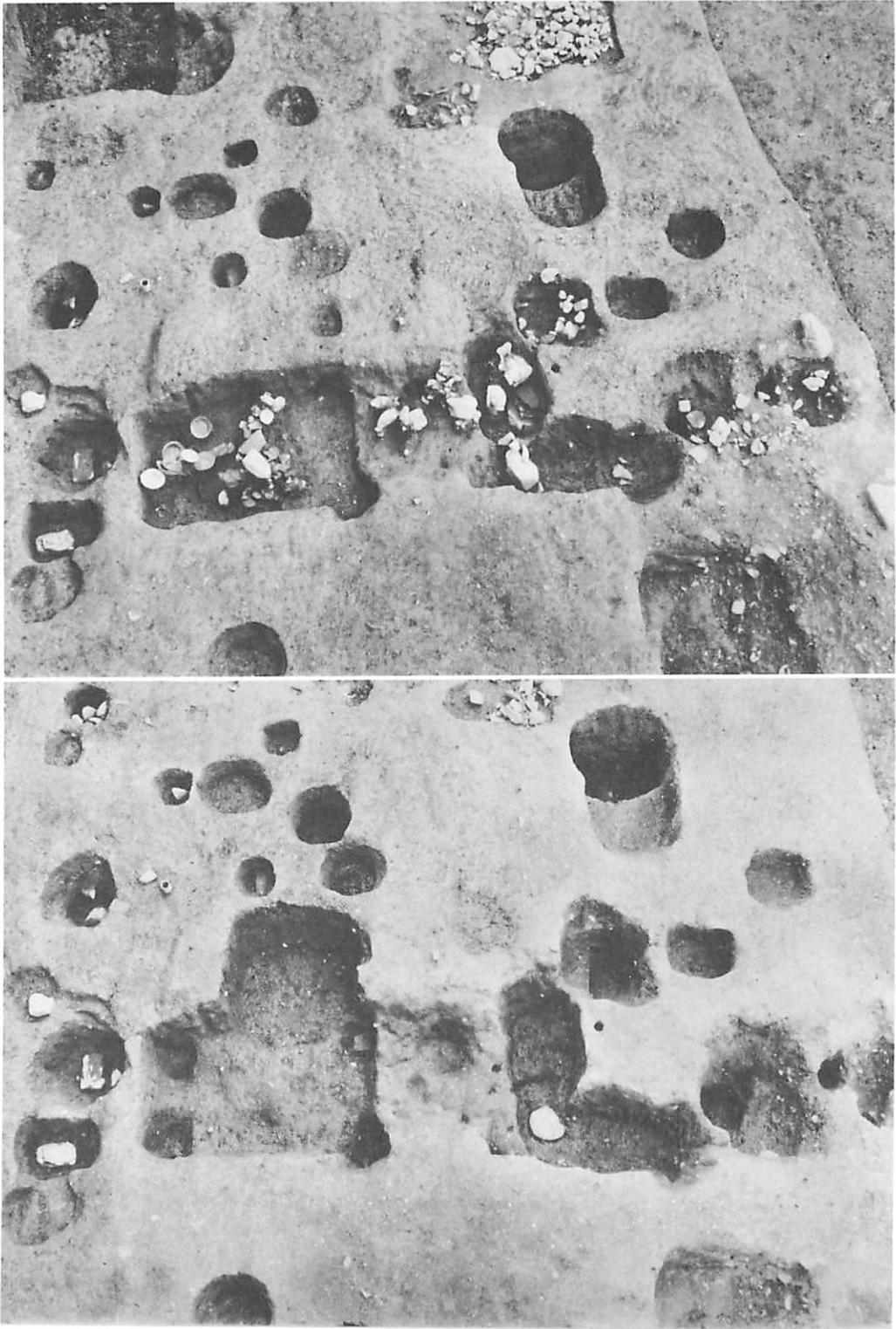
上：d-9 土坑1，遺物出土状況(北より)  
下：c-8 土坑1，遺物出土状況(北より)



上：d-8土坑群(北より) 下：同，銅銭出土状況(南より)



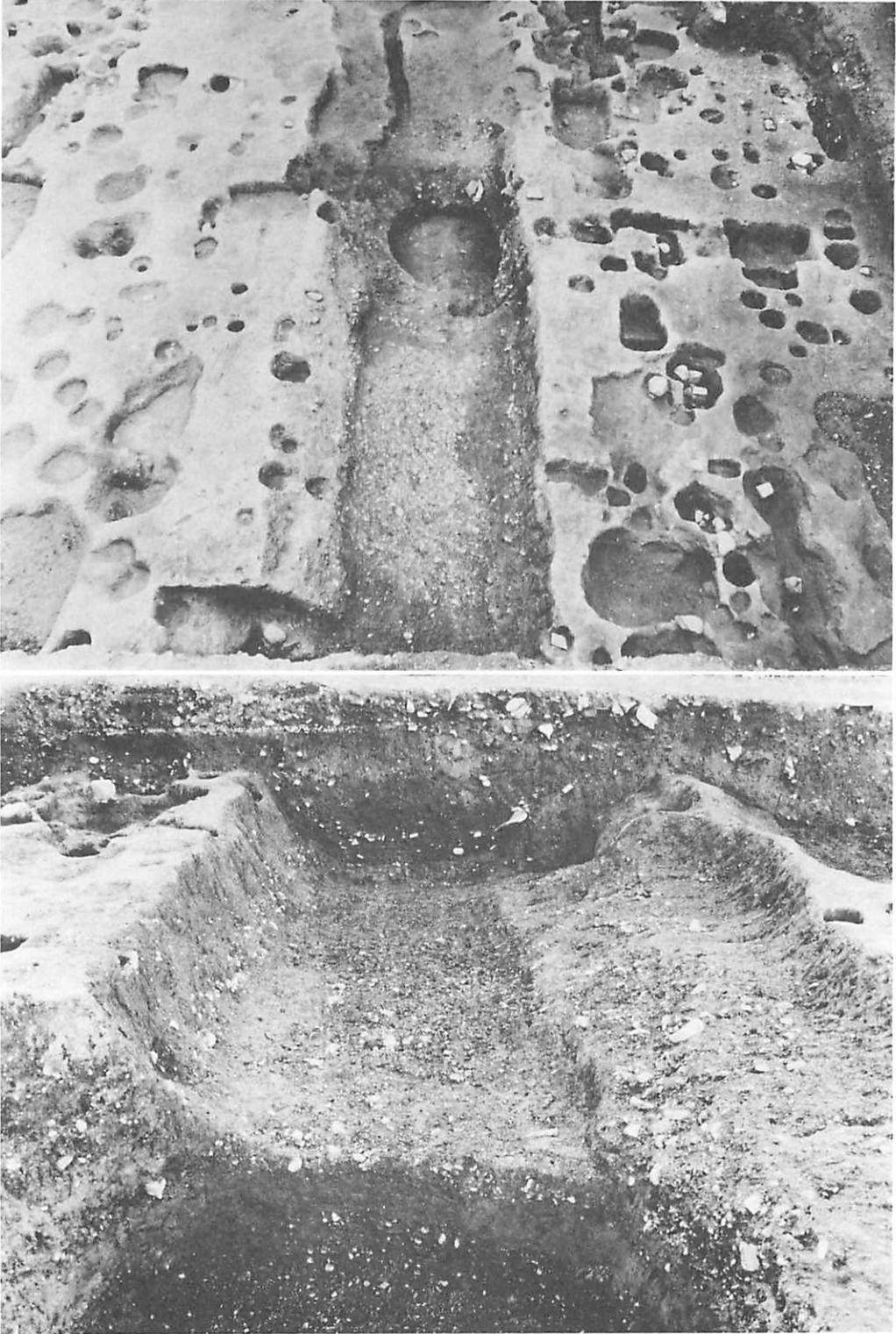
上：c-4 土坑3(北より) 下：c-5 土坑2(北より)



上：d-9 土坑群，遺物出土状況(東より) 下：同，完掘状況(東より)



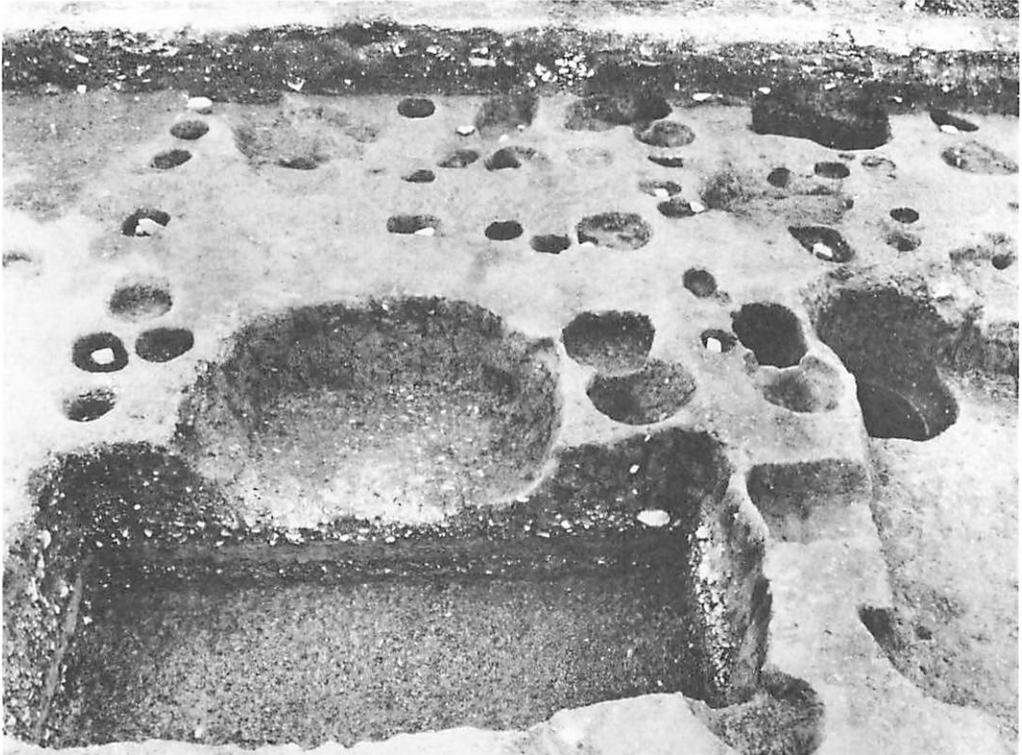
上：c-3土坑2(東より) 下：e-5土坑2(東より)



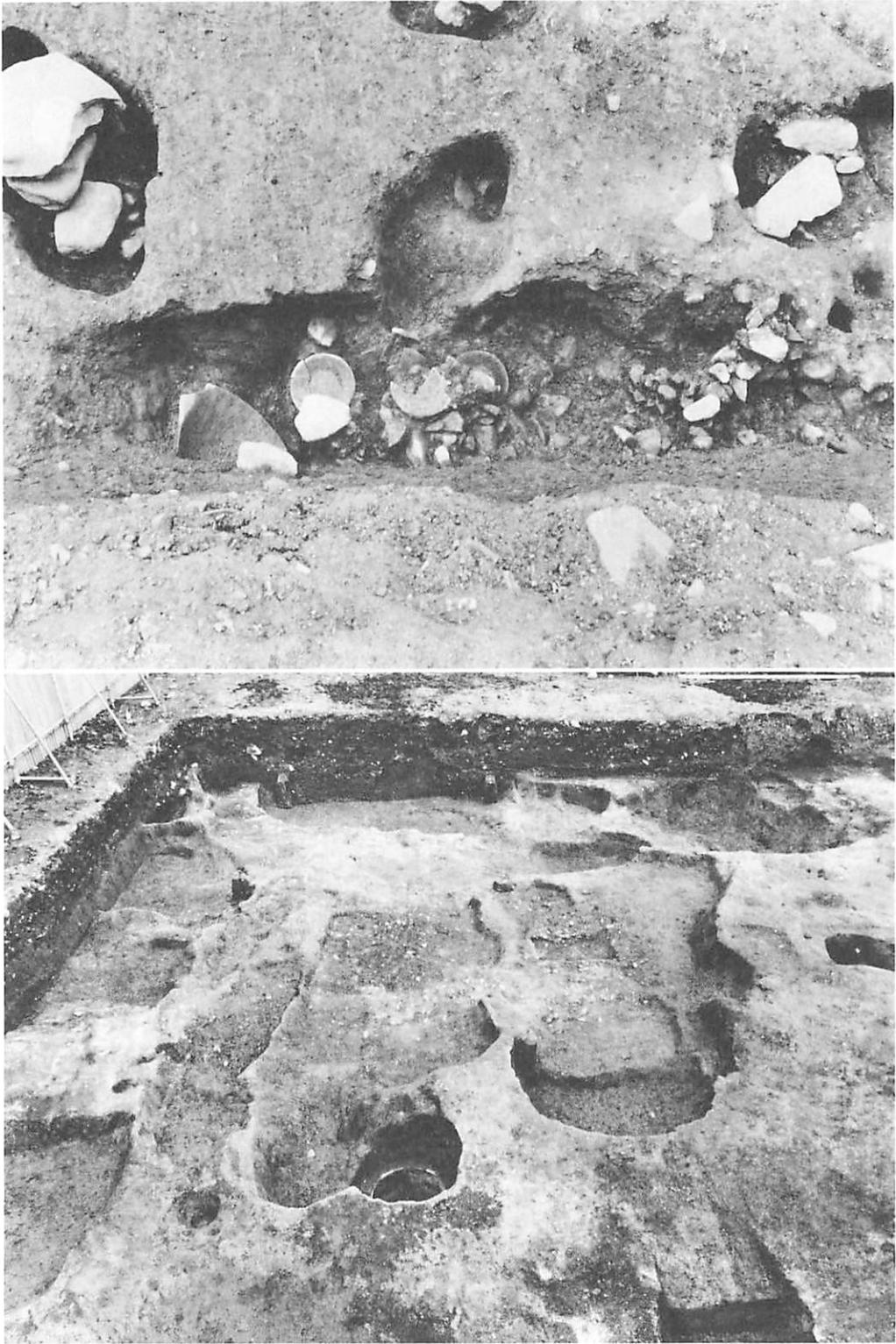
上：A区溝1(西より) 下：同，完掘状況(東より)



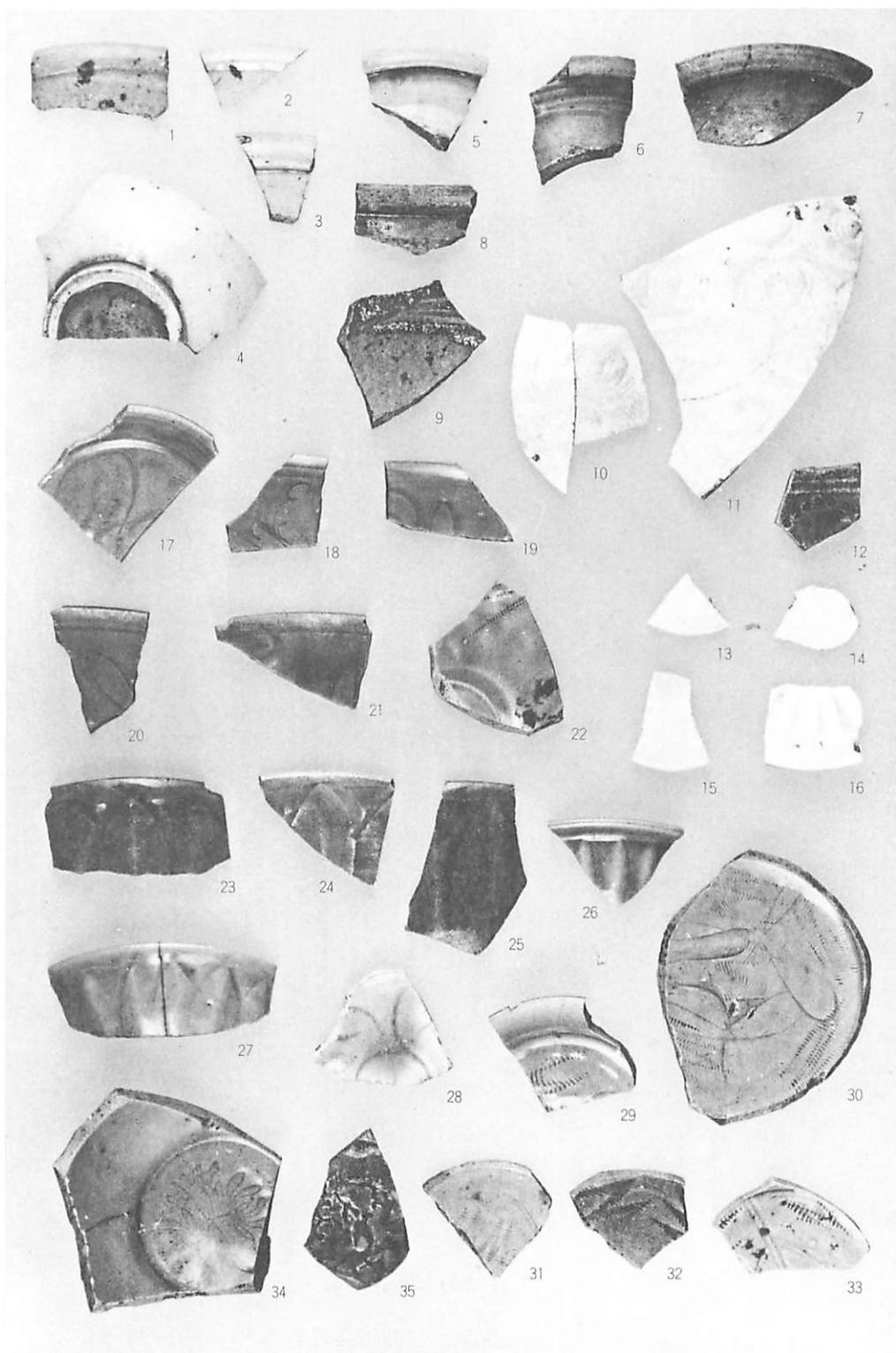
上：A区溝1，断面(西より) 下：同，下顎骨出土状況(北より)



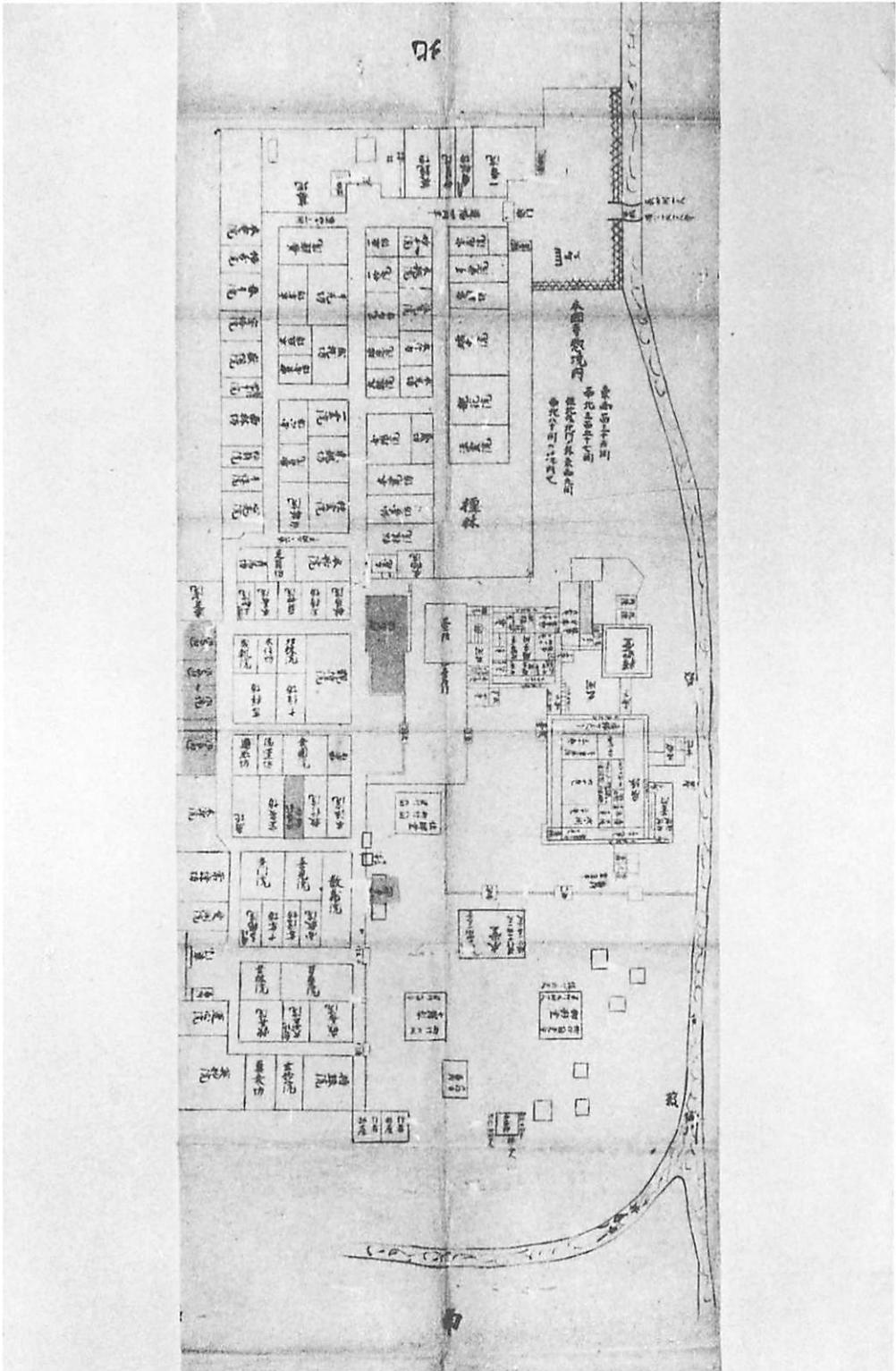
上：b-5・6区付近，柱穴遺構(東より)  
下：d-6区，柱穴切合い状況(北より)



上：c-9 土坑2，遺物出土状況(南より) 下：A区北部，土採取坑(西より)



出土輸入陶磁器類



本國寺惣境内之図(平安博物館蔵)

---

平安京跡研究調査報告 第17輯

平安京左京六条二坊六町

発行日 昭和61年3月31日  
編集 平安博物館考古学第4研究室  
植山 茂  
発行 財団法人古代学協会  
604 京都市中京区三条高倉  
TEL. 075(222)0888  
振替京都8-850番  
制作 ビクトリー社  
604 京都市中京区油小路通錦上ル  
TEL. 075(221)1420

---

*PALAEOLOGICAL STUDIES*

*IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XVII*

EXCAVATIONS AT THE SIXTH  
INSULA, REGIO II , DECUMANUS VI  
IN THE PARS ORIENTALIS OF  
THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXVI